

「私が直す！」

戸塚 宏 発行者 土井尚道 発行所 (株)飛鳥新社

I 章 体罰はタブーか

他人を平気で攻撃する。非行にはつねに他人に対する甘えがある

私は、この本の中で事実だけを語ろうと思う。

今、私の周囲にはあまりにも事実とかけ離れた情報が渦巻いています。非難、中傷、嫉妬の数々。戸塚ヨットスクールは暴力の巣窟であるといい、そこでは日々、子供達に対するリンチが行なわれているという、そういう情報が洪水のように流されているのを見て、私は暗い気持ちにならざるをえません。人間には"事実"を見る力がないのか？そんなはずはないと思いつつも、あまりに的外れな情報が多いことに気づくとき、世の中いたい、どうなっているのかと思ってしまうのです。

私がしていることは、複雑なことではありません。

私は、1977年にヨットスクールを開校しました。学校法人ではありません。「株式会社戸塚ヨットスクール」です。なぜ、学校法人ではないのか？申請しても認められないからではありません。認められるにしても私は学校法人にしようとは思いません。学校法人となることによって、あまりにも問題の多い教育基本法の制約を受けざるをえなくなるし、また、あまりにも問題の多い文部省の管轄に入らざるをえないからです。

私は、それを拒否します。子供達にとって何が本当に必要なのか、真剣に考えれば考えるほど拒否せざるをえなくなります。私には、ニセモノであることを知って、子供達に虚偽の教育を押しつけることができません。

開校以後、現在までに約700人の子供達を戸塚ヨットスクールに迎えてきました。いずれも、どこかに問題を抱えている子供達です。およその内訳を言えば、初期の頃は非行45%、登校拒否・家庭内暴力45%、そして無気力症が10%です。最近は無気力症の子供が増え、全体の40%近くを占めています。そして

戸塚ヨットスクール

非行、登校拒否・家庭内暴力がそれぞれ30%ぐらいです。もちろん、以上の3つの分類は厳密な区別ではなく、非行タイプでも無気力の傾向を合わせ持つ子供がいたり、非行と家庭内暴力が一緒だったりというのが現状です。

そして、私は彼ら、エモーショナル・トラブルド・チルドレン(エモーショナル・ディスタークト・チルドレンとも言う。日本語では、一般に情緒障害児と訳されている)を直し、社会に送り返してきました。

それが、基本的な事実です。

一人一人がどういうケースだったのか、そしてどこに問題があり、どういうプロセスを通じてヨットスクールを卒業していったのか、その詳細は後に書きます。

ここでは、ヨット訓練を通じて子供達に、"何か"をつかませたのだ、とだけ言っておけばいいでしょう。

なぜ、ヨットなのか？

陸上に生きる人間にとって、海に出ることはそれだけで危険を意味します。その危険に自らの意志で立ち向かおうしなければ、即、それは死につながってしまいます。しかし、ヨット自体は危険な乗り物ではありません。小さなヨットが太平洋に乗り出し台風に巻きこまれたにしても転覆することはありません。人間が海に放り出されるか、船体に穴が開き水が入らない限り、転覆しない構造になっているのです。

それでも、小さなヨットで海に出ることには本能的な恐怖がつきまといます。体力がなければ海、そして風と格闘することはできないでしょう。また、闘おうとする意志がなければ、死が迫ってきます。甘えは許されない世界なのです。言い訳も通用しません。海で生き抜くためには技術と、意志が要求されます。

そういう状況の中で、私は子供達に"何か"をつかませてきたのです。

わがままを言い、他人を他人と思わず平気で攻撃していく。それが非行の典型です。非行には常に他人に対する甘えがあります。

学校に行かず家に閉じこもり、その中で暴れる。家庭内暴力には、どこかで断ち切らなければならないもう1つのヘソの緒が見え隠れしています。

何もできず、生ける屍のように呆然と日々をかろうじて生きている。無気力タイプの子供達は、心をスパークさせる糸口を探しあぐねて迷路に入り込んでしまっているのです。

そういう子供達に、生きることの本当の意味を教えるのがヨットであったと、私は考えています。彼らはヨットを通じて実存状況と対峙するのです。

そのために、私は容赦なく子供達を鍛えあげます。

海では、体力がなければ生きていかれません。普通の人間の何倍もの体力を要求しているわけではありません。ごく普通の子供達が持っているべき体力、そして機敏性です。それを養うために、ハードなトレーニングを積みます。それを過酷と言う人もいるでしょう。しかし、必要なのです。生きるために。生きるきっかけと意志力をつかむために。体罰は、当然、伴います。

無気力症の子供は生存欲が希薄であり、生きる土台ができてない

私は子供に対する体罰を否定しません。必要不可欠なものだと思っています。それは私が、独善的に考えているのではありません。人間の経験の中から導き出されてきたものなのです。

わかりやすい話を1つ、書きましょう。

私達大人がクルマを運転している時、制限速度以内で走ろうとします。時速50kmと定められていれば、その速度を嫌でも守ろうとします。ホントはもっと速く走りたいと思うのですが、それを越えて走っている時パトロールカーに見つかれば、スピード違反で罰金をとられてしまうからです。そういうリスク、ペナルティーが用意されているから、スピードを守ろうとする。法律にはペナルティーがついている。大人ですら、それなしには決まりを守りきれないからです。ならば、なぜ、子供に罰が不要なのか？

単に叱るだけでいいではないかと、言う人もいるでしょう。

叱ることと、体罰はまるで違います。

叱ることによって「しつけ」はできます。家庭内の、あるいは社会の約束事を守らせることはできるでしょう。しかし、それ以上の効果はあげられません。

人間にはいくつかの本能があります。食欲(生存欲)、そして性欲。その他に第3の本能として、向上欲とでも言うべきものがあります。より以上の存在になろう、もっと上の何者かになろうという欲求です。進歩欲と言ってもいいでしょう。それに目覚めさせることは大切なことです。そして、その第3の本能に目覚めようとしない子供達がいることも確かなのです。目覚める回路を塞がれている子供達と zwar くともできます。そういう子供達が、戸塚ヨットスクールには入って来ます。

その子供達に第3の本能に目覚めさせるには、強い刺激が必要です。過酷なこと、つらいことを子供達が引き受け、それを乗り越える。乗り越えた時、初めて彼らは自分達にも第3の本能があることに気づくのです。

ぬくぬくと甘やかされて育った子供は、第3の本能どころか、より根底にある第1の本能(生存欲)さえ未発達なのです。わかりやすくいえば生命力が弱いのです。無気力症の子供達は生存欲そのものが希薄であり、人間として生きる上での土台ができていない。それを直すには、リスクいっぱいの状況に放り出して、生存欲に火をつけてやる必要がある。つまり、強烈な外的ショックこそ子供達を生かす1番有効な方法であり、体罰はその手段にはなりません。

あえて、私達は子供に過酷な状況を強いています。誰もそれを取り除いてはくれない、自分で這い上がり解決するほかないのだと気づくまで、その状況は変わりません。

殴ります。蹴ることもします。それは事実です。

子供にとっては、つらい状況でしょう。しかし、それは自分で克服するほかないのです。誰かのせいにして、そこから逃れることができるでしょうか？自分の足で立ち上がり、前へ進むほかないのです。体を動かし、困難な状況に立ち向かう。それによって初めて、第1の本能が活性化し、さらに第3の本能に目覚め、進歩し始めるのです。

今、情緒障害児にとって最も問題なのは、いかにしてこの生存欲求と進歩欲求を引き出していくか、なのです。叱る。怒る——それだけでは、子供の1番根っ子のところは動きません。体罰が必要なのです。もちろん、何がなんでも殴ればいいというのではありません。体罰を加えるには、統一性が必要です。

例えば、子供が言葉遣いで親をバカにしたようなことを言ったとしましょう。その時に親が怒る。あるいは体罰を加える。ところが次に同じようなことを言った時、今度は親が怒らない、体罰を加えないかもしれません。体罰が不統一だと、子供は返って不安になってしまいます。

その統一性は大人の側がきっちりとつかんでいなければなりません。そしてもう1つ大切なのは、体罰を加える場合、その場でただに行なうことです。後になって思い出したように行なうことは絶対に避けなければなりません。また、体罰を加える時、していいところ、部位に気をつけなければならないこと、言うまでもありません。

腕、尻、あるいは大腿部などがその場所です。私達は、そういう原則の中で子供達に体罰を加えています。

戸塚ヨットスクールから脱走する子供達がいるではないか、という非難も耳にします。そして、その後には必ず、そんなにひどいことをしているのだと言うのです。

事実を書きましょう。

逃げる子供はいます。逃げたがる子供は、たくさんいるでしょう。なぜなら、私達は子供につらいことを強いているのですから。過酷な状況を与えていたのですから。できれば、そこから逃れたいと思うのは当然です。

しかし、そこで逃げてしまったらおしまいだと感じ、その過酷な状況を克服しようとしている子供達もいるのです。それもまた、事実です。

今ここで逃げてしまったら、一生、自分の人生から逃げることになるのだと、そういう言い方をしてわかるのは大人か、それなりに理解力のある子供でしょう。言葉で言うだけでは、無力です。それゆえ、私達は強制します。逃げないように。逃げずに、克服するように。それが戸塚ヨットスクールのやり方なのです。

笑い話を、1つ書きましょう。

戸塚ヨットスクール

そんな方法でやられたら、ますます海が怖くなってしまう、と言う人がいるのです。泳げない子供を無理やり海に放り込んだら、海に対する恐怖心が増すばかりだ、と。

真剣にそういうことを言う人がいます。これはお笑いです。泳げるところまでやらずに、中途半端で終わらせるから、ますます怖くなるのです。最終的に泳げるようになるまで繰り返し、繰り返しトライさせることによって初めて人は怖さを克服するのです。克服とは、そういうことを言うのです。

私は、子供達に克服することを教えてきました。現に、この手で、400人以上の子供達、しかも、世間では情緒障害児と呼ばれている子供達を、社会に送り返してきました。ハンパなことはしてこなかった。その点には誇りを持っています。

以上が、戸塚ヨットスクールの、現にしていることのアウトラインです。細かくは次章以下で詳述します。その中から、当たり前に強い子供を育てるにはどうしたちいいのかという問い合わせに対する答えが、自ずと導き出されてくるはずです。

それらしい"論"を並べても、ひとりの登校拒否児を救えはしない

その前に、もう1つ、言っておかなければならぬことがあります。

矛先を、マスコミをはじめとする"大人社会"に向けてみましょう。

先に私は、人間には"事実"を見る力はないのか?と疑問を呈しておきました。

例えば、こういうことです。

1人のコーチが子供を殴っている。その瞬間だけを切りとってきて、これは虐待だと言いたて、騒ぎたてる。それが、果たして限りなく真実に近い事実だろうか。ヨットスクールを逃げ出した子供を捕まえて、殴られた、蹴られたという言葉だけを吐かせる。それを前面に押し出して、戸塚ヨットスクールがあたかもリンチの魔窟の如く言う。スクールのコーチは血に飢えた残忍な暴力魔の如く言う。それが、ジャーナリストの見つめるべき真実ですか?

断じて、否です。私は、そう思います。

現実の人間社会が抱えている病根、問題点を鋭くえぐり出して、解決への突破口を開く。それがジャーナリズムの本来、あるべき姿

私が直す!

ではないか。せん越とは思うが、私はそう考えています。とするならば、非行、登校拒否、家庭内暴力、そして無気力シンドロームにとりつかれた子供達の背後に何があるのか、そしてその解決のために今、何が必要なのかを探ることが、基本に据えられるべきだと思います。

にもかかわらず、現実はさながら"魔女狩り"の如しです。

マスコミは、戸塚ヨットスクールの背後に見えているはずの社会の現実を知らずに、おびただしい誤った情報を流し続けているのか。だとすれば、その罪は大きい。情報を流す側にとって無知は許されるはずもないからです。

しかし、私はそう考えていません。

皆、わかっているのです。非行、校内暴力、覚醒剤、登校拒否・家庭内暴力、無気力症……。ありとあらゆる病巣が子供達の世界を覆いつくしていることを知っているのだと思います。

そして、彼らは無力だった。

マスコミも、教育者も、教育評論家も、インテリ達も、文部省の役人達も、父親も、そして母親も……。皆、手をこまねくばかりでそれらの問題に対して有効な手を打つことができなかった。

彼らがしてきたことは、実に限られています。まず、問題が起きる。そこで彼らは会議を開くのです。いいでしょう。しかし、その結果、何が行なわれるのか？せいぜい、実態調査を進め、文部省は各学校長に通達を出し、マスコミは出来事をセンセーショナルに取り上げて、ヒステリックにわめきて、評論家達は社会の欠陥を指摘し、親達は口ごもりながら困ったもんだとつぶやく。そして、誰も、何もしようとしないのです。

あるいは、こんな風に言います。子供達は愛に飢えているんだ、と。温かい目で見守っていきましょう、と。

そう言つていれば、何かが解決すると、本当に思っているのですか？アホらしい。

私に言わせれば、それらは、自分が何もしないことに対する言い訳にすぎない。いくつもの"論"を並べたて、分析し、テレビカメラに向かって評論家でございと、しごくもつともな言葉をまき散らしていれば、1人の登校拒否児を救えると言うのですか？答へは"ノー"です。もはや、語ることによって、この問題は解決しません。

私は、万語を費やすよりも、自分の方法で実行しようとしました。

戸塚ヨットスクール

そして、実績をあげた。これからも、同じ方法で続けていこうとしています。

それに対して、なぜ"魔女狩り"が行なわれるのか？

おそらく、私がタブーに触れたからでしょう。子供に対する体罰というタブーに、です。

歴史を思い出して下さい。

例えば、かつてダーウィンは『種の起源』を著して当時の西欧社会から猛反撃をくいました。人は神の子であると、キリスト教は規定していたのです。地球が神によって創造されたのは紀元前4004年10月23日の日曜日午前9時と、計算までして、人類の起源を説いた。それが聖書の世界です。ところが、ダーウィンは、ビーグル号で南米へ行きアンデス山脈に登った時に山のてっぺんで貝の化石を発見する。あのアンデス山脈が、かつて海底にあり、海底の隆起によってできあがったものであることがわかるわけです。

となれば、紀元前4004年に地球が誕生したという聖書の説など、真っ赤な偽りだということになります。

やがてダーウィンは、人類が獣形類から進化したものであることを証明します。恐竜が誕生するちょっと前にこの地球上にいた"類"です。そこから進化し始め、サルにいきつき、その後で人類が誕生した。

しかし、ダーウィンの説は、当時の西欧社会のタブーに触れたのです。人は神の子であるというタブーです。それを否定するものは何人たりとも許さない。それがタブーに触れた者に対する社会の態度です。

子供に対する体罰はいけない。戦後、そういうルールができました。その上に、戦後の教育は築き上げられてきました。教育者も、その綆に縛られてきました。考えてみれば、それは実にラクな綆です。ある一線以上、教師は子供の世界に介入しないですむわけですから。子供達に、本当に必要なものが何なのかを教えなくてもいいのですから。サラリーマン教師でも十分に務まります。

また、評論家もそうです。子供に対する愛情の問題だと、最後にはそれを言つていればよかつた。歯の浮くような論をひねりだし、原稿用紙に書きつけていればよかつた。

しかし、よく考えてみて下さい。

それで何事も起こらずにすむわけがありません。言葉をまき散らすだけで問題解決を先へ先へと延ばせば、最後にはそのツケがまわってきます。

そのツケが、今、山ほどたまっているではありませんか。子供達の荒廃という形のツケが、ほかならぬ私達の前につきつけられているのです。

それでもまだ、彼らは自分の手で何もしようとはしないのです。

そして逆に、私達の足を引っぱろうとしている。私の目から見れば、それは"嫉妬"と見えます。自分達が長年かけてなしえなかつたことを、教育の門外漢が解決しようとしているらしい。その時彼らは、まず、否定するのです。そんなことができるはずがない、と。次に実例を示されると、今度はアラ探しをするのです。

嫉妬の感情を克服する方法を教えましょう。

1つは、相手を自分のレベルに引き下ろすことです。相手をこきおろし、否定し、それによって安心しようとするわけです。最低の方法です。

もう1つ、方法があります。自分が努力して相手のレベルに到達する。自分に足りないものがあるんだという認識から出発し、謙虚に学ぶのです。そして同じレベルに達した時、嫉妬心はあとかたくもなく消えています。

おわかりでしょうか。

ヒステリックにわめきたてることは、前者の方法です。それは日本という社会の中での"家庭内暴力"のようなものではありませんか。外に出ていくことができず、日本列島という平和な、安住空間の中で暴論を吐き、責任を転嫁し、自分は何もせずふんぞりかえっているのです。

すべてを責任転嫁し、親が悪いといいつづけて自分は何もしない

そういう人達が日本の中での家庭内暴力だということがわかりにくければ、1つ、具体的なケースを示してみましょう。

A君のケースです。

A君が戸塚ヨットスクールに来たのは、中学を卒業した後です。中学時代から、学校に行かず、家に閉じこもっていました。そして、戸塚ヨットスクール

例によって家族に暴力をふるうのです。その方法は、バットを持って母親を追いかけまわし、物を壊し、憑かれたように親をののしり続けるのです。

私達が、両親の要請があつてA君を迎えるにあつた時は、包丁を持ち出してきました。

「食事をさせる時も恐ろしくて、そつとあの子の部屋を開けて食事を置くと、もう逃げ出すように戻ってくるんです」——母親はそう言っていました。

そのA君をヨットスクールに入学させた初日、私達はとにかくA君の話を聞こうとしました。とにかく、よくしゃべるのです。記録が残っています。A君は次のようなことを、早口でまくしたてるのです。

■A君の話——「ぼくのこと、話すんですか。昭和43年4月1日生まれ。子供の教育について。子供というのはある例を出してみると、父親と母親が数学の塾の先生をやっており、父親も母親もすごく数学が得意で、そこに女の子が生まれた。これ、実際にあった例で、それでその女の子が、両親を見て数学に興味を持ち始めたわけ。父親も母親も、その興味ある時に、どんどん教え込んだらたった4歳にして高校1年生の数学の問題もスラスラ解けてしまったとか、それからテレビでそういう専門家がゆってたけど、女の人が母体が妊娠中にお酒を飲むと子供に悪影響が起きて悪い子供ができると。それから子供がいるところでタバコを吸うと、タバコの煙が子供の鼻や口から入って、10本吸うごとに子供は1本吸ったのと同じ状態になり……(君自身のことを聞きたいんだけどな——質問)。あ、ぼくが悪くなった理由ですか。小さい時から教えなかった(注・教えてもらえたかった)のと、それから、ぼくがなんやかんやと。あ、どうか、まだ例があるんですけど、その父親が息子を殺したという例があるんですけど、その男の子が本当はものすごく成績がよかったのに……(君自身のことを話してくれよ)。あ、どうか。それでぼくの場合は、父親と母親がもめてばかりいたので、それから3歳から6歳、または生まれてすぐ勉強を教えてくれればよくなれたのにそれを(親が)怠ったし……(つまり、家庭内がもめていたから成績が急激に下がったということかな?)。ぼくですか?ぼくは元々親がお酒飲んで、男の人がお酒飲んで、そういうことしたから、それで悪影響が出たわけであり、プログラムするのは父親であり、母親であり……」

適当なところでカットしましょう。

A君は、今のような話を繰り返し、繰り返しするわけです。自分が登校拒否になって家の中で暴力をふるうのは、そもそも親が酒を飲んだ時にできた子供だからだと。それを毎日のように親に言いながら、いらだち、母親に暴力をふるっていたわけです。

家庭という中で、全てを責任転嫁し、自分が悪いのではない、悪いのは親なのだと言い続けて自分は何もしないわけです。何もできないのです。

このケースと、先ほど書いた何もせずにごたくばかり並べている大人達(マスコミ、「文化人」達)を全く同一視するわけではありません。

しかし、その基本構造は実によく似ています。

自分で行動しないこと。他を非難し、足をひっぱろうとすること。一人前に論を並べたてること。そして、いらだっていること。

それゆえ、私は、彼らを日本列島という中で家庭内暴力をふるっているようなものだと書いたわけです。

ところで、その後、A君がどうなったか、ここに書いておきましょう。

A君は5ヶ月間、戸塚ヨットスクールにいました。他の生徒達と全く同じ訓練を受けました。コーチは、A君が何を言おうと、強圧的な態度で臨みました。何でも人のせいにするクセはすぐに消えるわけではありません。体操でしごかれ、ヨット訓練で海に落とされ、泣いてもわめいても、自分の力で這いあがることを強いていつたわけです。A君は実に涙もろい少年でした。ことあるごとに泣くのです。それもまた1つのプロセスです。言葉が受け入れられなくなると、涙を流すわけです。そして、5ヶ月。A君はヨットスクールを卒業して、今は高校に通うようになっています。登校拒否は、していません。

次の時代を担う子供たちが、まやかしの論理のなかで腐敗していく

話をもとに戻しましょう。既に体罰はタブーではありません。私はそう考えています。体罰を否定したために、むしろ人間のあるべき基本から外れて全体が崩壊しかかっている。タブー視するほどの価値は、体罰にはありません。にもかかわらず、体罰はいけないことだという虚妄にとりつかれているのが現状です。そして、その虚妄戸塚ヨットスクール

にがんじがらめにされていることに気づかず、言葉、論理だけで砂上の楼閣を築いているのです。

そのインチキ性に目覚める時がきます。

誤解を恐れずにおえて言いましょう。"愛"で問題児達は救えません。なぜなら、愛は、どこまでいってもまやかし以外のなものでないからです。あいまいな、ふわふわしたもので救えるほど、現状はやわではないのです。

日本人は、ことあるごとに"精神"という言葉を持ち出します。これもまた、虚妄です。私は体罰を主張し、スバルタを復活させようとしているからといって、日本の古い考え方を持ち出そうとしているではありません。私の中には復古趣味など、ケほどもありません。そんなもので現状を救うことができるなどとは、現場を見るにつけ、思えないのです。

"精神"は、権威を維持するために権力者が利用するレトリックです。例えば、日本では茶の湯が茶道になり、剣術が剣道になり、弓術は弓道になる。術を道と言い替えることによって、継ぐべきものは技術ではなく精神だということになるわけです。そうすることによって、権威を世襲しようとする。精神は世襲できます。目に見えないからです。ところが、技術は世襲できない。目に見えるからです。わかりやすくいえば、剣術の達人を父に持って生まれた場合、技術が伴わなくとも継ぐべきものが精神であり、道であるならば、何の不思議もなく世襲できるのです。

そういうあやふやなものが、精神です。愛と同様、実に心もとないものではありませんか。

ヨットマンの世界には"シーマンシップ"という言葉があります。

この言葉は日本では"船乗り魂"と訳されています。海の男の魂なんだ。何となくわかるようで、実はよくわからない。オレは海の男なんだと、心の中に満ちあふれてくる内なる叫びがあれば、それが海の男の魂のような気がしますが、果たしてそれがシーマンシップか。

私は、そういう考え方常に常に疑問を抱くタイプの人間です。

改めて英英辞典で調べたことがあります。シーマンシップの"シップ"とはこの場合、何を指しているのか。"テクニック"であると、出てくるのです。船をA地点からB地点まで安全に航行させるためのテクニック、それがシーマンシップであるというのです。

目からうろこが落ちる思いでした。

シーマンシップを身につけるためには、それゆえ気象を知らなければいけない。無線もできなければならない。当然、操船のテクニックを覚え、エンジンの整備を学び、ロープの使い方を体に覚えこませなければいけない……。それらのテクニックを自分のものにして初めてシーマンシップが身につくわけです。実にわかりやすい、科学的な説明です。船乗り魂という和訳をそのまま受け入れていたら、いつまでたってもある種の虚妄にとりつかれ続けていたでしょう。

私は、虚妄を取り除くところから、全てが始まると考える人間です。人文科学の徒であるよりも自然科学の徒であることを選ぶ人間です。タブーに縛られていることはできません。砂上の楼閣をもてあそぶわけにはいきません。敢然と、実行するのみです。

私の手がけている仕事は、"第零次産業"です。農業、漁業などの第一次産業、製造業を中心とする第二次産業、そして情報・サービス業の第三次産業という分類があります。現代は、その先の第四次産業論がさかんに言われていますが、その論議は何の役にも立たない学者、評論家がしていればいい。私は、人間の基本に立ち帰る"第零次産業"を担っていきます。社会に出ていく人間そのものをつくるのです。

そして第三次産業に従事している人達は、第零次産業の、数少ない担い手である私達に対して向う岸から石を投げようとしているのです。

私達とて、独善に走る気は毛頭ありません。独善はそれ自体がまた1つの虚妄を生み出します。

精神 = S h i p とは、実は生きるためのテクニックであることを、私は知っています。非科学的な根性論をふりかざして子供達に体罰を加えているわけではないのです。

私は、文明に対する責任感を負っています。この仕事を続ける限り、負い続けていこうと考えています。

なぜなら、次の時代を担う子供達が、まやかしの論理の中で腐敗していくのを見るのに忍びないからです。それゆえ私は、自分の方法で問題児と対峙しようとしたのです。このままでは、日本は内側から腐っていってしまう。それを本来の、るべき姿に戻すことが、今の時代に生きる大人の責任なのではないか。私はそう考えています。

さて――

本論に入りましょう。戸塚ヨットスクールが、1977年の開校以来、何をしてきたのか。そこから何が見えたのか。私は無責任な評論家ではありませんから、壮大な論は展開しません。具体的な事実を挙げながら、語っていきましょう。

Ⅱ章 ヨットスクールがしてきたこと（前）

ヨットスクールでは、まず情緒障害児特有の甘えを否定します

名古屋の駅から名鉄・河和線に乗ると、約1時間で海の見える町に着く。

終点は「河和」駅。知多半島の東側に位置する静かな町です。海水浴場もあり、潮干狩りも楽しめる海岸が駅からさほど遠くない所に広がっています。

目の前に広がる海は知多湾。湾を出れば太平洋へと続きます。

私が知多湾からの風をダイレクトに受けとめる河和の海辺にヨットスクールを設立したのは、そこに温暖な気候に恵まれた小説の舞台になるような海があったからではありません。私は子供のヨット・トレーニングに適した海を探していました。いくつかの条件がありました。まず、初步的な操船技術を教えるための静かな内海が必要です。かといって、波が静かであればどこでもいいわけでもありません。適度な風に恵まれることがヨットには必要なのです。時には荒々しいまでの風も吹いてくれなければ困ります。その風にひるむことなく立ち向かえるようにするのが、スクールの目的なのですから。

海、そして自然界は温室ではありません。いつ、どこで、いかなる状況に巻き込まれるか、予測はつきません。

子供達がこれから乗り切っていかなければならない"人生"もまた、そうです。

誰かが手を引いて導いてくれるものではないのです。人生の、そのとば口でつまずいてしまった子供達に、自分の力で海＝人生を乗り切る力をつけさせようとしているのですから。温室は不要です。

河和の海は、そういう意味でヨット・トレーニングに適していました。ベタなぎ(風がまったく吹かず波も立たない状態)の日もありますが、ここはおおむね風に恵まれています。海も汚れてはいず、大型船舶におびやかされる心配もありません。また、ある程度ヨット技術が上達した後、子供達でチームを組みクルージングに出ますが、その際の地の利も、ここにはあります。それが河和に戸塚ヨットスクールの合宿所を定めた理由です。

ここで合宿所について若干、説明しておきましょう。

現在、合宿所として使っている建物はかつて海浜レストランでした。それを譲り受けて改装したものです。1階にはスクールの事務所と子供達の食事を作るキッチンがあります。2階がコーチ達の寝泊りするスペースと女子生徒のためのスペースです。3階が男子生徒達の寝泊りする場所になっています。各フロアはそれぞれ約90m²。各階にトイレがあり、風呂は2階にあります。しかし、この風呂は小さいので、ほとんどの場合、この町に古くからある旅館「角屋」さんの風呂を使います。

多い時は約70～80人の子供達が、1つの建物の中で共同生活をしています。もちろん、今の合宿所が十分な広さを持っているとは考えてはいません。もう少し広いスペースがあればと思うことは、しばしばあります。

と同時に、合宿所はホテルではないのですから子供達一人一人にゆったりしたスペースが必要だなどと思いません。

豊かな会社で育った今の子供達は、せいたくに慣れています。親にねだり、あるいは親をおどかして金を手にすれば、何でも買えると思っています。

私は"豊かな社会"それ自体を否定するつもりはありません。国全体が富み、ゆったりと暮らせる社会は理想とすべきです。しかし、急激にモノがあふれ、本当の意味での豊かさを身につける前に、豊かさのひずみが現われてきたことも、また事実です。父親はその間、外に出てひたすらに働いてきました。悪いことではありません。しかし、その分、家庭を顧みる余裕を失った。母親は自分のレゾン・デートル(存在意義)を子供との関係の中に見出そうとしました。それが子供に対する過度な介入となつた。子供はその中でもがき始めた——。一般論として、ごく平均的な家庭像をスケッチしてみれば、そういうことになるでしょう。

父親の収入は増えました。しかし、逆に失われたものもあるのです。今はそれを、豊かさのひずみとだけ言っておきましょう。

私は、ヨットスクールにやって来る子供達が家庭内で持っていた環境を、合宿所でもそのまま与えはしません。親にねだり、すね、怒りを爆発させ、泣きわめけば何とかなるだろうという情緒障害児特有の甘えを、まず否定します。

ヨットスクールに入ってきた子供達が、まず最初に何を体験するかを書いてみましょう。

私は子供たちに対して、あくまで"他人"として接します

例を挙げます。

仮にB君としておきましょう。入って来た時は高校2年生でした。きっかけは、父親から私に問い合わせがきたのです。

「17歳になる息子が暴れて手がつけられないんです」

よくある話なんです。17歳の男の子ならエネルギーはあり余っている。それが自分を向上させるために外に向けられるならいいわけです。この父親は、疲れきった声で言うのです。

「ダメですわ。立派な体とるのに学校も行かずに家の中に閉じこもって、ことあるごとに暴れるんです。学校の先生とも随分相談したんだけども、まず、ダメだな。母親はおびえちまつるし、もう私の力でも抑えられない。何度も話し合いはしました。どうしたいのか、何を望んだるなんか、朝方まで話をしたこともあるんですね。わかった言うて、ちょっとはヤル気出したかなと思ってまた家にこもっちゃう。で、また暴れる……」

電話線を通じて低く、ぐもった声が聞こえます。東北なりがあるので、聞いてみると青森から電話していると言う。

「お父さん、その子をここまで連れて来られますか？」

そう聞くと、しばらく考えて、

「だまして連れて行くわけにはいかんし……」

「もちろん、ちゃんと話をした上で連れて来て下さい」

そんなやりとりがあった後、「とにかく説得してみます」と言って電話は切れました。

いざとなったら、青森でもどこでも、こちらから迎えに行かなきゃならないなど、私は思っていました。

数日後、親子がやってきました。

親にはそのままひきとつもらい、17歳のB君が残ったわけです。なるほどと、思いましたね、服を着ているから、見ばえがする。一

見、並以上の高校生です。この子が家庭内暴力をふるう問題児だって、普通の人が見たら恐らく信じないでしょう。

体がデカイから虚勢は張れます。スクールの1階の事務室で、まず話でも聞いてみようかということになりました。その時、コーチの1人がB君の持ってきた荷物に触れたんです。

「なんだ、てめえ！何しやがるんだ！」

怒鳴ったのはB君でした。

しかし、そこまでです。コーチは即座にB君を殴り倒しています。中途半端ではありません。その時はその場に数人のコーチがいましたから、B君は完膚なきまでに殴られました。

恐らくそんなことは、B君にとっては初めてのことだと思います。

「すいません、すいません！オレが悪かったんです。すいません」

B君は泣き出して、そう言うのです。

それが、最初です。

ここまで読めば、戸塚ヨットスクールは、何てひどいことをしやがるんだと思う人もいるでしょう。

私は、新入生徒にゲンコツの洗礼をあびせて入学祝いなどと嘘ぶいているわけではありません。先を読んで下さい。

親と子の間ではどうにも解決のつかなくなった問題児達を私は預かっています。私や、ヨットスクールのコーチ達が"親代わり"となってその子供と対話することでは、問題はいつこうに解決しません。それをするれば、家庭からヨットスクールに場所を移しただけで擬似親子関係を継続させることになってしまいます。

私達は子供達に対して、あくまで"他人"として接します。よそのオジサンなわけです。当たり前のことですが、人間が生きていくためには他人と協調し、時には競争していかなければなりません。他人とのコミュニケーションを拒否すれば、家庭という空間から出られなくなってしまいます。"他人"をまず恐れ、やがて慣れ親しみ、その後に克服していかなければならないのですね。

そのための"他人"として、私やコーチ達が存在するわけです。

"他人"は子供を甘やかしません。容赦なく子供の前に立ち塞がります。

そのことを、言葉で言うだけで理解する子供はヨットスクールには来ませんし、来る必要もないでしょう。具体的な力で示さなければわからないケースがあるのです。頭で、心で理解できなくとも、体はそのことをいやおうなく覚えます。

それゆえ、ヨットスクールに入って来たその日に、肉体にわからせる方法をとることが、しばしばあります。ただし、全てではありません。無差別に、同じことをするわけではありません。子供の体の状態、ヨットスクールにやってきた背景……等々、考慮に入れた上でのことです。

無差別に、そんなことをするのであれば、ここはもう「スクール」などではありません。当然のことです。

にもかかわらず、マスコミは事実を歪め……と繰り返し言うのはやめしよう。1つ1つ、説明していけば、必ずわかってもらえるはずですから。

頭を坊主にすることで、子供たちの世界を一度分解することができる

男の子は全員、坊主にします。

青々と刈り上げます。女の生徒は長い髪をおかっぱ程度に短くします。ショート・カットで髪を染めている子供の場合でもハサミを入れます。故意に、めちゃくちゃにハサミを入れます。

これも、ヨットスクールにやってくる前に子供達がこだわっていた世界を1度、壊すためです。

あらかじめ書いておくと、こういった一連の方法は"理論"があつて始めたものではありません。私が頭で考え、こうするという意味があるのではないかと仮定してスタートしたものではないわけです。

全て、経験から導き出されたものです。

ヨットスクールに入って来た最初の日に頭を青々と刈り上げるのは、当初、別の目的がありました。もっと単純に考えていたのです。ヨット訓練で海に出る。何度も海に投げ出される。髪が濡れる。それをいちいち気にしていたのではトレーニングにならない。そういう理由が1つ、さらに頭にケガをした場合、坊主にしておいた方が見えやすい。頭は極めて大事なところですから、ハードなトレーニ

ングをする場合、常に気をつけなければならない部分です。海上訓練では、必ずヘルメットを着用させています。それでも、頭を傷つけた時のことを思えば坊主の方がいい。それが第2の理由です。そんな理由で坊主にしたわけです。

以後、何百人もの子供を見てきました。その結果として、ヨットスクールに入って来た時点で坊主にすると別の効果があることに気づいたのです。

子供達の虚飾が、一遍にはがれてしまう。髪の毛を伸ばし、丁寧にクシを入れている時の子供からは、彼らの本当の姿は見えません。ソリ込みを入れ、ツッパっている子供はかろうじて虚勢を保っているに過ぎないわけです。髪の毛は子供達にとって最後の拠り所です。そこだけは、自分の意のままになるわけですから。

その髪を刈り上げてしまふことで、子供達が持っていた世界を1度分解させることができます。子供の頭を刈るのはコーチか、あるいは先輩の子供達です。あえて、子供達自身の手でやらせます。

頭を刈り上げられた子供の表情は、一変します。何とも情なさそうな表情が見えてきます。子供は、むき出しにされた自分と向き合うわけです。虚飾を捨てて、ありのままの自分と対峙する準備が、これでできあがることになります。

親から私宛に書かれた手紙を紹介してみます。戸塚ヨットスクールにやってくる子供達は、簡単に類型化できません。

それぞれ、個別的な背景があります。以下に紹介するのは22歳でヨットスクールに入って来た青年の例です。ここでは名前を仮に"明男"君と呼んでおきましょう。手紙を書いてきたのは、明男君の母親です。情緒障害児達がどう生き方をしてきたのか、およその見当をつけることができます。

■手紙①——明男君の母からの報告

「前略ごめん下さい。息子・明男は22歳で無気力そのもの。絶対に動かず(社会が怖いのかも)、親にしがみついていると言えます。日常のこと一切に口を出し自分はやらず文句ばかり。

保育園に入った時から行くのを嫌がり、皆と一緒に登園せず私が毎日連れて行きました。初めての夏休み前日、ひきつけを起こし、小学2年まで年に2回やるようになる。それ以後はない。現

在でも脳波は多少の異常波はあるものの薬を飲む程ではなしとのことで現在に至っております。

小学1年の時に脳波検査を受け、その時の先生にはテンカンと言われる。以後、中2迄薬を服用する。小学校入学しても登校拒否をやり、小3の2学期迄は私が連れて行きましたがそれ以後は途中の松の木にしがみつき連れて行けなくなり、その後は自分で行ったり休んだり、時間になると腹が痛くなったり頭が痛くなったり。少しでも注意すると、頭が痛いと言って泣き、頭をタンスや壁にぶつけたりしました。

医者にガミガミ言うなと言われ、注意しなければいけない生活態度でしたが以後2年間位、親がじっと我慢の子をしましたので、我儘になりました。小3の時、盲腸手術入院中夜中にぐずぐず言って同室の者が嫌がりました。小さい時からかんしゃくもちですぐ怒ります。数学がわからんと言っては私に聞くので図入りで説明すると、自分は違ったやり方で式を書くと言う塩梅です。そしていつも教える度に私が殴られるのです(自分がわからないのに私がわかるため腹が立つのです)。これは何べん言てもだめでした。友達の家へ遊びに行くのにも、相手の家へ声もかけられず、ただ近くをぐるぐる廻ってるだけで、家人が気づいて声をかけてやっと家の中へ。親の顔もよく知っているのにだめなのです。人みしりは小さい時から激しい。又、保育園の時に私が用事で息子を連れて出かけた時も、相手の家の入口から3m位離れた所に止まり、どうしても家中に入らずに泣く。

中2の時、私が注意したのが気に入らず2学期末試験をボイコットし、俺は困らない、母ちゃんが困るだけだと言って澄ましていました。こんなことすると自分が困るのよと注意してやるのだが、3年1学期末に又もや平気で休む。先生に伝えると今度はやらないでしょと言うので、絶対にやりますよと伝え、その通りとなる。この時も、私が日常の生活のことで注意したのが気に入らんと言ってやったのです。そして本人は俺は困らん、母ちゃんが困るのだと言っていた。

中学へ入学してから担任の先生に相談したが、学校は関係ありませんとはっきり言われた(あまり体むので)。

中3の1学期に又、休みが激しくなり、9月から児童相談所へ55日入所。それ迄は、2年頃からものも言わず、暴力はふるう、お前、ばばあ、と言葉の暴力と行動の暴力。自分は絶対に

悪くない、人が悪いと。どこが悪いか教えて聞くと、自分で考えよと言って教えてくれず、相談所から帰って来てから少しづつ話す言葉も増え、母ちゃんと言うようになる。

高校へ入学してから始めの4月は張り切って行くが5月にはちばちば休み、6月に又多くと、いつもと同じパターンだ。2学期になつたら全然行かず、休むにつれて授業がわからず行ってもしょうがないというようになる。以後、数学の表彰状を渡すから出て来いと言っても行かず、留年。自分と同学年の人達が3年になる時、本人は3月31日迄待ってくれと言うのだが、先生達は10日迄に退学せよとばかりに迫り、嫌々退学させられる。そして、退学届に心身症のためと書くと、家庭の都合と書き直せと言ってくる(学校いわく、普通の人でもおかしくなるから、退学して学校のことは忘れろと言う)。

中学を卒業してから保健センターへ通ったが、そのうち本人は行かず私だけが話しに行く。

1、 今でも自分の気にいらないと暴力をふるい、近くのものを壊す。自分は布団の中で人に命令している。

2、 電話は2年位前にやっと出れるようになったが自分からはかけれず。

3、 自分の気に入らないテレビ番組を見ていると、馬鹿になるから消せと文句を言って消しに来る。そして自分は変な番組を見ている。

4、 主人と話をしていても、割込んできては反対し私の頭を叩く。人の頭は冗談でも叩いてはだめだと注意するが、ダメ。

5、 何でも俺に話をせよ、そうでないと坐り込むぞと言う。これはバイクを入れるのに物置を少し直す話を業者としていたのです。このように日常のことにいちいち口を挟み、自分のことは何もせず考えずこのままでいいと言っている。

6、 買物して来ると袋の中を覗き、日常の道具はこれはいらんから捨てるぞと言って処分しようとする(自分のものでない)。

7、 1つのことにこだわるので何べんも同じことを言う。家の中を時々、独り言を言って歩き回るし、物を置くにもまるで壊れ物を扱うようなやり方。新聞記事を見て興奮し、反論して歩きながらぶつぶつ言っている。時には畳を叩いている時もある。

8、 すぐに興奮するので、殴ったり、壊したり、その時は自分は痛くないのではないかと思う(手が体が)。

9、 水を使って洗う時は、念が入り過ぎてるので自分は洗はず、人にやらせてからそれを又洗う。人の気持ちなんか考えたことないのではないかと思う。人が仕事をして手が離せなくとも自分は布団の中から命令し、こっちが聞かないと怒り出す。

10、 私が時々間違えることがあると、母ちゃんしっかりせーよと言う。自分は?

11、 自分は何もわからんくせに決めつけてくる。本当に、何も知らない。

12、 現在は家の中、昆虫のことになると夢中になる。夏になると一遍だけ山梨の昆虫の会から手紙が来るので、その時だけ出かける。1回目はビジネスホテルへ1泊。2回目は行きと明くる日2泊して来たが、風呂へは入らず。

13、 私が帽子をかぶると気に入らん、やめろと文句を言う。人の勝手でしようと文句を言わんとヘコラしていることになるから、言うのだとのこと。

だいたいのことを書きましたが、まだ望みはあるでしょうか。とにかく私が憎くてたまらないのです。そういう感じですので何でも反対します。お願いできるでしょうか。

主人は自分から動こうとしません」

明男君は、そういう状態で入って来たわけです。もちろん、私は受け入れました。入校して来たその日に、明男君は坊主になりました。坊主にする理由を、こちらはくどくどと説明しません。する必要もないでしょう。彼に必要なのは、まず有無を言わさず立ち塞がってくる壁を見せることです。自分で越えなければならぬ壁を目の前に作ってあげることです。文句を言えば、それが吸収紙のように吸収されてしまう母親的存在ではなく、手ひどく跳ね返ってくる厳しい他人(大人)なのです。

Ⅱ章 ヨットスクールがしてきたこと（前）

ヨットスクールでは、まず情緒障害児特有の甘えを否定します

名古屋の駅から名鉄・河和線に乗ると、約1時間で海の見える町に着く。

終点は「河和」駅。知多半島の東側に位置する静かな町です。海水浴場もあり、潮干狩りも楽しめる海岸が駅からさほど遠くない所に広がっています。

目の前に広がる海は知多湾。湾を出れば太平洋へと続きます。

私が知多湾からの風をダイレクトに受けとめる河和の海辺にヨットスクールを設立したのは、そこに温暖な気候に恵まれた小説の舞台になるような海があったからではありません。私は子供のヨット・トレーニングに適した海を探していました。いくつかの条件がありました。まず、初步的な操船技術を教えるための静かな内海が必要です。かといって、波が静かであればどこでもいいわけでもありません。適度な風に恵まれることがヨットには必要なのです。時には荒々しいまでの風も吹いてくれなければ困ります。その風にひるむことなく立ち向かえるようにするのが、スクールの目的なのですから。

海、そして自然界は温室ではありません。いつ、どこで、いかなる状況に巻き込まれるか、予測はつきません。

子供達がこれから乗り切っていかなければならない"人生"もまた、そうです。

誰かが手を引いて導いてくれるものではないのです。人生の、そのとば口でつまずいてしまった子供達に、自分の力で海＝人生を乗り切る力をつけさせようとしているのですから。温室は不要です。

河和の海は、そういう意味でヨット・トレーニングに適していました。ベタなぎ(風がまったく吹かず波も立たない状態)の日もありますが、ここはおおむね風に恵まれています。海も汚れてはいず、大型船舶におびやかされる心配もありません。また、ある程度ヨット技術が上達した後、子供達でチームを組みクルージングに出ますが、その際の地の利も、ここにはあります。それが河和に戸塚ヨットスクールの合宿所を定めた理由です。

ここで合宿所について若干、説明しておきましょう。

現在、合宿所として使っている建物はかつて海浜レストランでした。それを譲り受けて改装したものです。1階にはスクールの事務所と子供達の食事を作るキッチンがあります。2階がコーチ達の寝泊りするスペースと女子生徒のためのスペースです。3階が男子生徒達の寝泊りする場所になっています。各フロアはそれぞれ約90m²。各階にトイレがあり、風呂は2階にあります。しかし、この風呂は小さいので、ほとんどの場合、この町に古くからある旅館「角屋」さんの風呂を使います。

多い時は約70～80人の子供達が、1つの建物の中で共同生活をしています。もちろん、今の合宿所が十分な広さを持っているとは考えてはいません。もう少し広いスペースがあればと思うことは、しばしばあります。

と同時に、合宿所はホテルではないのですから子供達一人一人にゆったりしたスペースが必要だなどと思いません。

豊かな会社で育った今の子供達は、せいたくに慣れています。親にねだり、あるいは親をおどかして金を手にすれば、何でも買えると思っています。

私は"豊かな社会"それ自体を否定するつもりはありません。国全体が富み、ゆったりと暮らせる社会は理想とすべきです。しかし、急激にモノがあふれ、本当の意味での豊かさを身につける前に、豊かさのひずみが現われてきたことも、また事実です。父親はその間、外に出てひたすらに働いてきました。悪いことではありません。しかし、その分、家庭を顧みる余裕を失った。母親は自分のレゾン・デートル(存在意義)を子供との関係の中に見出そうとしました。それが子供に対する過度な介入となつた。子供はその中でもがき始めた——。一般論として、ごく平均的な家庭像をスケッチしてみれば、そういうことになるでしょう。

父親の収入は増えました。しかし、逆に失われたものもあるのです。今はそれを、豊かさのひずみとだけ言っておきましょう。

私は、ヨットスクールにやって来る子供達が家庭内で持っていた環境を、合宿所でもそのまま与えはしません。親にねだり、すね、怒りを爆発させ、泣きわめけば何とかなるだろうという情緒障害児特有の甘えを、まず否定します。

ヨットスクールに入ってきた子供達が、まず最初に何を体験するかを書いてみましょう。

私は子供たちに対して、あくまで"他人"として接します

例を挙げます。

仮にB君としておきましょう。入って来た時は高校2年生でした。きっかけは、父親から私に問い合わせがきたのです。

「17歳になる息子が暴れて手がつけられないんです」

よくある話なんです。17歳の男の子ならエネルギーはあり余っている。それが自分を向上させるために外に向けられるならいいわけです。この父親は、疲れきった声で言うのです。

「ダメですわ。立派な体とるのに学校も行かずに家の中に閉じこもって、ことあるごとに暴れるんです。学校の先生とも随分相談したんだけども、まず、ダメだな。母親はおびえちまつるし、もう私の力でも抑えられない。何度も話し合いはしました。どうしたいのか、何を望んだるなんか、朝方まで話をしたこともあるんですね。わかった言うて、ちょっとはヤル気出したかなと思ってまた家にこもっちゃう。で、また暴れる……」

電話線を通じて低く、ぐもった声が聞こえます。東北なりがあるので、聞いてみると青森から電話していると言う。

「お父さん、その子をここまで連れて来られますか？」

そう聞くと、しばらく考えて、

「だまして連れて行くわけにはいかんし……」

「もちろん、ちゃんと話をした上で連れて来て下さい」

そんなやりとりがあった後、「とにかく説得してみます」と言って電話は切れました。

いざとなったら、青森でもどこでも、こちらから迎えに行かなきゃならないなど、私は思っていました。

数日後、親子がやってきました。

親にはそのままひきとつもらい、17歳のB君が残ったわけです。なるほどと、思いましたね、服を着ているから、見ばえがする。一

見、並以上の高校生です。この子が家庭内暴力をふるう問題児だって、普通の人が見たら恐らく信じないでしょう。

体がデカイから虚勢は張れます。スクールの1階の事務室で、まず話でも聞いてみようかということになりました。その時、コーチの1人がB君の持ってきた荷物に触れたんです。

「なんだ、てめえ！何しやがるんだ！」

怒鳴ったのはB君でした。

しかし、そこまでです。コーチは即座にB君を殴り倒しています。中途半端ではありません。その時はその場に数人のコーチがいましたから、B君は完膚なきまでに殴られました。

恐らくそんなことは、B君にとっては初めてのことだと思います。

「すいません、すいません！オレが悪かったんです。すいません」

B君は泣き出して、そう言うのです。

それが、最初です。

ここまで読めば、戸塚ヨットスクールは、何てひどいことをしやがるんだと思う人もいるでしょう。

私は、新入生徒にゲンコツの洗礼をあびせて入学祝いなどと嘘ぶいているわけではありません。先を読んで下さい。

親と子の間ではどうにも解決のつかなくなった問題児達を私は預かっています。私や、ヨットスクールのコーチ達が"親代わり"となってその子供と対話することでは、問題はいつこうに解決しません。それをするれば、家庭からヨットスクールに場所を移しただけで擬似親子関係を継続させることになってしまいます。

私達は子供達に対して、あくまで"他人"として接します。よそのオジサンなわけです。当たり前のことですが、人間が生きていくためには他人と協調し、時には競争していかなければなりません。他人とのコミュニケーションを拒否すれば、家庭という空間から出られなくなってしまいます。"他人"をまず恐れ、やがて慣れ親しみ、その後に克服していかなければならないのですね。

そのための"他人"として、私やコーチ達が存在するわけです。

"他人"は子供を甘やかしません。容赦なく子供の前に立ち塞がります。

そのことを、言葉で言うだけで理解する子供はヨットスクールには来ませんし、来る必要もないでしょう。具体的な力で示さなければわからないケースがあるのです。頭で、心で理解できなくとも、体はそのことをいやおうなく覚えます。

それゆえ、ヨットスクールに入って来たその日に、肉体にわからせる方法をとることが、しばしばあります。ただし、全てではありません。無差別に、同じことをするわけではありません。子供の体の状態、ヨットスクールにやってきた背景……等々、考慮に入れた上でのことです。

無差別に、そんなことをするのであれば、ここはもう「スクール」などではありません。当然のことです。

にもかかわらず、マスコミは事実を歪め……と繰り返し言うのはやめしよう。1つ1つ、説明していけば、必ずわかってもらえるはずですから。

頭を坊主にすることで、子供たちの世界を一度分解することができる

男の子は全員、坊主にします。

青々と刈り上げます。女の生徒は長い髪をおかっぱ程度に短くします。ショート・カットで髪を染めている子供の場合でもハサミを入れます。故意に、めちゃくちゃにハサミを入れます。

これも、ヨットスクールにやってくる前に子供達がこだわっていた世界を1度、壊すためです。

あらかじめ書いておくと、こういった一連の方法は"理論"があつて始めたものではありません。私が頭で考え、こうするという意味があるのではないかと仮定してスタートしたものではないわけです。

全て、経験から導き出されたものです。

ヨットスクールに入って来た最初の日に頭を青々と刈り上げるのは、当初、別の目的がありました。もっと単純に考えていたのです。ヨット訓練で海に出る。何度も海に投げ出される。髪が濡れる。それをいちいち気にしていたのではトレーニングにならない。そういう理由が1つ、さらに頭にケガをした場合、坊主にしておいた方が見えやすい。頭は極めて大事なところですから、ハードなトレーニ

ングをする場合、常に気をつけなければならない部分です。海上訓練では、必ずヘルメットを着用させています。それでも、頭を傷つけた時のことを思えば坊主の方がいい。それが第2の理由です。そんな理由で坊主にしたわけです。

以後、何百人もの子供を見てきました。その結果として、ヨットスクールに入って来た時点で坊主にすると別の効果があることに気づいたのです。

子供達の虚飾が、一遍にはがれてしまう。髪の毛を伸ばし、丁寧にクシを入れている時の子供からは、彼らの本当の姿は見えません。ソリ込みを入れ、ツッパっている子供はかろうじて虚勢を保っているに過ぎないわけです。髪の毛は子供達にとって最後の拠り所です。そこだけは、自分の意のままになるわけですから。

その髪を刈り上げてしまふことで、子供達が持っていた世界を1度分解させることができます。子供の頭を刈るのはコーチか、あるいは先輩の子供達です。あえて、子供達自身の手でやらせます。

頭を刈り上げられた子供の表情は、一変します。何とも情なさそうな表情が見えてきます。子供は、むき出しにされた自分と向き合うわけです。虚飾を捨てて、ありのままの自分と対峙する準備が、これでできあがることになります。

親から私宛に書かれた手紙を紹介してみます。戸塚ヨットスクールにやってくる子供達は、簡単に類型化できません。

それぞれ、個別的な背景があります。以下に紹介するのは22歳でヨットスクールに入って来た青年の例です。ここでは名前を仮に"明男"君と呼んでおきましょう。手紙を書いてきたのは、明男君の母親です。情緒障害児達がどう生き方をしてきたのか、およその見当をつけることができます。

■手紙①——明男君の母からの報告

「前略ごめん下さい。息子・明男は22歳で無気力そのもの。絶対に動かず(社会が怖いのかも)、親にしがみついていると言えます。日常のこと一切に口を出し自分はやらず文句ばかり。

保育園に入った時から行くのを嫌がり、皆と一緒に登園せず私が毎日連れて行きました。初めての夏休み前日、ひきつけを起こし、小学2年まで年に2回やるようになる。それ以後はない。現

在でも脳波は多少の異常波はあるものの薬を飲む程ではなしとのことで現在に至っております。

小学1年の時に脳波検査を受け、その時の先生にはテンカンと言われる。以後、中2迄薬を服用する。小学校入学しても登校拒否をやり、小3の2学期迄は私が連れて行きましたがそれ以後は途中の松の木にしがみつき連れて行けなくなり、その後は自分で行ったり休んだり、時間になると腹が痛くなったり頭が痛くなったり。少しでも注意すると、頭が痛いと言って泣き、頭をタンスや壁にぶつけたりしました。

医者にガミガミ言うなと言われ、注意しなければいけない生活態度でしたが以後2年間位、親がじっと我慢の子をしましたので、我儘になりました。小3の時、盲腸手術入院中夜中にぐずぐず言って同室の者が嫌がりました。小さい時からかんしゃくもちですぐ怒ります。数学がわからんと言っては私に聞くので図入りで説明すると、自分は違ったやり方で式を書くと言う塩梅です。そしていつも教える度に私が殴られるのです(自分がわからないのに私がわかるため腹が立つのです)。これは何べん言てもだめでした。友達の家へ遊びに行くのにも、相手の家へ声もかけられず、ただ近くをぐるぐる廻ってるだけで、家人が気づいて声をかけてやっと家の中へ。親の顔もよく知っているのにだめなのです。人みしりは小さい時から激しい。又、保育園の時に私が用事で息子を連れて出かけた時も、相手の家の入口から3m位離れた所に止まり、どうしても家中に入らずに泣く。

中2の時、私が注意したのが気に入らず2学期末試験をボイコットし、俺は困らない、母ちゃんが困るだけだと言って澄ましていました。こんなことすると自分が困るのよと注意してやるのだが、3年1学期末に又もや平気で休む。先生に伝えると今度はやらないでしょと言うので、絶対にやりますよと伝え、その通りとなる。この時も、私が日常の生活のことで注意したのが気に入らんと言ってやったのです。そして本人は俺は困らん、母ちゃんが困るのだと言っていた。

中学へ入学してから担任の先生に相談したが、学校は関係ありませんとはっきり言われた(あまり体むので)。

中3の1学期に又、休みが激しくなり、9月から児童相談所へ55日入所。それ迄は、2年頃からものも言わず、暴力はふるう、お前、ばばあ、と言葉の暴力と行動の暴力。自分は絶対に

悪くない、人が悪いと。どこが悪いか教えて聞くと、自分で考えよと言って教えてくれず、相談所から帰って来てから少しづつ話す言葉も増え、母ちゃんと言うようになる。

高校へ入学してから始めの4月は張り切って行くが5月にはちばちば休み、6月に又多くと、いつもと同じパターンだ。2学期になつたら全然行かず、休むにつれて授業がわからず行ってもしょうがないというようになる。以後、数学の表彰状を渡すから出て来いと言っても行かず、留年。自分と同学年の人達が3年になる時、本人は3月31日迄待ってくれと言うのだが、先生達は10日迄に退学せよとばかりに迫り、嫌々退学させられる。そして、退学届に心身症のためと書くと、家庭の都合と書き直せと言ってくる(学校いわく、普通の人でもおかしくなるから、退学して学校のことは忘れろと言う)。

中学を卒業してから保健センターへ通ったが、そのうち本人は行かず私だけが話しに行く。

1、 今でも自分の気にいらないと暴力をふるい、近くのものを壊す。自分は布団の中で人に命令している。

2、 電話は2年位前にやっと出れるようになったが自分からはかけれず。

3、 自分の気に入らないテレビ番組を見ていると、馬鹿になるから消せと文句を言って消しに来る。そして自分は変な番組を見ている。

4、 主人と話をしていても、割込んできては反対し私の頭を叩く。人の頭は冗談でも叩いてはだめだと注意するが、ダメ。

5、 何でも俺に話をせよ、そうでないと坐り込むぞと言う。これはバイクを入れるのに物置を少し直す話を業者としていたのです。このように日常のことにいちいち口を挟み、自分のことは何もせず考えずこのままでいいと言っている。

6、 買物して来ると袋の中を覗き、日常の道具はこれはいらんから捨てるぞと言って処分しようとする(自分のものでない)。

7、 1つのことにこだわるので何べんも同じことを言う。家の中を時々、独り言を言って歩き回るし、物を置くにもまるで壊れ物を扱うようなやり方。新聞記事を見て興奮し、反論して歩きながらぶつぶつ言っている。時には畳を叩いている時もある。

8、 すぐに興奮するので、殴ったり、壊したり、その時は自分は痛くないのではないかと思う(手が体が)。

9、 水を使って洗う時は、念が入り過ぎてるので自分は洗はず、人にやらせてからそれを又洗う。人の気持ちなんか考えたことないのではないかと思う。人が仕事をして手が離せなくとも自分は布団の中から命令し、こっちが聞かないと怒り出す。

10、 私が時々間違えることがあると、母ちゃんしっかりせーよと言う。自分は?

11、 自分は何もわからんくせに決めつけてくる。本当に、何も知らない。

12、 現在は家の中、昆虫のことになると夢中になる。夏になると一遍だけ山梨の昆虫の会から手紙が来るので、その時だけ出かける。1回目はビジネスホテルへ1泊。2回目は行きと明くる日2泊して来たが、風呂へは入らず。

13、 私が帽子をかぶると気に入らん、やめろと文句を言う。人の勝手でしようと文句を言わんとヘコラしていることになるから、言うのだとのこと。

だいたいのことを書きましたが、まだ望みはあるでしょうか。とにかく私が憎くてたまらないのです。そういう感じですので何でも反対します。お願いできるでしょうか。

主人は自分から動こうとしません」

明男君は、そういう状態で入って来たわけです。もちろん、私は受け入れました。入校して来たその日に、明男君は坊主になりました。坊主にする理由を、こちらはくどくどと説明しません。する必要もないでしょう。彼に必要なのは、まず有無を言わさず立ち塞がってくる壁を見せることです。自分で越えなければならぬ壁を目の前に作ってあげることです。文句を言えば、それが吸収紙のように吸収されてしまう母親的存在ではなく、手ひどく跳ね返ってくる厳しい他人(大人)なのです。

Ⅲ章 問題児の親たち（前）

スクールはコーチたちの犠牲的努力のおかげで成り立っている

ある日のことです。 戸塚ヨットスクールの前に黒塗りのベンツが静かに横づけされました。

運転手が慌しく飛び出し、クルマの後ろを回って後部ドアに駆けつけます。両手でドアの取っ手に手をかけ、うやうやしくドアを開けると、1人のかっこいい紳士が降りてきました。

そういう形で、我がヨットスクールを訪問してくる紳士が、初めてだったわけではありません。運転手つきのクルマで乗りつけ、私が会って話を聞き始めると、押し出しのきいた体つきとはうってかわって、自信のなさそうな、落ちつかない目で自分の子供のことを語り出す。そんなことが幾度もありました。

ところが、その日の"紳士"は、ちょっと違ったのです。

彼は、自分の子供をしばらく預けたいのだと言いました。そして名刺を差し出します。建築会社の名前が書いてあり、肩書きには「代表取締役社長」と印刷されています。名前を聞けば誰でも知っているような、そういう大きな会社ではありません。

「いやあもう、会社といつても小さなもんで、私なんぞ社長といつても、とにかく苦労ばかりですよ。仕事のしんどいところを一手に引き受けているようなもので……」

そう言って一息つくと、実は1つ、お願いがありましてと、声をひそめて言うのです。

「ヨットスクールの、その費用のことなんですが、まあ、これだけの設備を揃えてやっていらっしゃるわけですし、子供は毎日3食食べながらトレーニングを受けさせて頂ける、簡単なことではないと思うのですが、実は、何とか少し、費用をですね、まけてもらえないかと……」

そこまで聞いて、私は少なからずア然としました。

この人は、どういう神経を持っているのか——。

戸塚ヨットスクールの入校金、合宿参加費は「入校案内」にも書いてありますが、ここでも紹介しておくと、まず「入校金」が50万円。合宿参加費は1日1万円。その他、冬期であるならばウエ

ットスーツ代3万円。ヘルメット、ライフ・ジャケット等の安全備品は無料で貸与しています。その他、健康診断料(入った翌日に健康診断を受けさせます)として1万円——といったところです(編集注：現在とは異なる)。

決して低廉であるとは思いません。

しかし、常時13人のコーチが24時間つきっきりで、子供達を監督しています。そのコーチ達にも、今のところ毎月約20万円程の給料しか支払えません。なぜかと言えば、ヨットスクールの管理、維持にかなりの金が必要だからです。事務所員や給食員の手当もあります。生徒、職員合わせて100名近い大所帯をやりくりしていくのにかなりの経費が必要です。"鬼のヨットスクール"といつても、雲や霞を食ってはやっていけません。むしろ、コーチをはじめとする職員には、色々な意味での悪条件に耐えてもらっています。ヨットスクールは、彼らの犠牲的努力のおかげで成り立っているというのが実情です。

訓練用のヨットは、特注品です。それが、子供達1人に1台程度は揃えています。1度買えば半永久的に使えるものでもありません。ベテランのヨットマンが乗るわけではないですから、操作ミスによって破損することは、しばしばあります。部品交換は日常茶飯事です。1枚10万円もするセールも、1回の訓練で1枚ぐらいの割合で破れてしまいます。激しい訓練をするですから、ヨットの消耗する度合いも当然激しくなります。ヨットは未だに大量生産されている商品ではないし、ステンレス製の物が多く部品も高くなります。

また、子供達の食事の程度を低くすることはできません。さらに、母子家庭や特別な事情がある場合、私は1日1万円の合宿参加費をとりません。家計にかかる負担のことを思えば、とれません。卒業までの期間は、当面の目標として3か月ということになっていますが、長引く場合もあります。長引けばそれだけ参加費がかかりことになります。しかし、予定より長引いたからといって、最初の3か月間と同じように親から徴収するわけにもいきません。明快な規定はありませんが、私は3か月を過ぎた場合、6か月までは参加費をとらず、せいぜい食費ぐらいを貰うことになります。しかし、親が子供を見限ったり、逆に子供が親の元に帰りたがらない場合には、お金をとることができません。私が面倒を見ています。

そういう中で、ヨットスクールを経営しているわけです。

その日のかつぶくのいい、ベンツに乗ってやって来た"紳士"に、費用をまけてくれと言われて、ア然とするのも無理はないと思うのです。私はその申し出を断りました。どうしてもと言うなら、まずあなたの乗っているそのクルマを売るべきでしょうと、私は言ってやりたくなりました。

弱い父親と強い母親の組み合わせが、問題児たちに共通している

また、こういう父親もいました。

その父親もやはり社会的地位のある人物です。職業は医師。年齢は40代の半ばといったところです。彼もまた、大きなクルマに乗ってやってきました。そのクルマから降り立ったのは父親だけではありません。カバンを持った秘書らしき人物も一緒です。

面と向かうと、父親はあいさつをし、本題に入ると、秘書が語り出すのです。こうこうこういう事情……。その話を聞きながら、父親の方は、ただ頷くばかり。ちょっと待ちなさいよ、と私は言いました。

「お父さん、私はあなた自身の口から話を聞きたい。秘書にクルマで待つように言って下さい」

父親は、驚いたような顔をしていました。そして当の父親が話し出すと、何とも要領を得ないです。子供のこと、母親のことをあれこれ語るのですが、それあなたとしてはどうしたいのかと聞くと、さっぱり明快な答えが返ってこない。子供をここに入れたいのか、否か。「やはりそこは1度、御相談してですね。私としてはまあ、健全な子供に育てたいと……ウニヤ、ムニヤ」そういう感じです。

ある会社社長も、秘書を連れてきました。こまねずみのように、ちょこまかと社長にくついて歩くタイプの秘書です。社長がタバコをくわえれば、サッと火をつける。社長がキミ、あれを出してと言えばカバンの中から不思議と社長の望むものが出てくるのです。

この社長も、話がポイントにさしかかると口数が少くなり、その代わり秘書が私に向かって説明するのです。社長は、ヨロシク、頼ムヨ、君、といった顔で私を見るばかりです。

いったい、この人達の家庭はどうなっているのか。心細い限りです。

子供が、大変なピンチを迎えるのです。すぐさま素直に育つことができず、心をねじまげてしまっている。その原因がそもそもどこにあったのか、この親達は考えたことがあるのだろうか。少なくとも、子供に対して父親のなすべきことをしたのか、大いに疑問を感じざるをえないのです。

ヨットスクールに子供を預けに来る親を何百組も見ていると、そのほぼ全員に共通した点があることに気づきます。

大きく分けて、特徴は2つあります。

その第1は「弱い父親」ということです。性格的な弱さというだけではありません。社会に出れば、彼らは一応一人前の仕事をしているのです。一人前以上の仕事を成し遂げている人もいます。しかし、こと家庭のことになると、弱さをさらけ出します。家庭での存在感が薄いのです。時には、家庭での役割を放棄している場合もあります。

妻が主導権を握り、その妻のやり方に不満は持っているのだが、それを強く主張しない。

「あなたは子供のことなど何もわかっていないのだから口出ししないで下さい！」

妻にそう言われると、もう黙りこくってしまう父親は少なくありません。一度、引き下がつたら最後、父親は家庭での主導権を失います。失ったあげく、問題が大きく傷口を広げた時に悩み、うろたえるのです。

親の第2の特徴は、今のことから当然のように導き出されます。

即ち、「(家庭内で)強い母親」です。きょう慢な母親と言ってもいいでしょう。

その父親と母親の組み合わせは、不思議と、多くの子供達に共通しているのです。

前章で、ある母親からの手紙を紹介しました。その末尾にこう書かれていたのを覚えておられるでしょう。

「夫は、動こうとはしません」

あの、長い手紙の中で「夫」という言葉が出てきたのはそれ1回きりです。母親が書いた手紙だからという事情もありますが、我が子の教育問題の悩みを打ち明けるのに、家庭内の最も重要な柱である「主人＝父親」の影があまりに薄いことに、驚かざるをえません。

母親のみが、子供に没入してしまっているが如くです。それを父親が力なく、呆然と見つめているのです。"父権の喪失"—そのことを、どうしても問題にせざるをえなくなります。ヨットスクールの教育を考える際にも現代における"父権の喪失"というテーマは重要です。

社会的地位の高い父親の家庭から火の手があがるケースが多い

ここで何通か手紙を紹介しましょう。いずれも、父兄から私宛に書かれたものです。

前章から引き続ければ、次の手紙が第3の手紙になります。第3の手紙は、子供(と言っても20代の半ばを過ぎた青年ですが)の姉が書いてきたものです。なぜ、父親でも母親でもなく、姉が書いてきたのか。読み進むうちにわかります。この家族は5人姉弟。4人の姉と弟1人という構成です。上から2番目の姉が、末弟のことについて次のように書いてきました。

■手紙③—本人の姉からの報告

「突然お手紙を差し上げる失礼をお許し下さい。もう、どうしてよいか途方にくれ、家中がノイローゼ気味でございますので思いあまってペンをとりました。

実は弟のことです。弟は県立高校を卒業後、近くの町の中小企業に勤めましたが4年程で2回程会社を替わりました。本人は東京に出て働くことを希望したのですが、一人息子なので母の強い反対に会い断念したようです。そして3回目にある大手企業に勤めたのですが、ここも半年ぐらいで辞めました。その頃から少し、弟がおかしくなってきたのです。女ばかりの兄弟と、生活することの全てにおいてだらしない母と、おとなしいだけの父。誰にも相談できず1人で悩んでいたらしいのですが、痔の病気があつたらしいのです。ひどくなり、近くの医者に通ったのですが治療が思わしくなく、次に他の病院で手術を受けました。それも結果が

悪く、仕事をすると手足がしびれるとか、立っていることがつらいと言い、会社を辞めてしまいました。

上司が心配して、家まで来て説得しても大声でどなり散らし、帰らしたそうです。それまでのおとなしい弟からは想像もできませんでした。

前後して、交際していた女友達とも別れたそうです。その頃からおかしなことを言うようになりました。私の家では、どの子供も自分の生活のことを両親に話すことは全くありません。とても相談できる両親ではないのです。

ある日、弟が急に真剣な顔をして言うのです。Aさん(弟を、実の弟のように可愛がってくれた人)の奥さんが俺のことを好きだと言ってAと別れると言っている。Aさんの家では今そのことで大騒動が起きている。自分もAさんの奥さんが好きだから、子供2人は自分で引き取り、結婚しようと思う……。両親はびっくりして、とにかく父と一緒にAさんの実家に来るよう言われているからと言って、弟は父と一緒に出かけて行きました。父が事情を説明すると、相手はきつねにつままれた様子でびっくりし、息子夫婦は円満でそんなことはない、おかしなことは言わないで欲しい。父は大恥をかいたと言っていました。弟の妄想らしかったのです。

でも、おとなしいだけの父と、口だけうるさく1人では何もできない母は、オロオロするだけで私達にもこのことは伏せて、弟には、腫れ物に触るようにそっとしておきました。そしてこのことはAさん夫婦には絶対だまっているようにとの話だったのですが、いつか弟の友達に知れ渡り、毎日2、3人、多い時は7、8人も遊びに来ていた友達は、ぱつたり来なくなりました。そしてあいつは頭がおかしくなったという噂が広まってしまいました。私達家族も、弟が頭がおかしくなったなどと思うのが嫌で、そっとしておいて気持ちが落ちつけば、又、元のようになると、無理に信じてそっとしておきました。

ところが弟は家に閉じこもり、一步も外に出なくなりました。毎日、テレビとレコードだけです。私達もできるだけ説得をし、励ましたり、色々したのですが、人を馬鹿にしたような笑いをし、強く言うと目を吊り上げて怒り出すのです。母は2回ほど首を絞められたそうです。父は、強く叱ることはせず、オロオロするだけです。

そして、病気の経過が悪く、働けないの一点ばかりの弟に、とにかくもう1度、医者に診てもらうように言っても、もう生きているのが

不思議と言われているんだとか、手足がしびれて仕事など出来ないとか、俺の体をこんなにして、あの医者から慰謝料をとつてやるなどと言うのです。父は勤めに出ていて、弟は母といつも2人だけになります(注・姉達は皆嫁いでいる)」

ここら辺までが、本人の現状を説明してあり、その次に手紙の主は、両親のことをこと細かに書いてきます。

「……母は本当に、全てにとてもだらしなく頼りにならない人なのです。一人娘で父を婿養子にもらったのですが、母の父親は母が27歳の時に亡くなり、実母と暮らしていたのですが、とにかく仲が悪く、実の母子あんなに仲の悪いのを未だに私は見たことがありません。祖母は10年前他界しましたが、町中の人々、誰一人知らぬ者はない程(祖母と母は)1日中、喧嘩ばかりしていました。私達はもの心ついてから2人が仲良く話をしているのを見たことがありません。口喧嘩だけならまだしも、取っ組み合いの喧嘩も再三でした。おとなしいだけの父はいつも黙っているだけなのです。

それに家はひどく貧乏でしたのに、母は掃除も洗濯も、台所仕事をもほとんどきちんと出来ず、買い物にも1人では行けないのです。生活に必要なことは全て父がしました。母は1人では何もできないのにグチばかり多く、別に働くわけではなく、いつもお金に困っていました。小学生だった私や妹はよく質店へ行かされ、母は物影から私達がお金に換えてくるのを待っているのです……」

手紙は、まだまだ長文のものですが、ここら辺でカットします。

この姉は、弟を精神病院に連れて行きました。その結果、初期の分裂病ではないかという診断を下されたようです。にもかかわらずあえて、戸塚ヨットスクールに入れたいと言ってきたのです。

この例は、親の問題を考える上で一般的ではないかもしれません、例外的ケースだとは言えません。この家族が住んでいたのは、都会から少し離れた郊外です。両親が結婚した頃は、まだ農村だったはずです。そういう所で"ムコ養子"として入ってきた父親の弱さ、母親のきょう慢さが、子供の背景として見えてきます。

もう1つ、例を挙げましょう。

ここで問題になっているのは、高校生の女の子です。登校拒否から非行へとエスカレートしていきました。その問題を抱えたのは、ある都市に住む開業医夫婦です。何人の医師、看護婦を使

いながら個人病院を経営する父親。年齢は、まだ50歳前です。現代では、間違いなく成功した部類でしょう。

エリート・サラリーマン、医師、弁護士……。こういった社会的地位の高い父親の家庭から情緒障害児問題の火の手が上がるケースは、しばしばあります。いやむしろ、そうした家庭につきものだ、という気すらします。ヨットスクールには、いわゆる社会的名士とされている親を持つ子供達が、驚くほど大勢入学してきます。実名を出せばすぐにわかる人が何人もいます。社会的尊敬を得、経済的に豊かな家庭ほど……、と思えるくらいです。

なぜか?それを考える前に、まず、この開業医からの手紙を紹介しましょう。

■手紙④——登校拒否、非行の娘を持った父親(都市に住む開業医)からの報告

「先日はご多忙の折、ご親切にご指導頂き、本当に有難うございました。戸塚スクールを訪問し、校長、コーチの方々の、曲がった子供の心を根本的に叩き直す精力的な姿を見てただただ感銘し、我が子を鍛え直すにはここしかないと思った次第です。

小生、出来るだけ子供と接し、家族ぐるみの生活をしたいと思いつつも、つい仕事に追われ、又、職業柄、昼夜を問いませんので、つい接する機会が遠のき、それに拍車をかける如く母親が"無頓着"で、子供に対する愛情がないため放任してしまい、小生に子供のことに対しては一切相談なく、言えば怒られるのではないかと相談どころか"かくす"様になり、小生が気がついた時には、既に登校拒否→非行の道へと歩んでいました。

中学2年の後半より登校拒否が始まったようで、まだこの頃は自分の都合で学校へ行ったり休んだりしていたようです。学校の先生が迎えに来たりしていましたので、小生、わかった次第です。

そして中学3年になっても、学校へ行ったり行かなかったりが続き、さて高校進学となり私立の女子校へ入学させたのですがやはり勉強に遅れをとったためか、出て行ってもわからないから行かなくなる。行かなくなるから悪の道へと入っていき、自分勝手な行動をとるに至ったものです。

小生は出来るだけヒザを交えて話をするのですが、その前では素直に聞いているのですが、又、翌日から同じ行動をしています。

小生がびっくりしたのは、暴走族とのつきあいがあると感じた時です。仕事をしているのでわからないのですが、男から電話がかかっては出て行く、又、自分勝手に電話をしては喫茶店へアルバイトに行く、男の家へ外泊する。小生が怒れば、しばらくはじつとしているが、又、目を盗んでは外泊するといったケースが続いているようです……」

というのが、この女の子の非行のあらまで、この医師が頭を痛めているのは、実はそのことだけではないことが、この後に続く話から見えてきます。

「……これから述べることは御想像しにくいかと思いますが——。そのような男からの電話が入ったりしても何も言わないどころか、その男の所へ外泊している子供を迎えに行ったり、又、喫茶店への送り迎えをしている"家内"がいるということです。

男の言う意見を尊重し、私が娘のことを心配して、相手の男の住所でも電話でもよいかから教えてくれと家内に言っても、知っていて知らぬ、存ぜぬの一点ばかりです。このことは病院の電話ではなく、家内と子供専用の電話があり、あまりにも心配になつたのでチーフに盗み取りしてとったためにわかつたことです。

それからというものは、もうどうしてよいやらわからなくなってしまい、夜も寝つかれず、悩み続けました。やっと小生の決心が決まり、このままにしておいたら、いや、母親のそばにおいておいたら思つたら、子供の将来のことを考えたら、身震いしてきました。

子供を鍛え直すには、スバルタしかない。それも両親の元では出来ない。そう思つて子供をお任せする次第です。

素直ないい子だったのですが、髪はパーマをかけ、服装も乱れてきました。優柔不断なところがあり、決断しにくいという欠点があります。特に病気といえば、中耳炎があり、だらたらしているから風邪をひきやすいといった程度です」

といって、娘のことをよろしく頼むと書いているのですが、この医師は最後にもう1つ、こう書いてきています。

「母親(家内)もそちらで炊事などで厳しくして欲しいところですが、ダメでしょうか……」

この父親の手紙の、最後の一言に、彼の家庭の真の姿がかいま見えるような気がします。

ここで問題になっている女の子は、この手紙が届いて間もなく、ヨットスクールに入って来ました。髪を染めていました。上目づかいで、私を見つめています。

すぐにヨットスクールの方法でトレーニングを開始しました。顔の表情が変わってくるのに、長い時間はかかりませんでした。このことはまた後で詳しく書くつもりですが、子供達の表情は入って来た直後から急激に変わり始めます。四六時中、眉間にしわを刻んでいた子供から、目と目の間の深いしわが消えていき、表情は明るさを取り戻していきます。アゴを突き上げ、やや下向き気味の視線でそちらを歩いていた非行少年の目が上を向き、丸くなっています。

この少女は、3ヶ月もかからず、丸い瞳を取り戻しました。

Ⅲ章 問題児の親たち（後）

子供が小さければ小さいほど、父＝父権は、精神的な柱です

両親の話に戻りましょう。

この医師の家庭は、典型的な現代の家庭と言えるでしょう。

父親には、多忙な仕事があった。

それによって、彼は成功者になることができた。恐らく人の何倍もの収入を得たでしょうし、社会的地位もつかんだでしょう。

気づいたときには、娘は母親との間だけのコミュニケーション・チャネルを作っていたと彼は言っています。そして、子供を甘やかす母親は、男友達の所に泊まっている娘をクルマで迎えに行くようになっていたというのです。

そうなる以前に、いくつかの出来事があったことは間違いないありません。

それは父親と母親との間のコミュニケーション・ギャップです。母親は、この父親にだけは娘の居所も、娘が何をしているかも言うまいと決めています。そして、父親は、その母親も娘と一緒に戸塚ヨットスクールに入れてもらえないだろうかと頼んできているのです。もちろん断りました。

この断絶、不和がどこから始まったのかは、私は知りません。しかし、父親が娘の教育に口出しできなくなるくらいの昔から始まっていたことはわかります。

父親は、毎日家庭にいながら、子供の目から見れば、実質的にはいないのです。

母親はいます。母親は父親を子供から遠ざけたでしょう。よくあるケースです。子供を自分の味方にひき入れる母親の姿です。

母親と子供のこんな会話を、あちこちで聞くことができます。

「ウチはお父さんがかいしょなしだからねえ。○○ちゃんに何もしてあげられないのよ」

「かいしょなしほって、何？」

「何にもできないダメオヤジってこと！」

あるいは、こういう会話――

「ウチのパパは働いてばかりでしょ。だからパパがいないときはママをパパと思ってね」

「でも毎日、パパに会いたいなあ」

「会ってもダメよ。何にもわかつてないんだから。仕事だ、仕事だつて言いながら飲み歩いてるんだから。パパなんていなくたってママがいれば大丈夫」

テレビ・ドラマを見ていれば、必ず何度かは聞いたことがあるはずです。

子供が中学生、高校生になって、モノゴトの道理をある程度わきまえていれば、どうということはありません。しかし、子供が小さければ小さい程、"父"の喪失はショックなものです。父＝父権は、家族の精神的支柱です。父権の喪失は、日常的な、ごく小さな出来事から忍び寄ってくる。

この医師は、それを望まなかつたはずです。にもかかわらず、家族の中で浮き上がっていた。夫婦関係の中から逃げることによって浮き上がったのか、妻＝母親から突き上げられるようにして浮き上がったのか。いずれにせよ、浮き上がつてしまつたわけです。

これが父権の喪失の1つの例です。

もう1つ、また別の形の父権の喪失があります。

父親が決断から逃げれば、家族はそれを見てよけいに不安になる

例によって、父親が私にコンタクトをとつきました。「愚息の御指導を賜わりたくて筆をとりました」といつて、1通の手紙が寄せられてきました。

子供の名前は弘君と、ここでは仮に呼んでおきます。弘君の父親は地方公務員です、東京近郊の、急激に都市化が進んでいる市に住み、父親は役職についています。40代の父親です。弘君は中学3年生。非行問題を起こしたことが、始まりでした。

■手紙⑤――弘君の父親(地方公務員)からの報告 「前略突然のお手紙にて失礼申し上げます。私どもは結婚約17年、夫婦の間に高校1年の長男と中学3年の次男がありますが、ヨツ

トスクールのお世話になりたいと申しますのは、その次男の弘でございます。

昨年秋、すなわち中学2年に在学中の2学期から素行が乱れ、契煙、無断外泊、登校拒否、万引きなどの非行を次々に行い、3年生になって間もなくの本年5月、校内でグループの友人2名と共に他の友人に暴行を働き、傷を負わせ、ついに警察の補導を受けるに至りました。

さすがに本人もその時は反省し、立ち直りたいと申しますので、それにはグループとの関係を断ち切り、環境を変えることが第1と思い、たまたま私の友人で都内において私塾を経営しているA氏の勧めもあって、弘をA氏宅に寄宿させ、そこから近くの中学校に通わせようとしたが、親と同居なしでは入学を許さないという制度に阻まれ、通学できないままA氏の塾で指導を受けるという生活が始まりました。

しかし、生来、意志の弱い当人のこと、学校へ行かないために友人もできず、親元を離れての生活に耐えられなくなつたのか1ヶ月ばかりで白毛へ逃げ帰ってきたのです。

今思えば、私どもも信念に欠けていたことになるのでしょうか、折から、子供はあくまで親が手元で育てるべきだという警察の注意は私どもを動搖させ、今度は妻の親戚の近くに、アパートの1室を借りて妻と弘が住み、そこから中学校へ通学させる運びとなりました。

言うまでもなく、父親の私も居を移すのが自然の姿でありますが、そうなると高校へ入学したばかりの長男への配慮がおろそかになります。長男の方は一応、健全な学校生活を続けておりますが、気持ちの不安定の年頃ゆえ、転校はもちろん、東京からは遠距離になる(地元の高校への)通学を無理に勧めるわけにはいきません。

そこで父は自宅に留まり、主として兄の世話をする、時には交代して弟の方も面倒を見るといった一家二分の生活が始まりました……」

何のために、この手紙を引用しているか、一言だけ言っておくと、この父親の"迷い""逡巡"ぶりを指摘したいからです。この父親は大学を優秀な成績で卒業し、公務員になりました。その後も、順調に出世街道を歩いてきた人です。同期の人達に決して遅れをとることなく、先頭集団を形成しています。マイホームも建て、2

人の子供にも恵まれました。このまま、何も起きなければ順風満帆の人生といえるでしょう。

ところが、次男の非行から、弱点がさらけ出されてくるのです。

喫煙、無断外泊、登校拒否、万引き……。いいことだとは言いませんが、他にすべきことをきちっとていれば、さほど心配することでもありません。少なくとも、私の時代の不良は、学校ではやるべきことをやり、それでもまだ物足りず、街へ出て行ったものです。ケンカはエネルギー発散の場でもあったわけです。

だから弘君の場合も、大目に見ておけばよかったですと言ふことはできません。残念ながら、弘君に関する細かな情報がないのです。明らかなのは、この父親が、うろたえ、迷ったということです。まず、都内の友人を頼ります。

しかしそれは、ハラの底から出た決断ではなかった。弘君が家に戻って来ると、父親は家へ迎え入れてしまうからです。そして、その説明として「子供はあくまでも親元で育てるべきだという警察の注意」があったからだと言っている。

弘君を家に迎え入れた理由を、外に求めていません。自分の決断のなさではないと、弁解しているのです。

次に、父親は折衷案を出します。地元の学校は弘君にとってはよくない。かといって、親が一緒になければならない。長男の通学問題もある。家を処分してまで家族全員で引っ越すということまではしたくないという気持ちもあったのでしょう。それらの条件を全てかみ合わせて、母親と弘君を都内に住ませ、父親は長男と住むという案に落ちつくわけです。

仕事の上でならあちこちから言ってくる要求を巧みに組み合わせ、妥協案を作り出して各方面を説得するというテクニックは評価されますが、家庭は仕事ではありません。こそくな知恵を働かせれば問題が解決するものではありません。むしろ、こじらせます。

家庭においてリーダーシップを握るべき人間が基本方針を定めたら、容易に動かすべきではない。それが家庭です。往々にして、インテリは、こういう局面で弱さを表すのです。弱い。実に弱い。子供のためを思ったと父親は言うでしょう。そうしなければ、もっと反抗して悪くなつたかもしれない。そう言いながら、結局のところ、父親はたかが子供の起こした問題に振り回されている。

自分を見失っているのです。オレはこういう方針でやる、それは変えない！明確に1本の線を引くことができない。家族の顔色を見ながら、方針を決めようとする。家族はそれを見て余計に不安になる。不安になるから大きな声で父親に言う。「そんなことじゃ、ダメだよ」。それは不安が言わせるのです。それを、このタイプの父親は反対意見と理解する。反対意見があるんだから、ここは民主的にお互いの意見のいいところをくつけて解決しよう——それが"弱い父親"の思考回路なのです。そして、実は、自分で決断することから逃げている。ここにも、もう1つの"父権の喪失"があるわけです。

弘君の父親の手紙を、続けて紹介しましょう。

子供にとって完璧な父＝父権が必要であり、母＝母権が必要です

「弘の新しい学校は、問題児も少ないせいか、また当人もその頃多少の意欲もあったせいか、この方針は成功したように見えました。

夏休みに入ってからもプールでクロールの特訓を受けたり、夏期講座に通ったりして、この分なら来春には都立高校に進学できると夫婦で喜んでおりました。ところが2学期、9月下旬になると、再び様子がおかしくなったのです。やはり、2年生の後半から全く勉強しなくなった学力のギャップはいかんともしがたく、学習意欲をすっかり消失させてしまったことに始まり、10月中旬以降は下校の途中で寄り道して帰宅が遅くなることも多くなりました。

もちろん、私ども両親も心配して再三、注意しましたが、一向に直りません。転校生ということで、当初は友達ができず淋しがっていたのが、校内でも数少ない問題児達との交友が生まれ、さらには同傾向の卒業生の輩下に入るようになったのです。

11月になってからは、テストで偏差値がついに39まで下がり(いい時は46ありました)、授業中の態度も悪いため、先生からこのままでは高校進学はどうてい無理と宣告されるに至りました。そう言われても、本人は発奮するどころかますます自棄の態度をとり、進学は完全に諦め就職を口にするようになりました。生活は旧に

復し、頭髪にパークをかけたツッパリ・スタイルで学校ではひんしゅくを買ひ、下校後は例の先輩、仲間達と遊び続けております。

担任の先生は、家族二分の生活に一因があるから一緒になるべきだと言われ、確かにそれももつともと思われますが、その実現のためには、前述の長男への影響をはじめいくつかの障害があります。たとえ強行したとしても、今となっては弘の生活を軌道に戻すのは困難でしょう。

私どもも、勉強の嫌いな者を無理やり高校に進学させるつもりはありませんが、就職するにしても、何一つ得意なものはありませんし、現在の態度と身についた怠け癖では、到底長続きが望めません。そして、そのうち警察沙汰になるような事件を起こすことも十分考えられます。

そこで夫婦が協議の末に結論に達したのは、いわゆる"甘えの構造"をどうしても断ち切らなければならないということでした。

かつて、A氏宅への寄宿という方法は、他人に子供を預けるという親の無責任ではないかという警察の意見もあって挫折したのですが、最近は弘の将来のため、たくましさを植えつけるためには、親元を離れて苦労させることが、むしろ真の愛情ではないかと考えるようになりました、そこで注目したのが貴スクールのことであり、ここならば弘も更生できるのではないかと思ったのでございます……」

糸余曲折を経て、弘君の父親はヨットスクールへの入校を考え始めたわけです。

この父親の悩み、迷いは、多くの親が落ち込みやすいものです。自分の子供が、どうやら問題を抱えているようだと知った時、誰もが最初は驚き、その後でどうしらいいのかと悩みます。迷います。

頭で考え、心で迷ったにしても、何も解決するわけではないと知りつつ、人間、迷うものです。その迷いの中で方向を定め、その方向に確信が持てない時、事態はさらに悪化します。親の迷いが拡大されて子供に伝わります。

しかし、この父親は決然と、方向を示すことができなかった。その弱さを"父権の喪失"と呼ぶならば、現代の子供が抱えている問題は、実に根深いことになります。

もう少し、親の話を続けます。

どういう家庭が、我が家ヨットスクールに子供を預けようとするのか、その背景を知って欲しいからです。

母親もまた、混乱しています。

ある母親は、子供とどう接していいかわからなくなってきたと、手紙に書いてきました。

■手紙⑥——小学校2年生の男の子を持つ母親からの報告

「前略、小学校2年生の男子のことで御願いがございます。

小学校1年の時、学校には何とか行きましたが毎朝泣いて、ぐずってなかなか行けないし、ちょっとしたことすぐ怒ったり泣いたり、4歳の弟や1歳の妹に乱暴をしていけませんでした。

今は学校に通っていますが、怒ったり泣いたり乱暴したりは相変わらずです。その上、母親に対してはちょっと気に入らなければ"バカ、アホ"と怒鳴ります。その上、自分のしたいようにしかしなくて、何を言ってもなかなか聞きません。今、考えますと小さい時の育て方が間違っていたような気がしてなりません。3歳まではいつも一緒に遊んでいまして、かまってばかりしていました。そのうち何も1人ではできなくなり、いつも親のそばばかりにいて離れず、1人遊びが全然できませんでした。

近所の子供を見て、あまりに違っていることに気がつき、かまってばかりいてはいけないと、無理やり親から離しました。親はなくとも子は育つという言葉をその時思い出したの如く、なるべく私はそばにつかないようにし、1人で何でもしなさい、遊びに行きなさいと突き放していました。

乱暴をし、母親に暴言をはくのは、愛情を求めているようでもあり、親の愛情を確かめているような気もするのです。人とうまく混じって遊べないし、何でもすぐ人に頼り、うまくいかないとぐずり泣き、怒ったりするものですから、なるべく言うことは聞いてやらなければいけないと思うのですが、何でもハイハイとそばについてしてやるわけにもいきません。

"まわりの人の態度を変えてやればよくなる。自信をつけてやりなさい"と言われ、できるだけそのようにしようとは思いますが、一度できあがった性格はなかなか直りそうもありません。

ヨットで自分のことは自分でできるという自信がつけば、少しは落ちついて他の人のことも考えられるのではないかと思いますが、戸塚ヨットスクール

まだ親の愛情を求めているのであれば、返って気持ちがこじれるような気も致します。

どちらで相談致しましても、抽象的な回答しか頂けず、幼年期の育て方が一生を左右するという話を聞いたりしますと、育て方に失敗したものはもう救われないのでしょうか。自分のことを考えますと、一生懸命育ても、失敗に後から気づくのであれば、もしそれに気づいた時はどうしたらよいのでしょうか。

学校には行きますが、一種の情緒障害のような気がしてなりません。子供をこんなふうにしたのは、母親である私の責任です。今、ヨットに出すことは子供から逃げることになるような気が致しますが、このままでは親子共倒れになりそうです。

追伸、1番問題なのは、親子の正常なつながりがないことです。私自身、どのように接してよいかわからず、親としての愛情がないようです。なるべく優しい言葉をかけてやらなければと思うのですが、スムーズに会話ができなくて、何かぎくしゃくしているのです。子供に愛情が持てないでは、いくら訓練して頂いても無駄でしょうね。

夜、怯えたように泣いて寝言を言うことがよくあります。余程、今まで苦しんできたのではないかと思うと、私自身、苦しくて生きた気持ちが致しません」

小さい時子供にかまい過ぎ、これではいけないと、この母親は方針を変えます。そうすると、今度は子供が素直さを失った。そこでこの母親はまた悩むのです。

これも、よくあるケースです。母親は、結局のところ、子供を突き放していません。自分の愛情がまだ欠けているのではないかと怯え、それが昂じて、親子のコミュニケーションをいびつなものにしてしまっています。ヨットスクールに出すべきか否かでも迷っています。出して子供がちょっとでも嫌がれば、この母親は自分が悪かったのだと思え、即座に手元に戻すでしょう。

この手紙にも父親の姿が見えてきません。一言も、触れられていません。母親と子供との関係で家庭を築き上げ、その中で苦しんでいるわけです。

基本に返ることが必要です。

現代の母親は、かつての時代に比べれば、はるかに多くの情報を得ることができる。知識も豊富です。向学心も強くなっているでしょう。自立意識も旺盛です。結構なことだとは思います。戦後

の日本の教育は、男女同権を旨とし、女性の立場を向上させる方向に進んできました。

これも、決して悪いことではありません。ただし、その結果として、より優れた女性、母親になることができるならば、の話です。

旧時代と新時代の間には過渡期が必ずあります。現代は、女性、母親にとって、そういう意味での過渡期です。

女性の自立が叫ばれ、一気に女性が自立できるのだという幻想があります。しかし、スローガンを掲げたからといって、女性が自立できるわけではありません。それは 1 人 1 人の意識と力の問題です。

女性には、どんな時代になっても母性が求められるのです。それを最も激しく求めるのが子供です。限りない優しさです。それは他方で力強い父性が確立されていて、初めて家庭内でバランスがとれるものです。

それゆえに、子供にとって完璧な父 = 父権が必要であり母 = 母性が必要なのです。

父親、母親の迷いは、そのバランスの歪みからも生じてきます。

ここまで書いてくると、もう 1 章を裂いて親について語っておくことが出てきます。

では、各家庭では、どうしたらいいのか——というポイントです。

IV章 父権の喪失

小さい子供の登校拒否は、夫婦の真剣な芝居で簡単に直る

私は、教育評論家ではありません。

"論"を語るだけで、事足れりと思うほど甘くはないつもりです。この本の中でも、私は極力"論"を避け、私自身が具体的に体験してきたこと、見てきたことを資料に基づいて書いてきました。

情緒障害児という言葉も、実を言えば、論を振り回す人達が作り出した言葉で、私は必ずしもこの言葉が適当だとは思っていません。英語では、前にも書いたように情緒障害を"エモーショナル・トラブル"あるいは"エモーショナル・ディスターク"と言っています。"障害"と言えば、何やら重たい感じがするし、現に重たい障害を心に抱えてしまった子供達も少なからずいるのですが、ヨットスクールに来てすぐに直ってしまうケースも、かなりあります。

登校拒否を続けている子供が合宿所にやって来ます。あるいは合宿とは別にやっている日曜スクール、サマースクールなどに入つて来ます。

彼らはいちように尻込みします。やりたくないと言うのです。そういう時、私達は子供を一喝します。

「なにを！男だったら、これくらいやらんでどうする！」

有無を言わさず、即座に作業につかせます。そんな風に強烈に言わされたことがない子供は、ビックリしてコーチの言うことを聞きます。どうやったらヨットに乗ることができるのか。どこに気をつけなければならないのか。本来、集中力と注意力を持っている子供であれば、すぐに飲み込めます。そして、私達はすぐにやらせます。

それで失敗せずにうまくヨットが操れると、それだけで子供の表情ががらりと変わるので。ハラハラしながら待っていた親の所に笑いながら走り帰っていく子供も私は数多く、見てきました。

そして、何度も、気の済むまでヨットに乗りに来るようになります。1週間経つうちにせっかく膨らんだ気持ちが、またしぶんてしまうこともあります。

1回目はふとんから出られず、2回目は自宅の玄関で吐き、3回目は電車の中で吐き、4回目はヨットの前で吐き、5回目

でやっと乗れたというケースもあります。しかし、そこまでいけば、後はスムーズに動き始めるのです。

その程度のことでの、"障害"が直ることもあるわけです。小学生以下であれば尚のことです。学者、評論家達が、頭をひねり回して"障害"と名づけ、結局こじらせてしまった子供達を、私は何人も直してきました。

それが私の"体験"です。理屈ではない。理屈はどうであれ、論は並べたてなくとも、直るのです。

軽い情緒障害児の場合、家で直せるのかと、しばしば聞かれます。「直せます」と私は答えます。

では、どうしたらしいのか。

いくつかヒントになる話を書いてみようと思います。ただし、これが必ず効果を上げるというものではありません。

ケースごとに事情は異なり、私は全てに有効な薬を持っているわけではないのです。ただ、私が経験の中からつかんだエッセンスが、いくつかあるということです。

前章で、どういう家庭環境が情緒障害児を生みやすいかということを、実際の例を挙げながら説明しました。

ここでまたまとめてみると、"父権の喪失""母性の崩壊"が背景になっていると言うことができると思います。

子供の第一反抗期は、通常3歳ぐらいでやってくると言われています。これは誕生してからの時間の経過によってもたらされるわけではありません。

赤ん坊は這うことからスタートし、立ち上がり、やがて走れるようになります。そこに成長の1つの山があります。走れるようになると、それは母親の保護圏からの第1の離脱なのです。子供は、走れるようになると同時に第一反抗期を迎えます。

それまでは、母親の絶対的とも言える保護が必要ですが、走れるようになった時から、母親は保護の度合いを緩めていいわけです。

そして、この時から子供はもう1つの大きな存在、父親に気づいてきます。わかりやすく言えば、子供は"やさしさ"だけでなく、"強さ"のバックボーンも求め始めるわけです。

小さな子供が、なぜ家を離れて外へ遊びに行かれるのかを考えてみればわかります。家庭という優しく、しかも強い存在があれば、後ろから守られていると信じができるからです。第一反抗期を過ぎると、もはや、優しさだけでは不安なのです。母子家庭の最大の問題はここにあります。

ついでにここで書いておけば、0歳～3歳の間における母親の心の揺れも、子供に影響を与えると言われています。例えば、この時期に母親が浮気をする。子供は根源的な不安を抱き続けるというわけです。母親の気持ちの上での後ろめたさが、過保護という不自然な形で子供に向けられるかもしれません。

さて、本題に戻りましょう。

何らかの形で子供にエモーショナル・トラブルが起きているわけです。それをどうしたらいいか、です。

子供が小さければ小さい程、以下に述べる方法は有効です。小学校に入る前、あるいは小学校の低学年ぐらいまでなら、おおいに効き目があると思います。

最初の方法は、家庭における父親の存在を子供にわかるように、意図的にクローズ・アップさせるものです。

夫婦で真剣に芝居をして下さい。

父親の強さを印象づける芝居です。理由を作つて、父親が母親を殴る。これが1つのシナリオです。理由は明確であればあるほどいい。

父と母の会話があります。

その中で、母親が口ごたえする。食事のことでもいいし、近所の話でもかまいません。間髪を入れず、父親は母親を殴る。

「おまえはいつも、そういうて口ごたえをする！ オレがこの家の主なんだ。主の考え方文句を言うな！ オレがこの家族を養っているんだ。オレがこの家を守っているんだ！」

母親は、そこで引いて下さい。さらに口ごたえし、夫婦ゲンカをすることが目的ではないのですから。

何度も繰り返す必要はありません。ただし、徐々に、父親をたてる方向に家庭をもっていって下さい。日常的な、ごく細かなことから進めていきます。例えば、食事のこと。毎日、必ず子供のいる

ところで、今日の食事の献立はこうこうこういうものを考えていますが、それでいいでしょうか。母親が父親に許可を求めるのも1つの方法です。

子供に父親の存在を強く印象づけていくわけです。

そうしながら、他方で子供に向かって父親の悪口を言うのは、論外です。母親は子供に対してあくまで優しく、父親はその母親に対して強くあればいいのです。

日常の他愛ない出来事の積み重ねが、子供を情緒障害にする

子供が、もう少し大きい場合はどういう方法が考えられるか。

小学校の高学年、中学生くらいになれば、突然の、夫婦の芝居は冷笑されるだけでしょう。

むしろ、別の形で父親の存在意義をわからせることが必要になります。それ位の子供になれば、家庭経済が父親の働きに負っていることはわかっています。しかし、そのわかり方は、漠然としています。サラリーマン家庭であれば、給料は銀行振込み、父親は母親から小遣い钱をもらうあり様です。子供達の目に見える形で、父親が家にお金を持ってくることはないのです。つまり、サラリーマン家庭では、父親の力のなんたるかが、子供には見えない構造になっているわけです。子供からすれば、父親が働いている現場を見ない限り、いくら説明しても、父親の権威は抽象的なものでしかありません。

これには具体的なケースがあります。

中学2年生の男の子の家庭内暴力で悩んでいる家庭がありました。思いあぐねて、ヨットスクールに入れたいと言ってきたのです。話を聞いてみると、どうにも手がつけられない程の男の子ではない。丁度どその時ヨットスクールが子供達でいっぱいだったこともあって、私は次のような方法を家庭で試してみたらと、アドバイスしたのです。

それは給料の受け渡し式です。

給料を銀行振込み制から現金の手渡し方式に変えてもらう。給料日の晩、母親は子供に今日はお父さんが1か月働いて稼いでくれた給料を持っててくれる日などと説明して、父親だけ

にごちそうを用意しておく。同時に、父親が毎日どういう仕事をしているのかを語り、それが社会の中でどんな風に役立っているのか、また父親が働いていることがこの家にとってどれだけ重要なことを語り聞かせる。

そして、父親が帰宅する。

母親は、父親を下にも置かない扱いをする。感謝の言葉を言い頭を下げる。

給料袋は、子供の見ている前で、父親から母親にうやうやしく手渡される。

「これで1ヶ月、やりくりしなさい」

と、父親が言い、その父親が食卓につき、最初のはしをつけたところ、他の家族は食べ始める。それがセレモニーです。

これを、中途半端ではなく、真剣にやること。そこがポイントです。今の子供は、テレビ・ドラマを通じて色々な家庭劇を見慣れているから、淡々と、さらりとやったのでは、インパクトが弱いのです。

しかし、どう考えてもこれは他愛のない儀式に見えます。が、子供がエモーショナル・トラブルを抱えるのも、実を言えば日常の他愛ない小さな出来事の積み重ねの結果なのです。

父親の頼りなさ。守ってもらい、安心したいという子供の本質的な父親に対する期待感。それがはぐらかされ続けることで、問題は徐々に大きくなっていくのです。

歯車を逆回転させていかなければなりません。

ヨットスクールに相談に来た母親は、とにかくやってみますと言って帰って行きました。その後、連絡がありました。

「主人は今さらそんなことやってみてもしようがないだろうと言ってたんです。でも、1度やってみましょうと言って、先月と今月、2回続けてやってみたんです。子供が変わってきたました。ともかく、以前のように家の中で暴れるのだけは収まってきたんです」

そういう電話をもらったのです。

繰り返し言いますが、こんなのは対症療法に過ぎません。これ位のことで、たくさんのケースが直るとは思いません。これはむしろ、ごく普通の、今のところとりたてて問題の出でていない家庭に向いて

戸塚ヨットスクール

いると言えます。情緒障害と言われる程のことはないにしても、現代人の生活の中では、父親の権威はますます子供からは見えにくくなっています。今はどこの会社でも給料の銀行振込み制を採用していますし、外に出て働く父親に対する社会のあつれきはますます、強くなっています。毎日、ぐつたりとなって家に帰り着くので精一杯というのが、ごく平均的な父親像でしょう。

日曜日は一日中、家でゴロゴロし、母親に嫌みを言われ、子供にはバカにされる。哀しむべき存在になっています。

子供はテレビから種々雑多な情報をかき集め、若いタレントの名前もろくに知らない父を単純に無能と決めつけます。

「ホントに、ウチのトーチさんはバカなんだから。もっとしっかり稼いでよ」

母親も子供の尻馬に乗って、平気でそんな風に言う。それが当たり前の風景になってしまっています。父親は、どうせこいつらに色々なことを説明してもわかりやしないんだと思い、言葉を飲み込んで、1人黙ってビールの栓を抜くわけです。

バカみたいな話じゃありませんか。愚か者が平然とデカいツラをしているのは、いい世の中じゃありません。子供は、ますます誤解を深めていってしまいます。そして、そのツケを払わされるのは、決まって最後に父親なる存在なのです。

基本に戻るべきです。

家庭という共同体の、最も基本的な秩序を回復すべきです。

そのために、ごく普通の家庭で、父親なる存在の復権を図ることが必要なのです。給料手渡しの儀式は、びほう策ですが、誰もがいつか、最初の針に糸を通さなければならないのです。

親もまた、おそろしい。最悪のケースでは親が子供を見捨てる

こじれに、こじれた場合どうなるか。その最悪のケースを、私が扱った具体例で書いてみましょう。親が、子供を見捨てるのです。

家庭内暴力、非行、無気力が手のつけられない程にひどくなり、親はどうにもならなくなって私の所に相談に来ます。

「もう諦めている。煮るなど焼くなと、好きなようにやって欲しい」

そう言いきって帰っていく親は、まだしも正直です。それは、腹の底からの叫びでしょう。

「まだ、見込みがあると信じています。今までありとあらゆる手を尽くした。それでもダメだった。しかし、最後まで子供の可能性を信じたいんです。戸塚先生、お願ひします。もう一度、子供にチャンスを作つて下さい」

涙をこぼしながら切実に訴え、子供を置いて帰る親がいました。
帰り道、何度もこちらを振り返りながら、頭を下げるのです。

よし、何とかこの子を立ち直らせてやろうと、私は思いました。その場にいたコーチも同じ思いを抱いたものです。

ところが――

その翌日、コーチが来て言うのです。

「あれはひどいよ。強烈なてんかんを持っている。クスリがないと、とんでもないことになる！」

てんかんの薬というのは、使用法が難しい。調合しなければいけない。

すぐ医者に連れて行くと、「このままだと、あと3～4日で死ぬよ」

私は急いで親に連絡を取りました。ところが、つかまらない。それまでどういう薬を飲ませていたのか、わからないと困るわけです。それを聞くために親に連絡を取ろうとするのですが、いつこうにつかまらない。本人の荷物をひっくり返していたら、たまたま、薬が出てきました。慌てて飲ませて、すぐに親の元に送り返しました。

その後で、父親は言いました。

「てんかんだなんて、そんな事実はない。何かの間違이다。もう一度、引き取ってくれないだろうか」

断りました。戸塚ヨットスクールに子供を送り込んで、子供を殺そうとしているとか考へられないからです。ところが、断ると、もうこちらへ向けて送り出したと言う。1人で来られるわけがないんです。知恵遅れの子供ですから。

ヨットスクールには現われませんでした。後で聞くと、途中で手配師につかまつたということです。その後、どうなったかまでは私の方では追跡していません。当然、使いものにならんと、親元へ帰されたはずです。

もう1つの例。

父親が、19歳の子供をヨットスクールに送り込んできました。その理由が、どうもよくわからない。どういうタイプの情緒障害なのか、要領をえんのです。その子供は、やせ細った、青白い顔をしていました。無口だし、これは典型的な無気力タイプかなと、初めは考えたんです。

父親が診断書を持ってきました。ほれ、この通り、肉体的には何の欠陥もない、差し出してくれた診断書にひよいと見ると、こう書いてある。

「頭頂部骨髄膜腫」

これは何だと言うと、その父親は慌てて、それは間違いだと言う。はつきりわかりませんが、その父親は何も異常が書かれていらない診断書と、医師の書いてくれた診断書を2通、持っていたのではないか。そして、間違って私達に見せてはいけない方の診断書を見せてしまった……。

「絶対、何ともない。この子は精神的に弱いところがあって、問題はそれだけだ」

そう言い張るわけです。

この父親は、完全にこの子供を見捨てているんだなど、私にはそう思えたのです。

しかし、そういう子供を預かるわけにはいきません。固く、お断りして、引き取ってもらいました。

親もまた、おそろしい。

そこまで切羽つまつたものがあったにせよ、死ぬとわかってヨットスクールに無理やり連れて来る親もいるのです。

そこまでいかないために、私は、いくつのケースを挙げながら、障害児の親について語ってきました。

子供を見捨てないために、誰かが子供とその親を救わなければならない。それが現時点の実に緊急を要する問題です。

テーマを、ヨットスクールに戻します。

私達は、ヨットを通じて何を子供達に与えようとしているのか。そして、子供達は、そこで何を見るのか——。

V章 子供たちは何をつかむか（前）

自分の子供はしごけない。他人だから厳しくしごけるのです

「かざぐるま」

子供向きに作られた訓練用ヨットのことを私達はそう呼んでいます。

どういうヨットか、説明しておきましょう。

船の長さが約 3.5m、幅は約 1.3m です。ヨットと聞いて、真っ先に思い浮かべるイメージがあると思いますが、それよりもずっと小さく、しかもスマートにかたどられているのではなく、むしろずんぐりとしています。へ先(船首のこと)は鋭角的ですが、船尾の方はのっぺりとしています。そして船尾には舵が取り付けられており、高さ約 5.2m のマストを立てると、それで基本構造はできあがり。帆は 1 枚です。

かざぐるまの特徴は、そのずんぐりとした船型にもありますが、もう 1 つ、大きなポイントがあります。

船底に、板状の突起が突き出していることです。これはヨットのバランスをとるためのものもあるし、同時に横転した時にヨットを立て直すための板もあります。

子供向けの訓練用ヨットを新たに考え出そうとした時、私の中に 2 種類のイメージがありました。

何にせよ、そのヨットは初心者が乗るわけです。しかも、中、高校生を中心として小学生も乗ります。

操作しやすく、しかも乗りやすいものがいいだろうとは、誰もが考えます。操作の難しい、しかも上手にバランスをとらないと倒れやすいヨットでは子供にとってはまずいだろうと、私も最初は考えました。

しかし、ふっと別の考えが浮かびました。子供が乗るからやさしいものをを考えるのは、むしろ間違っているのではないか。運動能力という点で子供と大人と比べた場合、優れているのは子供の方です。体はまだ柔らかいし、反射神経もいい。それに比べたら大人は体の動かし方を忘れてしまっているし、自分のイメージ通りに体を動かすことはできない。

大人の常識で、子供は大人より劣っていると思い込むのは誤解だ。そう思ったわけです。戸塚は、子供をバカにしきっている、子供を認めないとなどという表面だけの批判があります。しかし、その批判はそのまま批判者にお返ししたい。彼らの方こそ子供を軽視しているのです。童心主義の裏側には、子供に対する侮りが潜んでいるものです。子供だからこそ、多少、操作の難しいヨットも操れる。しかも、外洋へ出るためのヨットではなく、あくまで内海での訓練用ヨットなのですから、ヨットが横転することによって海に投げ出されても、ライフ・ジャケットを身につけてさえいれば安全です。

かざぐるまは、それゆえ、単純な操作で操れるヨットとしては設計されていません。むしろ、難しい部類に属します。

その、かざぐるまが、戸塚ヨットスクールの初心者訓練用ヨットとして使われているわけです。

こうした子供のヨットに対する考え方が、今日私達が大きな成果を挙げた原因の 1 つですが、その「考え方」を強調したのは、実は私ではなく、私から見ると「素人」であるヤマハの荒田重役でした。

戸塚ヨットスクールの朝は 6 時に始まります(編集注：執筆当時)。

子供達は一斉に起きると、合宿所のすぐ海側にある堤防に集合します。点呼をとり、まずは軽いジョギングからその日のトレーニングがスタートします。もちろん、朝食前です。ジョギングの距離は、さほど長くはありません。堤防の上を軽く走る程度。距離にしても 1 km に満たないでしょう。体を目覚めさせるのが目的です。

その後約 1 時間が、柔軟体操の時間になっています。

腕立て伏せ、腹筋……等々、いわゆる柔軟体操に属する運動は、ほとんど全て、この時間にこなします。この時間が、子供達にとってはなかなかハードだうう思います。特に新入生にとってはそうでしょう。

コーチは、例によって容赦ない態度で臨みます。甘い顔は、一切、見せません。

この現場は何度かカメラに収められ、週刊誌を賑わせました。これは訓練などではなく、私刑だというキャプションがつけられていきました。

繰り返し、言いますが、ヨットスクールのやり方は、厳しさが基本です。しかもそれは中途半端ではありません。殴ります。蹴ります。あえいでいる子供の背にあえて乗ることもします。それが、私達の基本方針なのです。

基礎体力がないまま、精神力強化のトレーニングをしてもいい結果はでません。また、その基礎体力をつけるためにこちらが強制しないと体を動かそうとはしない子供達がヨットスクールに集まっているということも、考えに入れて下さい。自主的に自分の体を鍛えようとし、前向きに取り組もうとしている子供は、ここには来ません。また、号令をかけるだけで自分が何をすべきなのかを把握し、遅れながらも皆について来ようとする姿勢を持った普通の子も、ここにはやって来ないでしょう。

それぞれの理由で非常に走り、家に閉じこもって暴力をふるい、心の持つて行き場をなくして無気力になり、しかもこじらせてしまった子供達が集まっているわけです。

体を強制的に動かさせようとするとき、彼らの反応はいくつかのパターンに分かれます。なるべくサボろうとするか、途中までやって諦めてしまうか、体中の力を抜いてこんなにやくのようになり体を動かすことを拒否するか、もうこれ以上やったら死んでしまうと哀訴するか、気を失ったふりをするか、途中でやめられる口実を考えるか……。そういうところです。

それらにいちいちこちらが反応していたら、何もできません。

「なぜ、サボろうとするのか？」

と問えば、彼らはこう答えるでしょう。

「オレの勝手だろ」

そこで、そうかじゃ勝手にしろ、と言つてしまったら、トレーニングすること自体、ムダになります。

「なぜ、体を動かさうとしないのか？」

と、"こんなにやく"に聞けばこういうでしょう。

「動かしたいんですけど、体が……体がいうことをきいてくれないんです、全然、力が入らないんです」

「体の調子が悪いのか？」

「体の調子も悪いし、それよりも体に全然、力が入らないんです。休ませて下さい。休めば少し動くようになるかもしれません」

戸塚ヨットスクール

そういう話をいちいち聞いたからといってどうなりますか？親ならば、それを聞くでしょう。学校の教師も、その言い訳を聞きます。無理にやらせて病氣にでもなられたら、責任をとらされるからです。問題が起きないよう、無難に教育カリキュラムをこなしていくのが学校の先生というものです。

しかし、その結果として子供達は増長し、不安を抱え、心をねじ曲げ、あぐくにヨットスクールへやって来ているわけです。

私達は、その子供達の前に、言い訳を決して聞かない他人として立ちはだかるのです。それどころか、サボればピントを見舞い、途中で諦めている者にはペナルティーを課し、もうダメだと言って哀訴している子供を足蹴にして立ち上がりさせ、そんなことで苦しさから逃れるのはもってのほかだという態度を貫き通します。

そういう基本姿勢は、最後の最後まで貫徹されなければ意味はありません。

ある日は、徹底的に絞り上げ、ある日は大目に見る。これではしごくことそれ自体がコーチの気まぐれになってしまいます。恣意的な暴力になってしまいます。

子供達の言い分は聞きません。どうあろうと、朝の1時間は徹底的に体を動かすんだということです。私やコーチ達が、そういう姿勢を保ち続けるには、強い意志が要求されます。心を鬼にしなければ、できるもんじゃありません。

それを見て、私にこう聞いてきた人がいました。

「戸塚さん、あなたは自分の子供を、あの子供達のようにしごけますか？」

私は、即座に答えました。「できませんよ、そりゃ」

質問してきた人は、それみろという顔をして私を難詰しようとした。それを制して私はこう言ったんです。

「あなたは、私が自分の子供に対してできないことを他人の子供には平然とやっていると言いたいんでしょう。その考え方は逆ですよ。他人だからこそ、できるんです。親が自分の子供に対しては絶対にできない厳しい訓練を他人なら課すことができる。それが必要なんです」

親ならできません。苦しげにあえいでいる子供をムチ打つようにして、さらにハードにもっと厳しくと、打ちのめすことはできません。他人だからこそ、できるのです。

情緒障害児に対して、私達があくまで親代わりではなく、よそのオジサンとして接するのには、そういう理由があります。

色々なところで、あれはやり過ぎではないかと書かれました。いくら何でもひど過ぎると。しかし、私は基本姿勢を変える気はありません。批判には、答えます。今、私がこの本の中で書いているように。しかし世間から非難されたからといって、私が信念を曲げれば、子供達はさらに混乱するでしょう。彼らの前に立ちはだかり、克服する目標であった壁が突然、目の前から消えてしまうですから。

私は、私の方法に自信を持っています。それは思い込みによる自信ではなく、今まで私の中を通過していった何百人の子供達の顔が見えているからです。もちろん、元気にやっている子供達の顔です。経験と実績が私を支えているわけです。

中途半端は死につながる。それを知ることがヨット訓練の第一歩

朝の柔軟体操は約1時間。

ヨットスクールでは午前7時から朝食の時間になります。

ヨットの訓練は、その後午前8時半頃からスタートします(編集注: 執筆当時)。

その前に、ここでヨットスクールの食事の内容に触れておきます。

次に掲げるのは、ある2週間のメニューです。これを見れば、子供達がだいたいどのようなものを食べながら生活しているか、わかると思います。

ついでに書いておけば、子供達のトイレの時間にも、様々な変化が現われます。

合宿所には各フロアにトイレがあることは前に紹介しました。合宿場そばの空地にも簡易トイレがあります。しかし、朝食後、全員が一斉にトイレに駆けつけなければ、機能はマヒてしまいます。が、そういうことはまず起りません。

私達は、子供がトイレの前で並んでいるからといって、訓練スケジュールは変更しません。スクールに入って来た当初、気遅れするタイプの子供はトイレでも悩むことになります。うつかりすると、出しそびれてしまうからです。むろん、どうしても出したい時に無理にガマンすることを強制しません。しかし、訓練時間でもない自由時

間で、トイレの空いている時間はいくらでもあります。私達は、一切、アドバイスしません。自分でいつトイレに行けば空いているか、考えさせます。ほどなく、自然に自分の生理的リズムを50人の共同生活の中で、ちゃんとつかむようになります。

ところで――

話を先に進めましょう。

どういう形でヨット訓練を進めるかです。

最も訓練に適した時期は冬です。

ウェットスーツを着てライフ・ジャケットを身につけても、海の水が身を切るように冷たい冬の海が最も効果を上げます。これも過去のデータからわかることです。

ヨットスクールでは、無理を強いる訓練を行ないます。しかも、かざぐるまは操作するのにやさしいヨットではありません。ヨットが横転し、子供達は海に投げ出される。その時、夏であれば返って気持ちいいほどでしょう。冬であれば、水の冷たさと寒気の厳しさが海からも伝わってきます。その冷たさに負けていては、ますます自分がつらくなります。そこから意欲が芽ばえてくるわけです。

かといって、夏の訓練が効果を挙げないわけではありません。

ヨットを海に浮かべる前から、戸塚式訓練法は始まっています。

まず、浜にかざぐるまを引き出し、帆を張ってマストを立てさせます。その方法、および海に出てからの舵のとり方、帆を動かすロープの使い方などはあらかじめ教えておきます。ただし、くどくどと何度も教えはしません。

「いいか、何度も言わないぞ。よく、聞いておけよ！」

そう言ってヨットを動かすためのいろはを教えるわけです。

かざぐるまは1人乗りです。手元にたぐり寄せ、風の向きに合わせて操らなければならないロープは6本あります。1度や2度、説明を聞いただけで全てを飲み込むのは不可能でしょう。が、あえて何度も説明せず、いきなりヨットに乗せます。

ロープの張り方、その扱い方などは新人係になっている先輩生徒なども教えてくれます。一通り、説明が終わったところで、我々は必ず、こう聞いておきます。

「いいか？わかったな？」

すぐにわかったと言う子供は、まず、いません。それほどの集中力を持った子供は、何の問題もなく学校へ通っているでしょう。子供達はいちように不安気な表情を浮かべ、何も答えません。

「わかったな？」

再度、念を押しておきます。

それを何度も繰り返すと、子供は「わかった」と言います。本當は自分をごまかしているわけです。そんなこと、こちらはわかっています。ここはとりあえず「わかった」という言質をとっておくだけでいいのです。

「よし、それじゃあ実際に乗ってみよう」

生まれて初めてヨットに乗る子供を促し、エンジン付きの救助艇に乗せ沖合に連れて行きます。子供は浜の近くでヨットに乗ると思っていたはずですから、岸が遠ざかるにつれて不安がります。沖合、0.5～1kmの所まで行き、エンジンを止めます。

そこで先輩の子供達がかざぐるまを操って沖合へ出て来るのを待つのです。かざぐるまが救助艇の所まで来ると、操船して来た子供を引き上げ、代わりに初めての子をかざぐるまに乗せます。

「よーし、それじゃあ、1人で岸まで帰れ」

そう言って、私達はエンジンをかけ、さっさと岸に戻ってしまいます。

子供にはライフ・ジャケットを着せ、ヘルメットをかぶらせていましたから、ヨットから落ちても溺れる心配はありません。落ちた場合の這い上がり方、ヨットが横転した場合の起こし方も、一通り教えてあります。

岸では、私達が望遠鏡で子供の動きを観察しています。

色々な子供がいます。

私達が岸に向けて帰ろうとすると、すぐに泣き出す子供。しばらく呆然として、何もできない子供。マストに必死にしがみついて落ちないようにだけしている子供。

すぐにロープを握り、何とかヨットを動かそうとする子供は、まずいません。

風は吹いています。帆は張られています。自然にヨットは動いてしまいます。しかも、不規則な揺れ方をしながら、今にも横転しそうになって——。

子供が海に放り出されても、すぐに助けに行きません。どうするか、観察を続けます。たいてい、ヨットのどこかにしがみついています。

10分程経って、救助艇で子供のそばへ行きます。しかし、助けはしません。

「早くヨットを起こすんだ！そして岸まで戻って来い」

怒鳴るだけで、救助艇はまた岸へ引き上げます。子供は、思いきり叫びます。「助けて下さい」

しかし、無視して、救助艇は岸へ。

それを何度も繰り返します。

「ヨットを起こせ！」

「できないんです」

「起こし方は教えたはずだ！」

「でも……」

「一度しか言わんと言ったはずだ。よく聞いておけと言ったぞ。おまえは"わかった"と言ったじゃないか」

子供の体力が限界に近づいてきます。船に上げてもらおうと、必死に弁解し、謝り、懇願してきます。

「すいません、もう一度、教えて下さい。今度はちゃんと覚えます」

中途半端に海へ出ることが、どれほど恐ろしいことを、体でわからせるのです。子供を船に収容し、私達は岸に戻ります。

それが、ヨット訓練の第1歩です。

苦しさをのりこえたとき、子供たちの心はガラリと変わっている

それ以前の段階で"洗礼"を受ける子供もいます。

小学校の高学年になって、自分でボタンをとめられないという子供がいました。いつもは母親が全てやってくれていたわけです。母親は、そんなことではダメだ、自分でやりなさいと言うのですが、子

供ができないと言って泣きわめければ、どうしても手を貸してしまいます。それが連綿と続いて、子供はもうすぐ中学生というところまできてしまったわけです。

浜に連れ出し、まず、ライフ・ジャケットを着るように言いました。ジャケットに袖は通すのですが、ヒモを結ぶことができない。それじゃダメだ、こうするんだとやり方を見せて、もう1度やらせようとしたが、ダメ。

「ボク、できません」

「ちゃんと着られなければ死んでしまうぞ。いいな」

「でも、できないんです」

信じられないかもしれません、そういう子供がいるのです。

コーチは、その子供をかつぎ上げ、海に入って行きます。そして海の中へ放り投げました。その子供は泳ぎを知りませんでした。あっぷあっぷしながら助けを求めていました。しばらくその様子を見た上で、コーチが子供を引っ張り上げます。

「ジャケットをちゃんと着なければ、死ぬ。ヒモの結び方は何度も言わない。よく見て、自分でやれ。いいな」

そして、もう1度、教えるのです。子供は苦しそうにあえぎ、肩で息をしながら、しかし、じっと結び方を見つめています。そして自分で何とか、おぼつかない手つきで、数本のヒモを結ぼうとするのです。

東山洋一君という子供がいました。彼がヨットスクールにやって来たのは昭和54年のことです。登校拒否児の1人でした。中学時代は野球部に所属し、高校へもすんなりと入学。別に何の問題もなかったはずです。ところが、高校に入学すると、クラブ活動を辞めてしまいました。その理由は、ちゃんと勉強しようとしたからだというのです。が、そもそも彼は勉強の好きなタイプではありませんでした。勉強もせず、クラブ活動もせず、生活がルーズになり、1度学校を休むと、それに拍車がかかり、ついにほとんど学校へ行かなくなる。そういう時、親に連れられて東山君は私達の前にやって来ました。

それから2年後、東山君は「第3回太平洋横断シングルハンド・ヨットレース」に出場しました。サンフランシスコから神戸までの単独太平洋横断レースです。2年間で、太平洋を1人で横断

するまでになったのですが、ヨットスクールでの東山君は、とりたてて運動神経がいいわけでもない、ここに来るごく平均的な子供の1人だった記憶があります。むしろヨット技術の飲み込みは遅く、他の子供に遅れをとっていた方です。

その東山君は太平洋横断レースの後、1冊の小冊子を書いています。『太平洋にかけた青春』(舵社・海洋文庫シリーズ)というタイトルの本です。

その中で彼は、戸塚スクールに入って来た直後のことを、こんな風に書いています。

■東山洋一君の手記——「朝は6時に起こされ、朝食前に体力作りのための体操がある。まず、砂浜でのランニング。それから7時過ぎまでのたっぷり1時間が、今までダラダラと生活してきた僕達にとっては、しごきにも似た厳しい時間となる。筋力、持久力をつけるために、腕立て伏せを中心に、腹筋、背筋、屈伸、2人1組で足を持ってもらい手で階段を上下する運動など。そういう身体に自信のある人でも、この1時間は厳しいなんていうものではないと思う。しかも、途中でくたばってしまうと、コーチに叩かれ、蹴られ、泣きわめきながらでも終りまでやらされるのである。

海上でも、一体、ヨットに乗るために来ているのか、怒鳴るために来ているのか、判断がつかないような状態。練習艇は"かざぐるま"と呼ばれる1人乗り1枚帆のディンギーである。

しかし、生れて初めてヨットに乗るのだから、当然、前に進むはずがない。おまけに風が強い日だったので、艇は何度も沈(チン=ヨットが横転すること)を繰り返す。今にして思えば、実際の風は順風だったのだが、その時は"強風"に感じた。もう死にもの狂いであつた。

初めのうちは専任のコーチが1人ついて教えてくれるのだが、僕はどうしようもなく覚えが悪い。コーチに言われたことに"ハイ、ハイ"と頷くのだが、艇は意志通りに動かない。"舵を放すな！""セール(帆)をよく見ろ！""周りを見ろ！""シート(セールを調整する綱)を引け！""ハイク・アウト(風で傾こうとする艇を、風上側に身体を乗り出して体重で抑えること)しろ！"……その他、色々のことを言われるのだが、蹴とばされても、叩かれても、海ヘドボンと落とされてもダメだった。毎日、身体のあちこちが痛かった。殴られたり、蹴とばされたりした個所がズキン・ズキン。

無我夢中でやったシートの出し入れで、手の平はボロボロ。身体中がヒリヒリ。おまけに朝の体操でヒドイ筋肉痛。

クッソー、なんてこった、思ってたのと全く様子が違うな。イテテテ、
クッソー、というのが本音だった。参った。まいった。

練習が終わったアトは、当然、ズブ濡れ。となると、楽しみは、
練習後のお風呂と食事。お風呂は、冷えた身体を温めてくれる
点ではとても良いのだが、ただ、あちこちの傷に熱いお湯がズキズ
キとしみてつらかった。……その頃の僕は、夜眠る前に必ず、ある
ことを考えていた。それは"どうか、明日という日が来ませんよう
に！"ということだった。夜がこのままずつと續けば、翌朝の練習も
ないわけだから……。しかし、朝は必ず来るし、厳しいトレーニン
グもまた必ずやってきた」

現場の雰囲気が伝わってきます。

もっとも、この東山君の文章は、彼がヨットスクールを卒業し、し
かもヨットによる太平洋単独横断を成し遂げた後で、書かれたも
のです。ヨットスクールに入って来た当初であるならば、これほどカ
ラリとした文章は書けなかつたでしょう。そういう意味では、今、現
にヨットスクールでトレーニングを積んでいる子供達の気持ちとはか
け離れているかもしれません。トレーニング中は、言葉にならない
苦しさがあります。そして、その苦しさを乗り越えた時、子供達の
心はガラリと変わっているのです。

VII章 子離れできない親たち

脱走したがる子供は、訓練でも"ハイ！ハイ！"と返事がいい

ヨットスクールの、あるベテラン・コーチがこんな風に言ったことがあります。

「ここで毎日、子供達と付き合っていると、テレビなんかいらんね」

私にも、その気持ちがわかります。

早朝からのトレーニングですっかり疲れきってしまい、テレビを見る余裕もなく眠り込んでしまうというではありません。ヨットスクールでは、毎日様々な出来事が起こります。昨日と今日が同じだったということがほとんどなし、毎日新たな事態が私達の目の前に現わされてくるのです。

「テレビなんか見てるより、こっちの現実の方がずっと生き生きしる。おもしろいって言えば語弊があるけど、朝、起きる度に今日は誰が何をやらかすかなって思う。そういう日常になっているんだよな」

コーチはそう言って、ため息をつくのでした。

ヨットスクールに入って来た子供は、まず、ショックを受けます。何らショックを受けずにすんなり溶け込む子供は1人としていないはずです。

ここほど厳しい生活を強いる場所は、他にはないでしょう。

私達は、口うるさいことは言いません。例えば、朝、コーチと顔を合わせた時のあいさつがなっていなかったとか、態度が悪いとか、そういうことで子供達を叱ることはしません。ここは大学の運動部ではありません。人間にとって、きっとあいさつをするだの何だのとうようなことより、もっと大切なことがあります。外面だけを取り繕つてみても、どうにもなりません。

その代わりに、中身の濃い訓練を課すことは、既に紹介した通りです。

その厳しさにショックを受け、毎日、毎日しごかれる中で、子供は何とかして、そこから逃れる方法はないかと考えます。最初はコーチの目が届いていないだろうと思われるところで、練習をサボります。これも一種の逃げです。サボることに対しては、私達は

強い態度で臨みます。1度このヨットスクールの訓練を甘くみれば、その子供は徐々にこちらをなめてきます。こんな所に入れられたつて、ちょっと要領よくやればヨロイもんさと、考えるようになるからです。ヨットスクールに来る前、彼らにとって社会が甘く見えたのと同様、ここも甘く見ようとするわけです。1度そのクセがつくと、その固定観念を壊すのに時間がかかります。それゆえ、私達は一瞬たりとも気を緩めません。

逃避するのではなく、与えられた環境の中で前向きに問題を解決するようにならなければいけないわけです。

子供達は、それに抵抗を試みます。

浅知恵も働かせます。

自分がなまじつか動けるからこんなに厳しいトレーニングをやらされるのだ、だつたらいっそ動けなくなってしまえばいい……。そう考えてメシも食わず、コロンと倒れてしまう子供もいます。

これはしかし、あまりの空腹に耐えかねてやがて元に戻ります。

仮病を使う場合もあります。

それを認めないために、あらかじめ健康診断をしておくわけです。本当に体の調子が悪いのか、仮病を使っているのか。その判断がつきにくい場合は病院へ連れて行き医者にみせます。特に問題がなく、仮病を使っていることがわかれれば、よりいっそう厳しく対処します。逃れることはできない、後ろ向きではなく前向きに前進しなければ、問題は1つも解決しないのだということを、具体的に、物理的に立ちはだかる壁を作つて見せてあげなければいけません。

状況からの逃避は、最終的には"脱走"という形をとります。

脱走劇は、しばしば起ります。

私達は、それを不思議だとは思いません。誰だって、つらいところからは逃げたいものです。冬の朝、いつまでもあのぬくぬくしたふとんにくるまつていいと、たいていの人は思うでしょう。起きるのはつらい。しかし、起き上がって出かけていかなければ、自分がますます窮地に追い込まれるので。それを知っているから、普通の人はふとんの中でじっと息を潜めていようとは思いません。結局のところ、つらさを避けねばそのツケがまわってくるわけです。だから、前向きになる。

ある週刊誌に戸塚ヨットスクールから脱走した子供のコメントが載っていました。

「計画は3人で立てた。だけど途中で見つかって、かわいそうだけど1人は見殺しにしてきた。あそこで教えられた通り、自分のことだけを考えて逃げたんだ」

そう書かれていました。

その記事の冒頭には、私が遠州灘沖で遭難した時、仲間のクルーを見放して1人助かったことが書かれていました。その記事を書いた記者は、脱走した子供のコメントを記事の末尾に書いています。恐らく、私に対する精一杯の皮肉のつもりだったのでしょうか。

しかし、この記者の頭は自分で思っている程よくない。そのことに気づいていなければ、よほどしっかりしてもらわなければ困ります。

なぜなら、脱走・脱出という行為には2種類あるからです。例えば、政治犯が獄につながれるとしましょう。彼が自分の政治的信念に基づいてそこを脱け出し新たな闘いをしようとする場合。あるいは、スティーブ・マックイーンの主演映画『大脱走』のように、戦争による捕虜が祖国のため、あるいは自由を求めるため敵の管理下から脱け出す場合。これらはいずれも人間の第3の本能、つまり進歩欲求に裏打ちされた行為です。その状況から"逃避"する行為ではありません。

それに対して、ヨットスクールから脱走したがる子供達は、状況それ自体から逃げているのです。冬の朝、ずっと温かいふとんの中にいたいと頑張っているのです。その行為と私の遭難体験とを同一線上に並べて皮肉の1つも言おうというのは、考えてみれば実際にセコい知性の産物ではありませんか。皮肉はときずまされた知性から生み出されて、初めて人の心を打ちます。

それはさておき――

ヨットスクールにやって来て、そこでも気持ちを後ろに向かがちな子供は脱走を考えるわけです。

ある子供、といつても19歳になっていた男の子ですが、彼は哥達の目を盗んでヨットスクールを脱け出し、警察に駆け込みました。

そこで、こう言ったというのです。

「僕を捕まえて下さい。僕は覚醒剤をやっていました。つかまえる理由があるでしょう」

警察はあれこれと本人から事情を聞きましたが、本人がそう言っているからといって逮捕するわけにもいかない。ヨットスクールから戸塚ヨットスクール

逃げて来たらしいことがわかったから本人の家族に電話をしました。このケースでは親が毅然とした態度をとってくれました。

「その子供は、理由があって戸塚ヨットスクールに預けているんです。ヨットスクールに戻して下さい」

警察は私達に連絡をしてきました。

脱走したがる子供は外ゾラがいいという共通点があります。

ヨット訓練でも"ハイ！ハイ！"と、実にこちらの言うことをよく聞くのです。何を言っても"ハイ、やります"返事だけはよくて、実際やることといえばちやらんばらん。その場その場をごまかしていけば何とかなるというタイプです。常に目の前の問題から逃げようとしているわけです。

逃げたい気持ちと、何かをつかみたい気持ちの両方が、子供にはある

脱走の例をもう1つ挙げてみましょう。名前を仮にD君と名づけておきます。Dがヨットスクールに入って来たのは中学2年生の時です。

父親が何とかしてくれと言って連れて來たのです。理由は「手がつけられない程の非行」でした。Dは大阪で生まれ、育ち、中学に入った頃から地元のヤクザと付き合いがありました。その仲間に入っても、することといえば要するにチンピラです。暴行、恐喝、盗み……。たいていのことは一通りやり、たまりかねて親か私に連絡を取ってきました。

入って來た時のDの表情はよく覚えています。不敵なツラ構えをしていました。おどおどしたところはみじんもなく、騒ぎたてるもなく、目は座りながらもおとなしいのです。これは本格的なワルだなと思わせる雰囲気を持っていました。

すばしつこく街をかけずり回っていた男ですから運動神経はよかったです。朝の柔軟体操でもネをあげず、ヨットを教えれば飲み込みは早い。人並み以上のことをすぐにやってみせるわけです。

その内に、ひょいと逃げ出したのです。訓練時間中ではなく、皆が寝静まった時刻を狙ったのだと思われます。

近くを探し、親に連絡を取ったが、まだ戻っていないし連絡もないと言う。警察にそれらしき男が保護されている形跡もない。どこかへ潜り込んだか、昔の仲間のところへでも隠れたかと思っていると、何日か経って本人が電話をしてきました。

「どこにいるんだ？」と聞くと「今、家から電話をかけてる」と言う。そしてこう言うのです。

「オレ、またそこへ行きたいんやけど……」

家に戻るまでどこで何をしていたのか、はっきりとは語りません。友達の所にいたと言うぐらいです。戻って来た時、私達はかなり厳しい態度で臨みました。

それからしばらく、また訓練が続き、その内また脱走したのです。

そして、前回と同じように本人が電話をしてくる。

それが5回程繰り返されました。何度目かの時、Dはいつもどこへ逃げ込むのかその場所を言いました。友達の所には違いないのでしょうか、Dは付き合いのあるヤクザの事務所というか、たまり場に逃げ込んでいたのです。ならばそこへ迎えに行こうと、コーチ達は出かけて行きました。どういう結果になるかわからない。腹にぶ厚い雑誌を巻いて出て行ったコーチもいました。脱走した直後です。本人がどういう感情になっているかわからない。また、仲間の前から強引に連れ出そうとした時、そこで何が起きるかわからない——。

その時はDはそのたまり場に姿を現わしませんでした。1度私達にしゃべってしまったので、警戒したわけです。そこまで細心の注意を払って逃げるくせに、必ずまた本人の方から電話してくるのです。1つには、ヨットが好きになっていたということもあると思います。スポーツは決して嫌いではなかった。ヨットスクールに来る前は、テニスをやったこともあれば陸上をやったこともある。ただそれが長続きしないのです。そして街へ出て行き非行を重ねる。その繰り返しだったようです。

5度目の脱走の時は私が迎えに行きました。今度こそ途中でつかまえてやらなければ、と考えていました。それまでのよう本人が電話をしてくる前につかまえ、こちらのペースに引き込まなければ問題はいつこうに解決しない。私はそう考えたわけです。

クルマを運転して大阪へ向かいました。繁華街の一角にある、たまり場のすぐ近くにクルマを止めました。そこにDの姿が見えたら、

有無を言わさずとにかく連れ帰る。そのつもりでした。周りに仲間がいても、何がなんでも連れ帰ろうと決めていたのです。恐ろしいという気持ちもあります。奴らが何をしてかすかわからない。しかし、それを気にしていたら何もできません。

私はクルマの中で待ちました。現われません。

結局、私はクルマの中で1泊しました。さらに待ちました。必ずDはそこに姿を見せるはずだと踏んでいたのです。

Dはその建物から出て来ました。どうやら別の入口から既に入っていたらしいのです。

「D！」

クルマから降りるとDはビックとして振り返りました。逃げるかなと、私は身構えました。走って逃げられたら当然Dの方が足が速い。Dはしかし、立ち止まったのです。逃げようとはしなかった。

「迎えに来たよ、帰ろう」

「しゃあないなあ」

それだけで終わりました。

まさか、あそこまで迎えに来るとは思っていなかつたと、Dは言いました。

それがDにとっては最後の脱走になったわけです。

その後、Dはヨットスクールにしばらく居続けました。中学3年はほとんど学校の授業に出ていなかったのですが、卒業だけはできました。卒業して4月が来ても、Dは何となくヨットスクールに居続け、やがて定時制高校に通うと言って大阪へ戻って行きました。定時制の方は結局のところ最後まで続かなかったようですが、仕事は辞めずに続いているようです。

Dのケースからわかることは、子供にはヨットスクールのしんどさから逃げたいという思いと、続けていて何かをつかみたいという思い、その両方があるということです。

逃げて家に帰れば叱られる。だからいいと言うまでここにいよう。そういう考え方をする子供もいますが、1度脱走した後でもう1度やり直してみようという子供もいるわけです。

Dはヨットスクールに抵抗しながらも、かろうじて克服していった例として位置づけられるでしょう。

そこでポイントになるのは、ここでもまた親の対応です。

親は口を出すな。一度まかせたら、最後まで子供に介入するな

次に紹介する手紙は、途中でヨットスクールを逃げ出した子供の親から私宛に届いたものです。この親は、逃げ帰って来た子供の話を聞いて迷いました。もう1度ヨットスクールに行かせるべきか、それとももうやめるべきか。私は、今やめれば全てが中途半端になる、もう1度ヨットスクールに来るよう説得しましたが、ダメでした。

母親は次のように言います。

■手紙⑨——途中で逃げ出した中学3年生(男)の母親からの報告

「……その後の子供の状態はあまり良くなく、特に2ヶ月も入った(ヨットスクールに)ことに対しては非常に不満を持っており、恨んでおります。勉強に対しては12月に入ってから学校へ行ったために、期末試験が受けられず、オール1の評価しかもらえず、高校進学といつても1番悪い工業高校しか受ける事ができず、不良のような子ばかりが願書を出しに来ただようで、受ける気もなくしてしまい、勉強する気はヨットから帰って2、3日はあったようですが、たった1週間ほどで冬休みに入ってしまい、冬休み中も何もせず、春、新学期が始まってからも、まるっきりついていけず、全く面白くなかったようで、随分お休みもしました。

もう卒業などどうでもいいと、すてばちになってしまった時もありましたが、何とかかんとか言ってやったり励ましたり、怒ってみたりで、どうにか無事卒業だけはできましたが、どこの高校へも入れず、今は夜学に行くつもりになっているようですが、ヨットへ行って少しでも自覚を持ってくれればと思いましたが、この子には無理だったようです。

所詮、心の病はヨットでは治せるものではありません。ただ外へ出していくことができたことだけ(注・登校拒否を続けていた子である)。それだけで、家の中では段々とえべり出してきています。

元々、友達の少ない子でしたので、友達らしい人は1人も居らず、本当に可哀そうなものです。学校へ行き始めて少しの間はよかったです、段々と村八分的になってしまったり、色々悩んでいたようでした……。

ヨットで本当に見違えるように良くなる子供と、家の子のように変わらない子と、色々いるのではないかと思います……。

2ヶ月は長過ぎたように思われます。返って変な図太さが出てしまい、今ではまた元に戻ってきつつあります。それでも今までのようになるきり1ヶ月も2ヶ月も家の中に居るという事は恐くないと思いますが、日曜日などは1日中、家に居ります。とにかくヨットへ出した時期が悪かったのだと思い、諦めております……」

この母親はすっかり落胆してしまっています。

1つ、明確に書いておくべきでしょう。

途中でやめさせた場合、事態はもっとこじれてしまうということです。

子供は、自分から積極的にヨットスクールに来る場合は別として、親に説得されたにせよ、親に無理やり連れて来られたにせよ、何でオレがこんな所で苦しい思いをしなければいけないのかと、当初は親を恨むようになります。そこでもまた、親に責任を押しつけているわけです。

その感情は私達が口で否定しても変わりません。だから私達は、私達の力で強制的にトレーニングを強いることによって子供達の目を海へ向けるわけです。そうすることによって、すぐに自分がなすべきことを知る子供もいます。甘えてると怒られるんだと悟り、生活態度全般を変えるきっかけを程なくつかむ子供もいます。しかし、それは軽い情緒障害のケースです。多くの子供達の場合、時間がかかります。海でつかんだ体験ががっちりと心に食い込むには、時間が必要なのです。

私は、一応の目安を3ヶ月と考えています。およそ、これくらいの日数をかけると、子供達はヨットスクールという新しい場での体験を血肉化し始めるのです。それが、体験上つかんだ目安です。

子供によっては、もっと長くかかる場合もあります。予定期間が過ぎれば、エスカレーター式に卒業していくわけではありません。時間の経過がポイントなのではなく、本人がそこで何をつかみ、どう変わっていったかがポイントなのです。

私は、親に訓練を見せません。1~2ヶ月経ったところで「面会日」を設定しますが、訓練の場までは見せません。親が見れば、親の心が動搖します。あんなに大変なことをさせられて、○○ちゃん

は大丈夫かしら……。それが母親の感情でしょう。その後で、母親はこう思うのです——「かわいそうに。こんなつらい思いをしてしかし、親がそんな風に同情したからといって何の役にも立ちません。その同情を訓練途中の子供が感じとれば、子供は親に甘えるでしょう。それでは元も子もありません。

私達は、子供を親から隔離することに大きな意味があると考えています。これもまた、経験によって知りえたことです。

親が中途半端に介入することは、決定的に悪い影響を及ぼす。これは間違ひありません。

繰り返し言えば、親の力ではもはやどうにもならなくなつたから、他人である私達が子供達の前に立ちはだかっているのです。その子供達と私達の間に親が入り込んだら、その関係は崩れてしまします。

子供がどうしてもやめたいと言う。あるいはヨットスクールからの逃避を図る。その時子供は親に向かって、いかに自分がひどい所にいるか語るでしょう。逃避しようとしている子供は逃げて来た所を素晴らしいとは言いません。それを真に受けて親が動搖したのでは何にもならない。

親は口を出すな。1度任せたのなら最後まで子供に介入するな——私は、そう言い続けています。

それがヨットトレーニングのノウハウの、最も重要な柱の1つです。

それでなくとも、情緒障害を抱えている子供達の親は迷いややすいのです。

子離れできない親たちが、目に見えない糸で子供をしばっている

もう1つ、母親からの手紙を紹介しましょう。この手紙の中で、母親はしきりとヨットスクールに送り出した子供(中学1年生、男)のことを心配しています。

■手紙⑩——ヨットスクールに子供を送り出した母親のその後

「前略、先日は遠路お迎えをありがとうございました。

……入校以来、丁度1週間が経過したわけですが、どんな様子でしょうか。安じられます。昭彦(注・子供の名前、仮名)が出

かけた後の部屋を片づけながら、どんな気持ちで出かけたろうか(どんなに苦しくとも頑張るんだよと心の中で昭彦と自分に言い聞かせ)、昭彦もさぞや不安と驚きで眠れぬ夜を過ごしたことと思いました。

翌日、午後1時頃、昭彦より電話が入り"家に帰りたい"との言葉を受けた時には、本当に切なくつらい思いでしたが、精一杯の明るい声で"元気? 頑張るのよ!"と、何度も何度も言っておきました。そして、電話が切れてからヨットスクールの方に連絡した後、昭彦の苦しい胸の内が思われ、あふれる涙をどうすることもできませんでした……」

こういう手紙は、しばしば寄せられます。

中には子供宛の手紙の中に「かわいそうに、かわいそうに」と、そればかりを書いてくる母親もいます。

それらは一切子供には見せません。せっかく親から切り離され、1個の人間として裸の自分になりかかっているのに、そういう手紙を読めばまた断ち切れなくなってしまいます。

親にこういう感情があることを子供が知れば、ヨットスクールから家に帰った後で親を責めるでしょう。自分は行きたくなかったのにあんな所に送り込んで、と言うに違いありません。そう言って子供は甘えるわけです。

第9の手紙の母親は、子供が家に戻り、逆恨みをしていると言っていました。2か月間は長過ぎたのではないか、ヨット訓練が向いている子供と向かない子供がいるのではないか、ウチの子供は全然効果が上がりませんでした……。

2か月間はまだ途中です。本人が、私達の目をごまかしながら、表面だけ取り繕っている時点です。その取り繕いを1度、引きはがさなければならないわけです。それは大手術だと思って下さい。海は、ドラマチックな心のドラマを子供達に演じさせようとしています。子供が主役意識を持ち、この海と格闘し、乗り越えなければ終わつたと言えないのです。

第10の手紙の母親は、その後になってもう1通書いてきました。昭彦君がヨットスクールを卒業し、家に帰って後のことを見られたわけです。

「……昭彦がヨットスクールを卒業して、早3か月近くなります。おかげ様で元気に明るく登校しております。4月下旬には修学旅行に参加でき、楽しい思い出ができたようでございます。

また、5月からは月2回ずつのテストに追われ忙しい毎日。やはり中2の時、欠席していた部分の勉強の遅れを取り戻さねばなりませんので、かなり苦しいようです。

しかし、時々わがままが出ながらも、おかげ様で何とか頑張って、テストの結果も上位を保っています。

また、父親とも口をきかなかった以前がうそのように最近では少しの時間を利用して、2人で碁を打っております。そんな姿にうれしくて感激で一杯でございます。ヨットスクールにお預かり頂いた時の気持ちを親子共々忘れることなく過ごしたいと思っております。

本人は思い出したくないと申しますが、きっと困難に出会う度に、あの時の経験が生きてくると信じています……。

ますますの御活躍を心よりお祈り致しまして筆を置きます……」

実例をもう少し、挙げておきましょう。次の手紙は、ヨットスクールを脱け出し、しばらく行方がつかめなかつた女の子(高校生)の父親が、娘が帰つて来た後で書いてきたものです。

■手紙⑪—逃走した女子高校生の父親からの報告

「……さて、3か月ぶりに所在が判り、4か月ぶりに帰宅した娘の件ですが(注・ヨットスクールには1か月だけ居たことになる)、帰宅時は派手な服装、ハイヒールで戻り、3か月間またかなり芳しくない体験を経たことをうかがわせるような状態で戻つてきました。スナックで働いていたとか5人の男女が共同生活をしていたとか。色々と話してはいますが、どこまで本当の話をしてくれたのかは不明です。

とにかく当初の派手さは日毎になくなり、家に落着き、両親との会話も通常の通りできるようになり、昔日の反抗的態度はすっかりなくなりました。

ただ、日毎に生活が怠慢化し、当初の緊張感を失つてきました。貴校を卒業したものではないとの感じは否めません。帰宅後2週間ほどは自由に気ままに、思いっきり両親に甘えるに任せていましたが、将来のこともあり、娘の気持ちを問いますと、学校へ行きたいと申すので、さて、具体的にどうしたものか思案しました。

貴校に戻すことが筋道であることは、小生にも十分理解できます。ただ、娘は休学中の高校には戻りたくない様子ですし、親としても娘の知的レベルに対応しない同校に戻したくない気持ちですので、再度、別の高校の入試を目覚して受験勉強をやり直すということも選択対象として考えられる状態となりました。

貴校を卒業させることが娘の心理状態や自信に必要なことも思い、迷うところですが、貴校から逃走後3か月も経過している事実、勉強してみようという意欲も大切にしてやりたい気持(もつとも、これは貴校から逃れる方便とも解釈できますが)等々もあつて、娘に勉強に挑戦するよう、機会を与えてみようと決心しました。

大変、失礼とは存じますが、寄道をさせ試行錯誤であつても一応受験をさせてみよう、失敗に終ればまた貴校にお願いをしようという甘い親の心情からの選択です……。

帰宅後、しきりに貴校の話を、しかも親しみを込めて話をしました。ヨットに乗ることがいかに楽しかったか、しかし朝のトレーニングがいかにつらいものだったか。先生やコーチの話……等々、なつかしく話してくれました。"では戻るか"と言いますと"嫌だ"との答えが返ってきます。しかし、娘の心に貴校の生活がプラスに植え付けられていることは確かなようです。

惜しむらくは、ちゃんと卒業したという満足感があったなら、人生にもっと有益だったろうと思います。その点、誠に残念なことですが、将来ともに卒業の機会のあることを願っています(それが心理的なものであつてもよいと思いますが)……」

この父親も迷っています。

娘に対して腫れものに触るように接している様子が伝わってきます。この女子高校生が戻った家庭では、あらかじめ父権が失われているかのようです。

その後連絡はありません。どういう形で高校生活を送っているのか、中途でヨットスクールを飛び出してしまっただけに、気になるところです。その"弱さ"と、いつか必ず対峙せざるをえない状況がやってきます。その時、1か月間であったにせよ、ヨットスクールの体験がプラス効果として機能すればよいのですが——。

ともあれ、親はどうしても自分の子供を甘やかしがちです。父親は家庭の中で隠然たる勢力を誇示することによって子供に安心感を与えるべき存在であるにもかかわらず、逆に子供にふり回さ

れ、母親は優しさで子供を見守ればそれでいいのに、一線を越えて介入してしまう。

子供の言うことを、なんでも"ハイ、ハイ"と聞くことが優しさでもないし、子供に過分に物を与えることが権威を証明するものではありません。

こんなエピソードがあります。

あるジュニア・ヨットスクールが小・中学生を募ってアメリカ西海岸の、ヨット愛好少年達と交流を深めるツアーを企画しました。ツアーはすぐに一杯になります。アメリカへ行き、現地ヨット少年の家にホームステイするわけです。

毎年、夏休みに企画していたのですが、何度も繰り返すうちにアメリカ側から苦情が出てきたのです。その趣旨はこういうものでした—「日本からヨットを愛する子供達が来てくれるは大変うれしいことです。しかし、日本の子供達が持つて来るお小遣いは何とかならないでしょうか。アメリカでは子供にあげるお小遣いはごくごくわずかなものです。欲しい物があれば、貯金をするかアルバイトをして自分の力で買なさいと教えています。ところが、日本の子供達は夏休みのお小遣いだと言って 1000 ドルも持っているのです。これではこちらの子供達が動搖してしまいます……」

必要な経費の他に、日本の親は子供に法外なお金を持たせるのです。

物、お金を惜しみなく子供に与えることが、親の甲斐性だと信じ込んでいるが如くです。

また、こういうケースもあります。

ヨットスクールには、小さい時からおじいさん・おばあさんに甘やかされて育ったという子供が、随分やって来ました。ジジ・パパ達が孫をかわいがるのは、今に始まったことではありません。

しかし、昔のジジ・パパと今のジジ・パパ達が決定的に違う点が 1 つだけあります。昔—といつても、ほんの 20 年程前までですが—のジジ・パパ達は孫にお小遣いをあげようと思っても、余裕がなかった。その代わりに、気持ちを伝えたのです。お金ではなく、愛情であったり、老人の知恵から出てくる物であったりを孫に伝えていたわけです。最近は、孫の歓心をお金で買おうとします。それによって孫の喜ぶ顔を見ようというわけです。

子供は、その影響を受けるでしょう。

話が脇道にそれたようです。

軌道修正して、ヨットスクールに入って来た後の子供と親の話に戻します。

私達は、子供の様子を見ながら、入って 1 ~ 2 か月経った時点で、親との「面会日」を設けます。

親に合宿の近くまで来てもらい、一晩、話をしながら一緒に過ごしてもらうわけです。その時期をいつにするかは、子供の状態によります。

内にこもっていた子供が進歩欲求に目覚め、落ちつき始めたところが 1 つの目安になります。非行で親を悩ませた子供の場合は、海の上でヨットに集中し、イザという時でも人を頼らず活路を開ける段階に入った時が目安になります。

日常の動き、顔の表情などを観察しながら私達が決めるのですが、ここでもまた難しい親子関係に直面します。

こういう親であってはならないという場面にぶつかるわけです。

面会の場所は角屋旅館を借りることになっているのですが、翌朝、子供が朝の体操に出てこないことが時々あるのです。

たいてい母親が面会に来ている時に起こります。

子供が来ないので私が迎えに行くと、母親は前の晩とすっかり様子が変わっているのです。

こういうケースがありました。

私が迎えに行くと、突然母親が叫んだのです。

「人殺し！」

そして子供をしっかりと抱きしめて、離そうとしません。

恐らく前の晩に、子供からトレーニングがいかにつらいか、殴られることもあるれば蹴とばされることもある、皆にいじめられているんだ……等々を聞かされたからでしょう。

私達は、繰り返して言うように、確信を持ってそういう方法をとっています。情緒障害児に何が必要であるかを知っているからです。

しかし、母親は感情をたかぶらせて子供をそんな所に置いていけないとわめき、怒鳴るのです。その過保護、その子供に対する過剰介入が、子供にとっては本当は邪魔なのです。子供はまた、

母親の勢力圏に取り込まれ、その瞬間は保護の温かさを感じるでしょうが、やがてそこから逃れられなくなり、いらだち、苦しむのです。その繰り返しの中で親ではどうにもできなくなり、私達に預けたはずなのに、結局、この種の親は子から離れられない。親不幸の子供達ではあるが、それ以上に"子不幸"な親達もいるわけです。

確かに、親は子供に対する"親権"を持っています。しかし、それが行き過ぎれば、子供達に社会的な死をもたらしてしまう。そのことに気がつかず、人間の生物としての死だけを問題にする。

その母親は何度も面会を求め、子供宛に何通も手紙を書いてきました。文面はいずれも似たりよったりです。かわいい○ちゃん、ママを許して下さいね—そういう言葉で始まり、母親としてしきりに反省し、言い訳を書き、子供の安否を気づかうというものです。

もちろん、先にも書いたように、手紙は一切子供には見せません。この母親は子供にそういう手紙を書くことによって、自分の後ろめたさをぬぐい去ろうとしているのです。手紙を書き、許しを乞うことによって自分がラクになりたいだけなのです。

電話をしてきて、面会日はまだ先だと告げると幾度か電話口で泣き始めました。

親が子供から離れられない。

ヨットスクールに預けたことで、一見、突き放しているようで、実は見えない粘着質の糸で、がんじがらめに子供を縛っているわけです。

私は、強引に子供を引き離し、ヨットスクールに連れて帰りました。子供は、登校拒否から家庭内暴力へと進んでいった中学1年生の男の子でした。

最後の最後まで、子供につきまとって離れないケースもあります。ある母子家庭のケースです。

中学3年生の女の子が、ある日、母親と一緒にヨットスクールにやって来ました。仮にF子と呼んでおきます。F子は非行を重ね、補導歴もあったようです。

F子はヨットスクールに比較的長く滞在していました。

直りが遅かったせいではありません。トレーニングを重ねるうち、F子は一緒にやっている女の子達、コーチ達にも心を開くようになりました。間もなく食事の仕度も手伝うようにもなったのです。キッチンに立って、50人分もの食事を作る。女子生徒には、そういう仕事もあります。F子は、どうやら家に帰りたくないようなのです。すると母親が心配し始めたのです。

早く娘を家に戻すようにと、要求してきました。ところが本人は乗り気ではない。もういいだろうと、とにかく1度家に帰りなさいと言うと、わかりましたと言って帰つて行くのですが、また遊びに来てそのまま居つてしまふ。

そんなことが何度も繰り返されました。中学を卒業して、高校受験はチャンスを逃したから、F子はどこかで仕事を見つけたいと考えました。母親はしかし、家に戻つて来いの1点ばりです。F子は絶対に帰りたくないと言う。

結局、私がF子の就職先を見つけました。有名な製菓会社でしたが、F子はサッパリした表情でここを去つて行きました。これで一件落着と思ったのですが、そのうち母親から私の方へ連絡が入り始めたのです。

「あの子はまた髪を染めて仕事をさぼり、どうしようもない生活をしている……」

「以前よりももっと悪くなつたようだ。私はこの前会いに行って見ているから知つている……」

そう言つわけです。

まさかとは思いましたが、1度時間を作つて様子を見に行くと、別に髪も染めず、普通の明るい女の子の顔で元気に仕事をしている。母親からの電話のことをF子に言うと、実は母親が彼女の仕事場に來つては何だかんだと言って帰るのだと言う。

これは子供の親離れの方が、親の子離れよりもスムーズに、早く終わつた例です。

そして親の問題だけが残つた。

親子間の、目に見えないからまつた糸は第二反抗期を過ぎたら親の方から切るべきです。

全ての糸を切る必要はないのです。愛憎入り混じり、すっかりとこんがらがつてしまつた糸を、ツンと切ればいいのです。子供は社

会の中で生きていく精神＝テクニックさえ身につければ、しっかりと生きていくものです。

ヨットスクールに入って来た子供、そしてその親。両方に抵抗がある。その抵抗を、私達は強行突破します。

そして、さらに次の段階に進もうとするのです。

VII章 親は何をすべきか（前）

頭が悪いのではない。頭を働かせるコツを知らないだけだ

「クマ」が、そもそもなぜ「クマ」と呼ばれるようになったのか、多分、そのもつりとした体つきや動き方が熊を思わせたからだと思うのですが、「クマ」は中学2年生の時に登校拒否症状を表し、以後悩み続けて戸塚ヨットスクールにやって来た時は20歳を過ぎていました。

「クマ」が初めて私の前に立った時、既にすっかり気力を失ってしまったような顔に生氣はなく、疲れ果てた体を重たそうに引きずっていました。

彼は自分のことをあまり語らない方でしたが、断片的な話を総合していくと、最初は何となく学校へ行くのが嫌になり、休みがちになった。どこか生真面目なところがあり、ずるずると学校を休んでしまう自分を責めるような面もあったらしい。高校に進学することはしたのだが、やはり休みがちになり、同時にクマはそういう自分の心を立て直そうと少なからず努力してきたと言うのです。

カウンセラーの所へ行き、回復のきっかけをつかもうともしたし、精神科医の所へも通った。催眠療法を受け、それでも効果がないと知るとヨガ道場へ。そういう消極的な方法ではダメなのではないか、厳しく激しいスポーツをやってみようと空手を習い始めた。それも長続きせず、しかし、家に閉じこもりがちであってはいけないと自らをせきて、一時期、旅行ばかりしていたとも言うのです。

それでも思わずなく、もう他に方法はないと思ったところから、完全に家に閉じこもってしまった。こじれにこじらせて、母親がヨットスクールへ連れて來たわけです。

クマは、すさまじい泣き声を上げる男でした。

ヨットスクールまで一緒に来た母親が「じゃあ、帰るよ」と席を立ち上がった時が、クマの泣き声を聞いた最初です。

「ウワーッ」

と叫んだかと思うと母親にすがりつき、腕をつかんで離さない。そしてウーン、ウーンと泣くのです。

指を1本1本こじあけるようにして母親から引き離し、何はともあれ帰ってくれと言って母親を引き取らせ、まだ泣いているクマを

戸塚ヨットスクール

見ました。1人にされてしまったクマは相変わらず泣き続け、その内、その泣き声が少しづつ変わってくるのに気がついたのです。

お母さんがどうしたこうした言いながらしゃくりあげ、それが終わると床に仰向けになって手足を縮め、泣き声は小さくなつたのですがその泣き方は丁度赤ん坊が泣いているようでした。

そのままの状態で受け入れてはいかんと思い、ここは今まで住んでいた世界とは違うんだということをわからせておこうと、何も言わずに殴りつけた。普通、そのショックで一瞬、元の状態になるんです。興奮が醒めるわけです。ところが、クマは完璧に赤ん坊の状態になってしまっているようで、赤ん坊を叩いてもしようがないのと同様、何の効き目もない。

さて困ったと思っていると、しゃくりあげながらこう言うんです。

「水、お水……お水ちょうどいい」

それが3歳児のような言い方なのです。後から気づいたのですが、それは赤ん坊の状態から少しだけ成長した姿というわけで、水を飲むと顔つきがしっかりしてきて、しばらくすると一応20代の男の顔になってくる。

クマはヨットに乗せるまでが大変でした。

合宿を何度も逃げようとするわけです。最初は2階の窓から飛び降りた。正確に言うと飛び降りたという感じではないのです。あらかじめそうしようとを考えていた風ではなく、ごく普通に窓に歩いて行き、うっかり足を踏み外したという感じでひよいと飛び降りた。むしろ落ちたというようだったと、それを見ていたコーチは言っていました。

当然、足をケガした。しかしクマは、そのまま警察へ駆け込んだのです。

「保護を求める！保護を求める！」

そう言ったと言う。そう言う時は、しっかり20代の男になるわけです。

警察はクマを相手にしなかった。するとクマは「おれは成人だ。成人が保護を求めてるのに警察がそんなことをしていいのか！」しようがなくなって、そこに座らせ調書をとった。母親に連絡してメシも食わせ、さあこれでいいだろうと、調書をとった係官がポンとクマの肩を叩き、お前も頑張れよとか何とか言つたらしい。そのとたん、クマが例によって大声で泣き始めたのです。

私達は慣れますから、部屋の外でその泣き声を聞いても驚かない。しかし、係官はびっくりして、これはたまらん、とにかく早くヨットスクールへ連れ帰ってくれということになった。

クルマに乗せると、泣きながらクマは言うわけです。「ぼくが悪かったよお、お父さん、お母さん、助けてよお、ぼくが悪かったよお……」

足にケガをしていましたから病院へ入れた。

その病院でもクマは困り者でした。暴れるわけです。暴力をふるうわけじゃありません。廊下に出て、着ている物を皆脱いてしまう。素っ裸であっちウロウロ、こっちウロウロするわけです。そして、パンツを持って洗い場に行き、洗濯している。それを私達が行って、病室に引っ張ってくる。ベッドに腰かけさせると、今度は壁に向かって頭をぶつける。ゴツン、ゴツンと絶え間なく、壁に頭をぶつけている。本人は平気らしいんですが、隣の部屋の患者さんがその昔を聞いてたまらなくなってしまったらしい。何とかしてくれと。しようがないので頭をぶつける壁の辺りにふとんを当て、そこでやるようにと言うと、クマは素直に言うことを聞く。音の問題は一応解決したと思ったら、それでは面白くないのか、クマは立ち上がってトイレに行くと言う。ここでまた逃げられたらコトだと思い、トイレにまでついて行くと、クマはしゃがみこんで便器の水で顔を洗い始めた。

そんな状態なんです。医者もさすがに困ったようで、足の手当はしたからもう連れ帰ってくれと言う。

合宿所へ戻っても、とにかく逃げようとする。縛ると、なぜかほどくのが上手で、いつの間にか自由に歩き回っている。あるコーチがクマを風呂に連れて行った。ヨットスクールがよく世話になっている角屋旅館の風呂です。素っ裸で風呂に入っているわけだからよもや逃げまいと思っていたら、そのスキをついて何も着ずに裸のままで逃げ出した。追っかける方も裸です。外へ出れば皆騒ぎます。その騒ぎの中でどこかへ逃げ込んだらしい。コーチは1度服を着て、姿が見えなくなった辺りで、どうせその内に顔を出すさと待っていると、目の前に飛び降りてきた。どうやら崖の上が何かに隠れていたようです。

最後の手段として、海に船を浮かべて、その中に閉じこめておいた。そこからなら逃げ出すことはないだろうと考えたわけです。クマは満足に泳げませんでした。

足のケガはちゃんと治っていませんからコーチはそこへ食事を運び、治療し、風呂にも連れて行くと逃げる所以、船の上で体を洗って

やる。本人は自分では何もしないのです。実に手間がかかるのです。

これほど世話を焼かせる男もいないでしょう。こんな奴はもうダメだ、家へ送り帰してしまおうと、親を呼ぶのは簡単です。しかし、それでは何ら解決にはならない。引き受けた以上、何とかしてやりたいわけです。複雑にいりこんでしまった心の中の配線の、ここだというポイントをつかみ出し、そこに息吹を送り込みたい。

コーチ達は皆、ヨットマンです。それぞれ、様々な形で海の体験を持っています。荒れる海に小さな木の葉のようなヨットで乗り出し、そこで色々なことを学んできた男達です。その上で、私のヨットスクールに駆けつけてくれた。十分な給料を払えるところまでまだいっていません。その余裕があるならむしろ訓練用のヨットを1台増やすことを先にしようと考える男達です。故障したヨットの修理代にまわそうとする男達です。

何が、彼らをここまでかりたてるのか。

自分の生活を犠牲にして、ヨットスクールに泊り込んでいます。

しかも、コーチ達は中途半端に子供達と付き合っているわけではない。彼らは冗談で子供達を殴っているではありません。本気です。本気になって、こいつらを何とかしてやらんと……と考えている。

コーチのすることが殴ることばかりではないのは、当然です。

クマは、コーチが運んで来てくれるメシを食べ、毎日包帯を替えてもらい、体まで洗ってもらって初めて逃げることをやめたのです。

足のケガが回復すると、クマはヨット訓練を始めました。

残念ながら、クマに関する詳細な"日誌"が残されているわけではありません。海に出てヨットに乗るようになったクマが、1日1日、どういう形で変わっていたのか、克明に書き記すことはできません。

しかし、ヨットに乗るようになってからクマが赤ん坊のように泣くことはなくなりました。幼児化して自分の世界に逃げ込むことが、まず消えたわけです。クマは約半年間、ヨットスクールにいました。最初の1か月はほとんど変化を見せず、2か月たち3か月たつ頃には、すっかりと変わっていました。

クマが最後に逃げ出そうとしたのは、クルーザーに乗って鳥羽の近くの島へ行き、キャンプを張った時のことです。かざぐるまの訓練を一通りマスターすると、次にクルーザーに乗り込むことになります。後で詳しく書きますが、クルーザーには通常3人が乗り込み、そこでチームワークをとりながらのヨット・トレーニングを積むわけです。クマはそのレベルにまでいったわけです。

ところが、島に着いてキャンプをしようという時になってクマの姿が見えない。また逃げたのです。小さな島ですから島から外へ逃げようもない。そのうちハラを空かせて顔を出すだろうと、コーチは待ちました。1日たち2日たち、クマは出てこない。3日目になって、コーチは地元の消防団に依頼して本格的に探す手はずを整えました。

そしたら、ひょっこり出て來たのです。

「ハラ減った」

案の定、クマはそう言いました。

島でのクマ失踪事件があつて以来、私達は、その島をキャンプ地として利用することができなくなってしまいました。また同じようなことが起きたら困るというわけです。仕方ありません。1人のために、その周辺の何十人もの人間が迷惑する。しかし、その1人を立ち直らせないことには、根本の問題は解決しないのです。そのための努力を誰かが払わなければならない。私とヨットスクールのコーチ達が、それをやっています。人を作る=第零次産業として、やっているわけです。

クマにとってはそれが最後の"事件"でした。入校してから半年後、クマは家に戻りました。今は家の仕事を手伝っています。

無気力。クマの場合、そもそも発端はそこにありました。それが登校拒否に至り、年と共に益々こじらせていったわけです。このタイプの子供は、決して頭は悪くない。クマにしても色々なことを考える能力は持っていました。自分で自分を救おうともしたわけです。それが失敗に終わる度に、ますます脱力感に陥り、ダメになっていく。頭を働かせようとはせず、逆に幼児化していく。

無気力、登校拒否の子供達の場合、従って、考えたり、頭を働かせるきっかけを強制的に与えることが、元に戻す1つのポイントになります。

かざぐるまに乗っている子供を、あえて海に落とす。ヨットを転倒させる。理由があるからです。子供にとってそれは恐いことです。最初はなぜかわからず、しかし何度も繰り返されるうちに子供はいやおうなく考え始めます。なぜなのか。ギリギリの状態で頭が回転し始めるわけです。

ヨットスクールに来る前はクラスでも成績が1番悪かった子供がいました。スクールで2か月ほど訓練し学校に戻ると、授業に遅れていたことなどハンデにならず、みるみる成績が上がつていった例があります。

私はそれを不思議だとは思いません。

その子供は、ヨットスクールに来る前は頭が悪かったのではなく、頭を働かせ考えるコツを知らなかっただけなのです。海の上では体を使いながら同時に頭を使わなければいけない。考えなければ転覆が待っているだけです。やがて頭は回転し始め、1度動き出せばそれを使うことを覚え、そこまでいけば、後は頭は使えば使うほどよくなる道理です。

無気力タイプに見えた子供が、思わぬほどの芯の強さを見せる

私の記憶に印象深く残っている子供達はまだたくさんいます。

「アサシオ」も、「クマ」と同じように典型的な無気力少年の1人でした。

体が人一倍大きく、性格は優しいというより気の弱いところがあるといった方が正確でしょう。アサシオは、中学時代、同級生の誰よりも体が大きかったはずです。そのまま相撲の世界に入つても通用するのではないかと思われるほどの立派な体を持っていたのです。

そして彼は相撲部屋に入ったのです。しかし、それは彼にとっては逃避だったようです。学校生活がうまくいかず、かといって何をする氣にもなれない。家に閉じこもつばかりいた。周りから、いい若いモンが何をしているのかと言われ、それならオレは相撲とりになつてみると虚勢を張つて相撲部屋に入ったわけですが、ただ単に体が大きいだけで通用するはずもありません。2年ほど下積みをしたのですが、結局、芽も出ず気分はますます落ち込んでしまつた。家に帰り、また閉じこもつてしまう。

そのあげく、ヨットスクールに来たわけです。体はどうにもならないくらい肥満していました。動作はのろく、それですぐに「アサシオ」と呼ばれるようになったわけです。

心にぶ厚い雲が覆いかぶさっている。無気力少年達は、皆そうです。それを自分では取り扱うことができず、焦れれば焦るほどそれが重くなっています。親は、その雲を取り除くことはできません。

「アサシオ」にとっては、減量も1つのテーマでした。放っておくと、人の何倍もの飯を平気でたいらげてしまう。その上きちんと動けばまだしも、コーチ達にけしかけられても自分の体が思うように動かない。アサシオの食べる量は厳重にチェックしました。

同時に激しいトレーニングを課していく。

アサシオの場合、体つき、顔つきが変わっていくのにさほど時間はかかりませんでした。1か月経つ頃から腹の辺りに不気味なほど溜まっていた脂肪が落ち始め、そうなれば海に出てヨットに乗ることも楽になり、2か月経つ頃には精悍な1人の男として見えるようになったのです。

運動能力の点で比べると、無気力、登校拒否タイプは、非行タイプに比べれば明らかに劣ります。

窃盗、暴行、時には覚醒剤までに手を出し、高校生で街を風切って歩くタイプの子供はすばしこさを持っています。コーチの目を盗むのもこのタイプで、要領のよさでははるかに登校拒否タイプをしのぎます。子供達だけの生活の中でうまいこと立ち回り、どこでどうやって手に入れたのか、菓子などを持ってたりするのも、どちらかといえば非行タイプの方です。食事の時も、彼らは真っ先に食べたいおかずを自分の周囲にかき集めてきます。

ところが、クルーザーによるトレーニングに入ると、私達は意外な発見をすることになるのです。

ヨットスクールで使っているクルーザーは5人乗り、長さ約6m、エルブ20と呼ばれているヨットです。同じクラスの中でも、操船が1番難しいタイプのクルーザーです。かざぐるまもそうですが、わざわざ難しいヨットを選んでいます。理由はかざぐるまの場合と同じ、改めて説明するまでもないでしょう。

かざぐるまを一応乗りこなすようになり、ヨットと海、風の関係などを体で覚えた子供達は、その次のステップとしてクルーザーに乗

り込み、沖合に出て行きます。うねりのほとんどない湾ではなく、風も強く潮の流れも速い海で、生きいくためのノウハウを身につけるわけです。かざぐるまに乗り始めて、早い子供で2~3週間、遅い子供でも3~4か月でクルーザーに乗れるようになります。子供達が情緒障害児であることを考えあわせると、これはかなり早いペースと言えます。普通のヨットスクールであれば、その何倍かの時間がかかるでしょう。

クルーザーの場合、乗り込む子供達にはそれぞれ役割があります。キャプテンを1人決め、他はクルーになります。沖合に出た場合、クルーが力を合わせないと波を乗り切ることができません。また、キャプテンがよほどしっかりしていないと、すぐ危険に直面します。帆をどうするのか、舵をどうするのか……海の上の気象条件に合わせて次々に決断し操作していきます。

かざぐるまに乗るのには"独身者"の気やすさがありますが、クルーザーの場合は"家族"を抱えたしんどさがあります。チームワークをとらなければいけない、各自の責任を全うしなければいけない。キャプテンはリーダーシップを発揮しなければならない。そこに社会性が出てくるわけです。

クルーを組む時、キャプテンを誰にするか私達は考えます。クルーを統率できる人間でなければならない。きちんとヨットを動かせなければならない。その上、責任感が強くては困る。陸の上でトレーニングをしているわけではありません。ちょっと間違って海に転落すれば命にかかわります。天候の急変もあります。

こいつは頼りになりそうだという子供がいました。ヨットを操るテクニックを覚えるのも早いし、自分の手がすぐと、まだわかっていない子供に教えたりもする。ここに来る前はだいぶ暴れていた子供ですが、ヨットには夢中になってくれた。この子だったらキャプテンをやらせても大丈夫だろうと、私達は考えたわけです。

昨年、4隻のクルーザーで外洋に出たがありました。コースは知多湾を抜けて外洋に出ると一路南下する。潮岬の沖を通って奄美まで行き、夏季合宿をやろうというわけです。

コーチが乗ったヨットを中心に無線で交信しながら進むわけです。その時に、低気圧に巻き込まれました。

風雨が徐々に強まります。そういう場合どうすればいいか、必要なことは全て覚え込ませてあります。お互いに連絡を取り合いながら位置を確認していく。

そういう時、キャプテンの"力量"が問われてきます。機敏に状況を判断し、それに合わせてクルーを指揮し、ヨットを動かしていかなければならぬ。勇気を持って自然に対峙しなければ負けてしまう。クルーの安全を第1に考えながら海をどう乗り切るか、キャプテンの力量次第なのです。

風雨がさらに強まってきた。風速が20mを越え、完全なシケになりました。私達のヨットから子供達のヨットに向けて指示を出しています。向こうからも刻々と状況を知らせてくる。

私達のヨットの他に3台のヨットがいるわけです。どの組は何も言わんでも大丈夫だろう、あそこの組はちょっと心配だ……私達は今までのデータをもとに予測をたて、最も心配なヨットとの交信量を多くしようとしていました。

ところが、意外なところから無線が入ってきたのです。

「救助願います！ 救助願います！」

声はうわずつてしまっていますが、それが誰であるかすぐにわかりました。1番頼りになるだろうと思われていた男です。

事情を聞くと、マストが倒れそうだと言う。私達はすぐに指示を出しました。セールを降ろして小さいセールに張り替えろ、と。

「できません！」

そういう声が返ってきました。

「バカヤロー、死にたくなったら、セールを張り替えるんだ！」

「できません！」

「マストを倒したくなかったら、やれ！」

「不可能です！」

そのヨットの他のクルーの顔を思い浮かべました。普段は目立たず、頼もしそうな子供ではない。しかし、迷っている時間はありません。キャプテンに向かって言いました。

「お前はもうキャビンに引っ込んだれ！」

そして無線でクルーを呼び出したのです。この少年は、マストが折れたと言う。

「倒れたマストで船体に穴が開いてないかどうか、確かめろ！」

そう指示しました。間もなく返事がきました。

「大丈夫です！」

「それならOK。ヨットは沈まない。体をロープでしっかり結びもちこたえろ！」

この少年の方が、修羅場で思ひぬ落ち着きを見せ、機敏に動いてくれたのです。

自分が生きるか、死ぬかという瀬戸際に立たされたのです。できる限りのことをしなければならない。死にたくないれば、最後の力を出すほかない。そこで「不可能です」と言ってしまえば負けです。確かに恐ろしいと思う。風に揺れる中、這って行ってセールを降ろなければならない。危険です。しかし、それをしなければもっと危険なのです。

そこで、全てが問われます。判断力、決断力、実行力。逃げ場のない状況に追い込まれた時、飾りを排した、人間の本当の姿が見えてします。つまり、その人間の精神力がさらけ出されるのです。

その航海では、もう1人のキャプテンが、途中恐くなつて舵を手離してしまった。そしてデッキにうずくまってしまった。これもまた意外でした。他の3人のクルーに舵を持たせた。

それまで、どちらかといえば無気力タイプに見えた子供が、思ひぬほどの芯の強さを見せてくれるわけです。

カチン、カチンになった心は、ぬくもりだけでは元に戻らない

クルージングで暴風雨に巻き込まれることは、滅多にありません。

しかし、だからといって常に海が安全ではないのです。波も見えない、一見、静かな海であっても、やはり海には海独特の試練が待ち構えています。ロープの扱い方、舵のとり方、帆の状態……細心の注意を払い常に理性と勇気を持っていないと、海は突然、恐るべき自然に変わるわけです。誤って海に転落する。ヨットはすぐにその地点に戻ることはできません。潮の流れは速く、風もまた吹いているのです。

クルーザーによる航海までできるようになると、子供達はもうすっかり、ヨットスクールに入ってきた頃とは変わっています。

真剣に力を出さなければ生き抜けないこともあることを体で知るからです。誰も助けてはくれない。甘えられない。自分の力で乗り切っていかなければならないことに気づくわけです。閉じていた心は、いやおうなく開き、そこに海の風が吹き込みます。世の中の半分しか見ていないかった瞳は大きく見開かれ、あらゆるもの正面から見つめられるようになる。

子供達の顔が変わってくるのは、当然のことです。

1つ、2つ、手紙を紹介させて下さい。

■手紙⑫——卒業生の父親からの報告

「肅啓 涼秋の候、朝夕はめっきりと過ごしやすくなつて参りました。早速お手紙を差し上げるべきものを雑事に追われ、心ならずも延び延びとなり、申し訳ございません。

本当にありがとうございました。

洋一(注・仮名)が元気いっぱい、1人で飛び起き、さっと制服に着替えて食卓にやって来ます。一家5人、早朝の食卓を朗らかに囲めるようになりました。

今日は私の休みの土曜日です。中学生らしい生き生きとした表情で"はい、行つてしまーす"などとおどけながら玄関を出て行く洋一の姿を目の前にして、感謝の気持ちで一杯です。

仕事柄、相変わらず夜遅くの帰宅が続いておりますが、洋一は就寝時間ぎりぎりまで私を待っていては学校のことを話してくれたり、宿題のわからぬところを聞いたりして、安心したようにすと寝入ります。ヨットスクールにお世話になる前は私を避け、おどおどしていた姿がうそのようです。(この様な親子関係につきましては、その責任は私の側にあったのですが.....)

最近の洋一の様子をお伝えするのに、洋一の話してくれた出来事を書き添えます。

"ぼく腕相撲、クラスで1番強かったよ！"ヨットスクールにお世話になる前は、2、3回の腕立てがようやくだった子が.....。夏に面会に参りました時には、女房にもかなわなかった子が.....。(今では、女房は勝てなくなってしまいました)

"学校って、すごく楽しいんだ。ぼくのクラスは1番いいクラスだよ。先生のあだ名は火星ちゃんって言うんだ"とか"先生は優し過ぎるよ。今日ね、掃除の時クラスの子が、どうしてぼくらだけ掃除する

んだよってなまけようとしたら、先生が、おい洋一ケン、頼むよだって。ぼくはやったけど、先生もっと厳しくなくっしゃ"

などと話してくれます。

洋一が寝た後、夫婦で話をしながら、あの洋一が変われば変わるものだと思わず笑いが込み上げてきます。洋一の登校拒否の原因は、私達夫婦、特に私の生活の乱れ、自己を厳しく律していくことが十分でなかったと反省し、家庭生活の再建に取り組んでおります。

洋一の元気になった姿を見るにつけ、コーチの皆様の昼夜をわかつたぬ御努力にはただただ頭の下がる思いです.....」

こういう手紙を、何十通、何百通とももらいました。

ここに書かれている洋一君は、ヨットスクールでは「バンビ」と呼ばれていました。目がバンビのような男の子でした。気が弱く、マザコン。学校へ行けなくなりヨットスクールに来た当初は、ことあるごとに「首を吊るぞ」と言っていました。1度、本気で首を吊りかけたこともあります。

もう1つだけ、本人から来た手紙を紹介させて下さい。高校時代にヨットスクールにやって来た女の子がここを卒業して仕事をし始め、書いてきたものです。

■手紙⑬——ヨットスクール卒業生からの報告

「お元気ですか？私は元気で働いています。仕事にはだいぶ慣れましたが、慣れた分だけどんどん嫌な事が増えていくみたいです。従業員の間の問題とか.....。

でも仕方ないんですヨネ。どこでも同じだもの.....。○○、△△、××(いずれもヨットスクールにいる女の子の名前)、皆元気ですか？よくヨットスクールに居た時の事を思い出します。ヨットスクールに居た時の方が楽しかったなあーなんて勝手な事を思う時もあります。甘えてるんでしょうけれど、寂しくて、寂しくて仕方ありません。

それでも甘えてなんていられませんよネ！ヨットスクール根性で頑張らねば！！

事務所にもなかなか行けなくてごめんなさい。奥様はじめ皆さんに会いたいんだけど、ヨロシク言っておいて下さい。近いうちに必ず伺いますので。

また生徒増えたんでしょうね。台所の方はてんてこまいじゃないですか？合宿所に全員寝られます？キューキュー詰めなんでしょう、きっと。もうそろそろ海も冷たくなってきたんじゃないですか？体に気をつけて下さいね。もう今年も2か月足らずで終わりです。1年なんて、本当にあつという間ですね。ヨットスクールも今年は、本当に色々なことがありましたね。これからは無事に過ごせる様、祈ってます……」

もちろん、私の元に届くのは、こういう手紙だけではありません。

途中でヨットスクールを逃げ出し、そのまま家に閉じこもり、あるいはまた元の非行グループと付き合い始め、以前と何ら変わりはないのではないかという不満の手紙もあることは、既に書いた通りです。私としては、もう1度ヨットスクールに送り出してくれれば、最後までこちらに任せてくればと思わずにはいられません。

もとより、戸塚ヨットスクールがあらゆる面で完璧だとは考えていません。あらかじめ理想に近い形でヨットスクールがあったわけではなく、1つ1つ試行錯誤を積み重ね、その経験を糧しながらよりよい方向を模索してきたわけです。

例えば、非行タイプの子供には1つだけ特有の難しさがあります。

ヨットスクールに入って来て3か月ほど合宿生活に入ります。それなりに効果を上げ、卒業します。ところが、彼が帰っていくところには以前と同じような仲間達がいるわけです。顔を合わさないわけにはいきません。子供には子供の付き合いがあり、そのことを無視するわけにはいかないでしょう。

どうしたらいいか。色々な方法を考えました。その1つとして、2度に渡ってヨットスクールに入れるという方法があります。

1度入り、適当な時期に帰します。子供は仲間達と会い、色々な話をするでしょう。自分がどういう体験をしてきたのか。その上で自分なりの生き方ができれば問題ありません。しかし、恐らく元の仲間に引きずられてしまうでしょう。子供なりのメントもあります。その段階でまた、ヨットスクールに入れるのです。

それを見て仲間達がどう考えるかはどうでもいいことです。再度入校して、2度目に帰す。そこで仲間と付き合いたくない理由ができます。こんなことしたら、またヨットスクールに入れられてしまうから——。

そういうやり方をさせたケースもありました。しかし、この方法がベストであるとも考えてはいません。子供達は1人1人、個別的な事情があります。まだまだ試行錯誤を繰り返していくかなければならぬだろうと思います。

こういうケースもあります。

子供は医者からガンであると宣告された。しかし絶対そんなはずはない、ヨットスクールで鍛えてくれと言うのです。私はとっさにその親の言うことよりも、医師の判断を信じました。そういう子供は預かれないとお断りしたのです。しかし、再三の要望がありました。今にも死にそうな子供をヨットスクールに預け、親はその子供に生命保険をかけておく、などというケースもあるのです。私は拒絶しました。

しかし、にもかかわらず、どうしてもと言うのです。それでは1度、ヨットスクールへ連れて来て下さいと言いました。こちらで医者に診てもらおうと思ったわけです。その子供を検査してもらったところ、親の言う通りガンでも何でもなかった。そういうこともありました。初めに診た医師の誤診だったわけです。と同時に、私達も間違っていたわけです。"医師の神話"を、はなつから信じていたという間違いです。

事実を確認し、直視していくというところからスタートしなければいけない。子供達がどういう状況に置かれ、どういう状態にあるのか。それを見極めた上で、私達は子供達の心の世界に入っています。その入り方は厳しさを伴うものですが、それについては間違ってはいないと、信じています。

冬の海。子供達はウェットスーツにライフ・ジャケットという姿で、ヨットに乗っていきます。手をカバーするものは一切ありません。素手のままロープを操作し、ヨットを風に乗せようとするわけです。冷たいのは当たり前です。1～2時間の訓練をする間に何度も海上に転落します。昼食時になると、子供達はカチン、カチンになって海から帰って来ます。

私達はそれを全く心配していません。冷たさは火があればやがて解決します。お昼ごはんを食べ終わる頃には、皆元通りになっています。子供達の体とは、そういうものです。

しかし、1度カチン、カチンになってしまった心は、温かいぬくもりだけでは元に戻らないのです。冷たい冬の海にも似た厳しさが必要です。そこで生き抜くことで、心の中に火がつくのです。

人間の尊厳とは、作り上げていくものであって誰にでもあらかじめ備わっているものではありません。子供は、まだ大人(=人間)になる途中であり、人間の尊厳を身につけるプロセスにいます。いわば、未完成の状態です。その子供に、必要以上におもんぱかり、例えば"愛"というあいまいな感情をかぶせてことたれりとするのは間違います。"愛"それ自体を否定して言っているのではなく、単にそれだけで子供をくるめば"尊厳"に値する人間ができるるものではないと、言いたいのです。

親が子供に対して与えることのできない厳しさを、私達は子供達に与えようとしています。

1つ、告白しておきます。

ヨットスクールの子供達をヨットに乗せ、知多湾へ初日の出を見に行ったことがあります。そのヨットには私自身の子供も乗っていました。いよいよ初日の出を拝む時になって、クルー全員が我勝ちにマストによじ登り、鈴なりになったのです。バランスの悪いヨットですからたまりません。たちまち転覆し、子供達が海に投げ出されました。私の眼中にはその時、自分の子供しかありませんでした。

他人の子供より自分の子供——。

そう行動してしまう自分の不完全さを思い、自分が当たり前の俗物であることを再認識し、同時に"父親"という立場の甘さを知りました。

自分で自分の子供を本当に厳しく鍛えることはできない。他人だからこそ、できることがあるのです。子供達を当たり前の人間にするために、です。

VIII章 親は何をすべきか（後）

ほんの小さなきっかけから、子供たちは深い淵におちこんでしまう

ごく最近の話を書きます。

今、この文章を書いているのは昭和 58 年 6 月 11 日です。

正確に日付を記したのは、今の時点から 17 日前、5 月 26 日に戸塚ヨットスクールのコーチ 6 名が愛知県警に逮捕されたからです。逮捕容疑は、この春、ヨットスクール前をオートバイで暴走していたいわゆる"暴走族"に対する暴行です。

この"事件"そのものよりも"戸塚ヨットスクールのコーチが逮捕された"という事の方が大きく報道されました。その後、ヨットスクールをやめていく子供達が続出しているという報道も流されました。

しかし、わざわざ言う必要のないことだとは思いますが、ヨットスクールはそのままの形で続いている。残ったコーチ、さらに人手を補うために駆けつけてくれたヨットマン達、そしてヨットスクール卒業生達によって、従来通りのトレーニングが続けられています。

また、この 17 日間のあいだ、ヨットスクールに関する悩める親からの問い合わせは相変わらず増え続けています。

新たにヨットスクールに入って来た人達もいます。その具体的なケースを書いておきましょう。

1 人は 30 歳になる男性です。ある大手企業に勤めるサラリーマン。高校卒業後その会社に就職し、ごく普通のサラリーマン生活を送っていた人です。家庭内暴力という形で問題が噴出し始めたのは 1 年前、その会社を辞めて以後のことです。

彼は会社では仕事に従事するかたわら、組合活動を続けていました。その事もあって、配転を命じられました。それが悩み始めたきっかけです。会社に行くのが何となく億劫になり、初めの内は休暇を利用して休んでいたのですが、1 日休めばそれだけ気持ちの上で会社が遠くなり、また 1 日、さらに 1 日と休みが増えています。子供の登校拒否と、基本的には何ら変わることがありません。

結局、会社を辞めることになり、かといってすぐに再就職先を見つけることはできません。そのために動き回れるくらいなら、前の会社を辞めることもなかつたでしょう。両親と同居していることもあり、

戸塚ヨットスクール

家でぶらぶらするうちに、ほとんど外出もしなくなつたわけです。それが昂じると、家庭内暴力へとエスカレートしていくケースがあるわけですが、彼もそのパターンです。

何度となく暴力騒ぎを起こし、ついに親は自らの手で問題を解決することを諦め、ヨットスクールに入校願いを出しました。

コーチが出向くと、彼はオノと鉄パイプで武装し家にたてこもっていました。やつとの思いでヨットスクールに連れて来て、また 1 週間ほどしか経っていません。

入校した日、彼は不眠を訴えていました。精神的に不安定な状態が続き、それに不規則な生活が加わっていたわけです。

翌日からすぐにトレーニングに入りました。朝の柔軟体操では子供達についていくのがやつの状態でしたが、かざぐるまを使ったヨット訓練に入ると、ガラリと様子が変わってきました。ヨットの儀装は 1 日でマスターし、2 日目にはかざぐるまある程度動かせるようになりました。

それに伴って、1 番変化が表れたのは、目です。わずか 2 日前には視線が落ちつかず、正面を見ることができなかつたのが、ごく普通の自然な視線を取り戻すことができたようでした。

不眠を訴えたのは、わずかに 1 日。これから刻々と変わっていくものと思われます。

中学 3 年生の男の子も 1 人、入校してきました。2 代目の「アサシオ」になるかもしれません。体重 117 kg。いわゆる肥満タイプです。一目見て、不健康な太り方だとわかります。学校にはほとんど行かず、家の中で暴れるという、登校拒否中学生の典型的なケースです。他の子供達と異なる点は、この子供が糖尿病を抱えているということです。これは入校してきた翌日の健康診断でわかりました。

家庭内暴力の子供は、入校時の健康診断で思わぬ病気が発見されるケースがしばしばあります。体の調子が思わしくなくても、彼らは病院へ行こうとはしません。親は何とか連れて行こうとはするのですが、本人が拒否し暴れるからです。その結果、放置され事態を悪化させます。

もう 1 人、ごく最近入ったケースは、23 歳の男性です。無職。数年前から家庭内で暴力をふるうようになり、父親、母親を殴る、蹴るという状態が続いていたということです。父親名義でサラリー

マン金融から金を借りまくっていたともいいます。入校する時、財布には30数万円の現金が入っていました。

続々と、入校希望者はやって来ます。

それが現代の日本の現実であり、また縮図でもあるのです。

その現実から私は目をそむけるわけにはいきません。なぜ、そういう子供達が生まれてくるのか、背景はたくさんあるでしょう。それをさぐっていくのも、決して無駄だとは思いません。原因を見つけ、その根っこを正すことによって結果を変えていくこともできます。しかし、その原因は目に見えているものではありません。殺虫剤をまけば害虫が駆除できるという話とは、自ずと別の問題です。

登校拒否、非行、家庭内暴力、無気力……そういう子供達を前にして、のん気に原因論争を闘わせている時ではないと私は考えています。口角泡をとばす熱弁を闘わしても、わずか1人の情緒障害児を救えるわけではありません。

そしてその情緒障害児(エモーショナル・トラブルド・チルドレン)は、特殊な環境、特殊な背景から出てくるものではありません。どんな子供も、ちょっとしたきっかけで、感情のトラブルに巻き込まれ、心をからめとられてしまうのです。

具体的な行動、何事かをすることによって、私達は子供達の心を開かせようとしているわけです。1人1人の子供を、私達が力を貸すことによって救い出そうとしています。

なぜ子供がこんな風になってしまったのか、どうしても信じられないと言う親は少なくありません。

例えばある母親は「小学校時代にはたくさんの友達もありまして、成績も1、2番を通しておりましたので、高校もトップ校へと、中学に入ったのですが……」と、嘆きつつ手紙を書いてきています。「中学2年の時、体育委員を無理やりさせられ、元々おとなしい性格なもので、クラス全員の前で大声で話すことができなかつたのでしょうか。クラスの者から馬鹿にされ、いじめられるようになったようです。それ以来友達関係もうまくいかず、勉強も手につかず、大変悩みました。中学に入り引越ししたのが、子供にとっては最悪だったのかもしれません。今ではすっかり自信をなくし、劣等感を持つようになってしまいました。苦しい毎日でした。何とか中3の終りまで学校に通っていたのですが、高校入試直前になって近くの高

校だとまた友達にいやがらせされるからと言って受験しなかったのです。遠くの私立高を1校、受けたのですが失敗致しました。このようなことが落ち込んでいく原因となり、暴力をふるうようになり、一時は大変なものでした……」

ほんの小さなきっかけから、子供達は深い淵に落ち込んでいくでしょう。

私たち大人は、その時代の文明、歴史に責任を持つべきだ

親はどうすべきなのか。

それも1つのポイントです。

基本に返れと、私はこの本の中で書いてきました。その基本とは「父親は強く、母親はやさしく」ということです。父権の喪失、それに伴って現われてきたきよう慢な母親集団。それが事態をよりいつも複雑にしているのです。

もっとシンプルに考えればいいのです。

ゼロ歳児から3歳、つまり子供が第一反抗期を迎えるまで、母親は限りない愛情を子供に注いで下さい。この間、父親はほとんど不要です。そして、子供が自分の足で走り出し、母親の引力圏から脱し始めてから第二反抗期まで、今度は父なる存在が子供にとって必要です。子供の背後に父なる存在がいることによって、子供は心おきなく前へ前へと進んでいくのです。

そして子供は第二反抗期を迎える。親は手を離せばいいのです。子供は自分の世界を作ろうとしている。自立しようとしているわけです、子供を解放すればいい。

この基本構造を踏み外さない限り、子供のエモーショナル・トラブルは起きないと言いましても過言ではないでしょう。どこかでこの構造が崩れると、それが尾を引くわけです。

男のすべき仕事は3つあります。

女に子供を生ませること、その妻子を養うこと。そして、家族を守ること。それだけです。

女は、子供を生むこと。そして3歳まで大事に、猫つかわいがりにかわいがること。明日のために男の世話をすること。それでいい。

それが基本です。その基本を外しさえしなければ、後は何をやっても大丈夫です。

父権の復活というと、時々こんなことを言う人がいる——メシのおかずは自分が1番いいものでなければならない。風呂に入るのは自分が1番でなければならない。自分だけは酒を飲むのだ。

……男はそういうことを言い始めると、すぐ身勝手に走る。そして"雷オヤジの会"などを作つてみたりする。

私が言っているのはそういうことではありません。雷オヤジを自称しながら、家族を守りきれていない人の方が多いのです。肝心なところで、子供のバックボーンたりえていない。家庭を支える物理的、精神的支柱でありさえすれば、それでいい。それを明確に確立することが、父権の復活につながります。

子供達の情緒障害は、父権の喪失という土壌から生まれやすい。それが経験的に知りえたことの1つです。

その結果として、現実に、ヨットスクールには問題を抱えてしまった子供達が、毎日のようにやって来ています。

子供達は不安を抱えている。その怯えが家庭内暴力へと繋がります。彼らは何に怯えているのでしょうか。自分を支えてくれるバックボーンがあらかじめ失われていることに不安を抱いているのです。1歩前へ進む度に心もとなく大地は沈んでいく。そういう不安です。あるいは彼らは、時代の先端を進んでいるのかもしれません。私の目には、地盤沈下しつつある家庭が見え、その向こうに崩壊しつつある日本が見えています。それをいたずらに、戦後日本社会の行きつく必然の末路だと言って、済ましてはいません。いかなる文明も隆盛し、成熟し、爛熟し、しかしる後没落していくのだと、したり顔でつぶやいていることも、私にはできません。

その時代に生きる大人は、その時代の文明、歴史に責任を持つべきだ——というのが私の考え方です。

だから私は、行動を開始した。

子供達を救い出すという形で、アクションを起こしているわけです。

ここ数ヶ月、戸塚ヨットスクールは、幸か不幸か、情報洪水に巻き込まれています。

テレビ、新聞、雑誌……、数えきれないほどの言葉が、このヨットスクールの周りを取り巻いていました。

戸塚ヨットスクール

それとほぼ軌を一にして、1人の青年がヨットスクールに入ってきました。今年の4月6日のことです。

年齢は20歳。男性。初めて見た時、私はこれはひどいと、つぶやきました。口はだらしなく開かれ、目は宙をさまよい、表情は歪みっていました。父親はサラリーマン。ある大手企業の管理職の地位にいます。

父親の説明によると——「息子は高校に入ってからおかしくなったんです。それまではごく普通の子供だったと思います。おとなしい性格ではありました。特に異常なものは感じなかった。それが、段々と家にひきこもりがちになり、落ちつきをなくしていった。暴れるようになったのです」

精神科の医者に診せると、精神分裂病の疑いがあると言われ、療養所に入れた。あらゆる療法を試み、様々な薬も飲まされた。ほぼ4年間、薬づけの生活が続いたわけです。そしてどうにもならず、父親は息子を伴ってヨットスクールにやってきました。ほんの2か月前のことです。

ヨットスクールは"魔女狩り"とも思える非難、中傷にさらされました。その嵐が吹きすさぶ中で、この青年は訓練を開始したのです。

最初、何もできませんでした。走らせれば誰よりも遅れて、まるで酔っ払いがふざけて走るようにしか、走れないのです。おまけに目は宙をさまよい続け、口は半開き。体操をやらせれば、腕立て伏せも一つとしてできない。その子供に対して、私たちは容赦しませんでした。とにかくヨットに乗れるだけの体力をつけさせよう、それまでは決して甘い顔を見せず、しごき続けよう、そういう決意のもと、子供と対峙していました。

写真を盗み撮りされたこともあります。

体が動かない日々が続きました。

私たちは子供に"私刑"を加えていると、書きたてられました。私たちは黙って、しかし自信をもってトレーニングを続けました。

つい数日前、その子供と父親の面会日を設定しました。

角屋旅館の一室に、父親は入りました。その後でコーチは1人の20歳になる青年を連れてきました。

「……」

父親は一瞬、けげんな表情を浮かべ、そして息をつまらせました。

人違いかと思ったのです。そこに立っているのが間違いなく自分の子供だとわかると、子供を激しく抱き寄せました。

父親は、子供のように大粒の涙を流しました。

「こんなに、こんなにたくましくなっているとは……」

「今じゃ、毎朝、柔軟体操の時に皆に号令をかけていますよ。ヨットにも乗れるようになったし……」

コーチの1人はそう報告すると、自らも涙を流しました。

20歳の青年は、もう普通の顔を取り戻していました。その目は、まっすぐ自分の父親を見つめていたのです。

そこにはカメラのフラッシュはなく、記者達の怒号は少し離れた合宿所の前で渦巻いていたのです。それが、この本の中で最後に報告する、哀しい事実です。

あとがき

現代人は病んでいる。

それが私の実感です。

私のやり方に対して世間がどういう形で指弾しているか、そしてマスコミ、警察等がいかなる態勢で介入してくるか、私は承知しています。そういうことも含めて、私は"現代は病んでいる"と思います。

戦後日本の教育は、子供を当たり前の人間に育て上げるという1点において誤ちを犯してきました。それに対して外科医的な立場に立っている私の目には、誤ちの構図があからさまに見えています。

かといって私は、戦前のような教育体制に戻せと言っているではありません。社会は日々、動いています。それが人間にとって"発展"なのか"後退"のかは別として、社会は変化しています。戦後40年近く経っています。その間に、日本という国は大きく変わってきました。急激に情報化社会が形成され、家庭そのもののあり方も変わってきました。そして、その変化に対応する教育の方法ができあがっていないのです。

かつて"家"は、あらゆることを学ぶ場でした。しかし、現代は違います。例えばテレビがあります。テレビは子供に対して不意のちん入者という形で入り込んでいます。外に出れば、実体のない情報だけがそこら中に浮遊しています。今の子供は、相対的に価値が低くなってしまった家を、背後に背負わざるをえなくなっているのです。その結果、自ずと子供達の心は複雑に入り組んでいくわけです。

そういう社会状況の中に、家庭の存在感は益々薄くなっています。その変化にどういう方針で立ち向かうのか。現代という時代を生きている全ての大人達が問われています。

私は子供達を放棄することはできません。耳あたりのいい言葉だけを並べて子供達を甘やかすわけにはいきません。社会状況が複雑であればあるほど、厳しさを教えなければならぬと思います。子供達は、今までよりもはるかに困難な道程を歩んで行かねばならないのです。まやかしは通用しません。理論だけを掲げても無力です。

この世に、人間として生まれてきたというただそれだけのことで、人間としての尊厳を身につけるのではない。人間としての尊厳は努力して身につけることによって初めて認められるものです。そのことを肝に命じて、子供に接するべきだと私は思います。

子供は今の社会の犠牲者であることも、書き添えておきます。教育者、マスコミ……等々、子供に対して何事かを語りかけている側が、あまりにも無責任な、その場限りの情報を流しているのです。その結果、子供達にどういう誤解、混乱を及ぼしているか、真剣に考えている人がいったい何人いるでしょうか。社会、文明に対する責任の自覚からスタートすべきだと、私は思います。

もう1つ、書き添えておきましょう。

戸塚ヨットスクールは株式会社です。そのことを知ると、ごく単純な人は"営利企業"だと言いたがります。あまりにもシンプルなその反応に驚かざるをえないのですが、言葉は、それを発した人間のレベルを物語り、その言葉は天につばする如く自分に返ってくるものだとだけ言っておきましょう。

あわせて、株式会社戸塚ヨットスクールの年間予算を記しておきます。

予算規模は年間約1億4000万円。それがマキシマムの予算です。支出はコーチ達の給料が月額で350万円、ヨット購入、修理、その他の材料費が400~450万円。その他、食費等が約300万円。毎月の支出が計1100万円ほどになります。年間支出が約1億3000万円あまりになります。

現状の規模、施設で満足しているわけではありません。私は現在の約10倍まで規模を拡大したいと考えております。それだけヨットスクールに入校させたいという親がいるからです。年間1000人の子供達を"卒業"させたいというのが私の願いです。コーチの数を増やすなければなりません。子供のケースに応じて、いくつかのコースに分けることも考えています。簡単に直る子供と、長期間かかる子供がいるわけですから、多コース化は必然的な要請になっています。

ヨットスクールを専門学校化することも、将来の方向として考えています。施設費等、膨大な資金を必要としますが、私はやり遂げてみせます。

現在、子供達全員の親からお金をもらっているわけではありません。様々な理由でお金を払えない人達は少なくありません。正直に書けば、子供達の約半数が無料に近い形でヨットスクールに入っています。それが実情です。営利追求しようにもできません。(飛鳥新社注：本書の校了の段階で「スクールの年間収入が2億4000万円」という新聞報道がなされました。計理を担当する戸塚夫人は、それを「作偽の数字」とコメントしています。詳しい数字をあげた反証は、戸塚校長が自由を獲得した後、他日を期したいと思います)

これが、株式会社戸塚ヨットスクールの現在です。

困難はついて回るでしょう。魔女狩りの如き非難の嵐が、既に私を襲っています。恐らく、私の逮捕はまぬがれないでしょう。その時点でのマスコミの反応は予想できます。しかし、事の本質を見誤らないで欲しい。"極悪人"戸塚を逮捕したことで一件落着したと思わないで欲しいのです。これを機会に、教育体制についての根本的な見直しを、国をあげてやって欲しいのです。私はへこたれません。私は自分のやるべきことを知っています。いかなる状況に追い込まれようと、私はヨットスクールを続けていきます。

最後に、ヨットスクールを支えて下さった皆様に、この場を借りてお礼を申し上げたいと思います。角屋旅館の岩本御夫妻、生徒指導の木村先生、整骨医の松本先生、またヨットスクールのコーチ達、事務所の方達……ありがとうございました。

私に様々なことを教えてくれた子供達、理解を示して下さった父兄の方々。心から謝辞を申し上げます。

ありがとうございました。

尚、本をまとめるにあたって飛鳥新社の高瀬幸途氏のお手をわざらわせました。感謝します。

1983年6月11日

戸塚 宏